918.6
Ta977k
00298624

자S46

著袋花山田

集全袋花

卷二第

編七外・師教舍田・緣

花袋全集刊行會

於東京帝國大學講堂（大正十五年夏）

918.6
Ta977k

国立国会
28. 6. 22
図書館

298624

花袋全集 第二卷 目次

序文（窪田空穗）……一
縁……三一
田舍教師……二九七
幼兒……六二六
げんげ……六四一
拳銃……六五一
ある死……六五九
記念會……六七六
幼きもの……七一〇
町より山へ……

解說（前田晁）

田山花袋といふ人

窪田空穗

田山花袋といふ人を思ふと、單に小説家といふだけではなく、廣い意味での文藝家で、文藝の全般に對して興味と理解とを持ち、それに宗教的の熱愛をそゝぎ、出來るだけ、何所までも徹底させようと、文字通りに不斷の努力をしてゐた人といふことが、はつきりと胸に映つて來る。

交渉の少なかつた私ではあるが、花袋といふ人を思ふと思ひ出されて來る幾つもの事がある。いつも素つ裸で、誰の前にも率直に自分を投げ出して見せる人だつたので、苟くも交渉があ

れば、何等かの印象を殘さずにはおかなかつたからである。

今はその一つを語ることゝする。

「時は過ぎ行く」が刊行された後である。私は或席で氏と落合つたので、その題の面白さをいつた。氏は直ぐに眼をかゞやかして、手眞似でその言葉を補ひながら語つた。

人は自分を自然主義者と稱してゐるが、自分の自然主義は、哲學的な、人生觀上のそれではない。單に表現上の手法に限つたもので、これを平面描寫と言ひかへてもいゝものである。それも果して何所まで可能なものかは見とほせない。出來る限り試みてみようと思つてゐるに過ぎないものである。

その平面描寫も、香川景樹から熊谷直好に傳はつてゐる所謂桂園派の歌論を、散文の上に移して試みてゐるものである。時

は過ぎ行くといふ腹の据ゑ方、これは桂園派の歌の腹の据ゑ方である。

氏は氣忙しく、斷片的に、かうした事を語つて、語り終ると、かゞやく眼と共に、はにかんだ少年のやうに顏を紅らめて、私が頷くと、快ささうに笑はれた。

時間とするとほんの暫くに過ぎない間の事であるが、これだけの事の上にも、文藝家田山花袋といふ人が、可なりまで現はれてゐるやうな感がした。

私の記憶にある田山花袋といふ人は、此の種の事の繰返しであつて、その他の何物でもなかつた。實に純粹を極めてゐた。耳から聞く田山花袋といふ人の行動も、私には、たゞかうした心を持つた人の、その心の現はれ、心の延長とのみ思つてゐた。今

もさう思つてゐる。

緣

東京都立中央図書館蔵書

緣

一

『もう我々には、青年といふ心持か全くなくなつたね。』

『さうだねえ。』

かう言つて、二人は今更のやうに顔を見合せた。隨分いろ〳〵な話もした。三年前には顔を赧らめずには言はれないやうなことも言つた。

『兎に角、かういふことを平氣で言はれるんだからねえ……それだけでも、もう我々は青年ではない。』

さすがに其頃が思はれるといふ風で、都から來た男は言つた。何となくあたりが振返られるといふやうな氣分が一室に充ち渡つた。戸外には秋雨が蕭々と降つて居た。

『三四年前までは、まだ、我々の後に新しい時代があらうなどとは思はなかつた。我々が新しい時代だつた。我々はせつせと新しい時代をつくつて居た。それが今ではもう我々の後に青年の群がある。』

『第一、心地からして違つて來た。』

と田舍の寺にかくれた一人が言つた。

二人は若い頃からぴつたりと心を合せて來た。互ひの境遇の相違から、考へも心の持方も大分違つて居たが、その親しい間柄はつひぞ今まで破れたためしがなかつた。都から來た男は寺にかくれた方の男の妹を妻にして居た。

大きな庫裡の天井は高かつた。二人の坐つて居る室の向うには、田舍寺に特有な廣い勝手が見えて、其處に鷄が二三羽餌をひろひながらコ、と聲を立てゝ居た。明放した勝手の大和障子からは靑々とした畠が見えた。

木犀の匂ひが古い室の空氣に微かに交つた。

『いつ頃から、さうした心持になつて來たか、それは自分でもはつきりと言ふことは出來ないねえ、君。それやねえ、君、辿つて考へて見れば、わからないこともないが、それがあるはつきりした動機とか事實から來たのではなくつて、いつの間にかさうなつて居るんだからねえ。』

都から來た男がかう言ふと、相手は笑ひながら、

『しかし戰爭に行つた頃から、大分、君の思想が變つて來たやうだつた。』

『戰爭？　戰爭に行つた影響はそれは確かにある。何しろ、砲彈の中を歩いたんだからねえ。影響がない譯には行かないさ、』と言つて、少し考へて、『それにしても、あの時分のことが思ひ出されるよ。チブスになつて、病院の蚊帳の中に寢て居た時、僕は君の此の寺のことばかり考へて居たからねえ……。いよ〳〵死ぬに決つたら、遺言を書いて、君の此寺に埋けて貰はうと思つて居たよ。』

こんもりとした此寺の杉山の中に暗い〳〵墓地があつた。草藪がいつもガサ〳〵と風に鳴つて、夕日が色附いた下草を微かに染めた。其の墓の中に自分の名の刻まれた一基の石牌！　かれはさういふ風に想像した時の事を思ひ出さずには居られなかつた。かれは續いてそれから經過した四年間のことをたどつて見た。

『自分の周圍の人の死んで行くといふことも、君、人間の思想には隨分關係があるものだねえ。』

四年間――其間に叔父も死んだ。兄も死んだ。かれは其度毎に味つた暗い感じを頭に繰返した。

都から此處まで來る汽車は三時間かゝつた。途中には別に見るやうなものはなかつた。電話の鳴る忙しい一室から、旅客の混雜と集る小さい停車場、いつも空いて居る二等室に入ると、かれは全く世から懸離れたやうな心持になつた。

それでも町の場末を駛つてゐる間は、黑い烟の簇々と立のぼる煙突が見えたり、トタン屋根の低い裏長屋の貧しい生活が見えたりした。直線の川に添つた眞直な路につゞいて、今度は櫻の栽ゑられた長い

土手が見えて、その向うの大川の流れの上に、白帆がチラ〳〵と並んで通つた。

川向うの紡績會社らしい工場から、眠さうな汽笛がボーと長く川にひゞき渡つて聞えた。

『都會――都會のひゞき。』

其の響も段々遠くなつて行つた。野には青々とした畠が續き、その緣をところ〴〵穉樹の疎らな林が縫つた。白楊で圍まれた新建の小學校の廣場には、生徒が鬼事などをして遊んで居た。

到る處の停車場の白い札は、その近所に名高い寺があつたり、桃の名所があつたり藤の名所があつたりするのを段々に知らせた。やがて汽車の響がゴーと高く鳴り渡る。と、其處に藻の靑く見える古い川がひらけて、橋の袂に藤棚のある涼しさうな料理屋の座敷がそれと見渡される。

をり〳〵通る町には、白壁や半鐘臺や中學校らしい建物が屋根の上に高く出て居る。

何も眼に留るやうなものはないが、平野らしい特色はないでもなかつた。春の淺い頃に、低い丘に固つて眞白になつて梅の咲いてゐることもあれば、げんげが眞赤に一面に咲いて居るのを見たこともある。それに、一時間、二時間、小さい停車場をも幾つか過ぎて、夕日が斜に空いた車室にさし透る頃になると、この廣い平野を緣取る環のやうな山々が、はつきりと紺碧の色を遠く其前に展げて見せた。『今日も山が見事だつた。此の線路には他に見るものはないが、山だけは立派だね、君。山を見ると、すつかり世の中のことを忘れて了ふね。』都の男は來る度に、かういふ風に田舍にかくれた友に言つて聞かせた。

汽車が其停車場に着くかなり前から、かくれた友の田舍寺のこんもりとした森は見えた。丁度其頃汽車は珊瑚樹や竹藪の多い村を通り越さうとしてゐるが、其處に來ると、かれはいつもきまつて立上つて網に載せて置いた風呂敷包を取つて膝の上に載せた。其中には新刊の雜誌や書籍や土產物や寺の娘にやる蕓子などが入つて居た。

埃の白い眞直な街道が線路と交叉して、南から北へとつゞいて居て、其向うに、夕日を帶びた町の家並が見えた。

段々近づくにつれて、寺のさまは歷々と眼に映つた。森の中に本堂が見える。庫裡が見える。山門から通じた長い舗石道がそれと指さゝれる。鐘樓の小さい釣鐘も見える。山門の白壁の塀は殊にはつきりと目に立つた。

停車場の驛員達は、驛長と言はず、助役と言はず、總てかれの顏に熟して居た。けれど別に言葉をかけ合つたことがあるのでもなかつた。『お寺のお客。』人々は汽車から下りる其姿を見ると、いつもすぐにさう思つた。仲賣の男は、

『何ういふ商賣をして居る人だんべい、』などと言合つて其後姿を見送つた。

二

停車場から近路を取つて、桑畠と寺の周圍の濠との間の細い路をたどると、篠竹だの、野椿だの、楢の低い穉樹だのがササ〳〵といつも音を立てゝ居た。

かれは濠を跨いで、其淋しい墓場を抜けて行つた。寺は常にしんとして靜まり返つて居た。落葉が本堂の前を舞つて通つたり、雨が閉め切つた黑い障子に降頻つて居たりした。鷄が餌をあさつて居ることさへ滅多になかつた。

庫裡の玄關の白壁にはいろ〳〵な落書がしてあつた。天氣の好い日には、何うかすると、其處に子供が二三人遊んで居ることがある。其中には屹度寺の一人娘が交つて居る。娘はさびしい寺の夫婦の唯一つの慰藉でもありまた誇りでもあつた。娘は色が白かつた。

娘は其時は屹度東京から來た叔父さんを逸早く見附けて、『父さん――東京の服部の叔父さんが。』かう言ひながら奥に駈け込んで行くのが例であつた。

しかし大抵は玄關の隣の狹いくゞりを明けた。古い埃の臭ひが先づ第一に客の鼻を衝いた。かれは案内をも乞はずにヅカ〳〵と上にあがつて行つた。時には細君が慌てゝ迎へに出て來ることもあれば、主僧が喜ばしい色を滿面に湛へて、『よく來たな、』と言ひながら、其儘座敷に連れて行くこともあつた。火災に逢つた本堂は明治になつてから新たに建てかへたものだが、庫裡は百年以前の建物で、何の室にも古い一種の臭が充ち渡つて居た。それに寺には寺男が居なかつた。

かれ等は夫婦の生活に必要な間だけ雨戸を明けて掃除した。二階や奥の間などはいつも雨戸が閉切つたまゝで、古い駕籠や佛書の入つた本箱や、歷代の什物の入つた古長持などで一杯になつて居る。

錆び果てたその古寺の臭、それが東京から來た客の氣に入つた。

今の此寺の生活の狀態に引較べて、客はいろ〳〵と主僧の身の上を考へて見ることがある。此寺も昔は榮えたことがあるといふ。境内に今もある不動堂、其前に十軒ほどある長屋、其長屋の中に殘つて居る白壁の崩れかゝつた家屋は、其の榮えた時分の名殘だといふ。其頃主僧は十七八で、玄關の傍の小僧部屋に起臥して居た。不動堂は先代が門前の繁榮を謀る爲めに、わざ〳〵成田から勸請したもので、參詣者の鳴らす鰐口の音は曾て絶えたためしがなかつたほどであつた。それに門前には湯屋が出來たり、料理屋が出來たり、白粉を塗つた色の白い女が出たり入つたりした。世話人の娘が同じ世話人の子息と駈落をして、近所に隱れて居たことなどもあつた。先代にも大黑ともつかず妾ともつかぬものが二三人は居た。丁度其頃は維新になつて僧侶の權威の全く保たれなくなつた時代であつた。主僧は寺の娘と戀に落ちた其時分のことをある時酒に醉つて客に話して聞かせた。其室は依然として元のまゝである。差向ひに恥かしいうれしい言葉を交した圍爐裏も其まゝになつて居る。

『色の白い、眼の際立つて美しい娘だつた、』などと笑つて主僧は話した。

『それから、門前の茶屋の女に調弄はれて仕方がなかつたものだ。夜などうつかり歩いてゐると、突然ぐつと抱緊められて、白粉くさい顔を押附けられた。それには困つた。』こんなことも言つて聞かせた。

何う見ても田舍寺の和尙さんといふ風はない。昔二人が早稻田の郊外や牛込の狹い室で感情的に話し合つた調子がまだ何處かに殘つて居た。葬式が來る度に、僧衣の上に金襴の袈裟をかけて、白足袋を穿いて、長い廊下を本堂へ行くのを見ると、何だか丸で別の人のやうに思はれた。歌を詠んだり、新體詩を作つたり、ファルケンベルヒの哲學史を抱へて、茗荷畑の中を學校の講堂に急いだ山崎雍之助とは何うしても思はれなかつた。

『山崎は矢張何處か暢氣なところがあるねえ。あれは幼い頃から寺の教育を受けた影響だねえ、』と其時分から夥伴の一人が言つた。それを都から來た服部清は、今になつても時々思ひ出した。清はその世に懸け離れた心を羨んだり尊んだり氣の毒に思つたりした。

十三四年の歲月は短かくはなかつた。さまざまの世態や事件が其前に展けた。明治の思想もいろいろな變遷を見せて、社會主義が起つたり、日露戰爭があつたり、自然主義が其萠芽を出し始めたりした。友達の群にも榮達したものもあれば、零落したものもある。しかしかくれた人に取つては、そんなことは何うでもないやうに見えた。寺の不動堂の高い緣には、矢張朝每に子守の唄が聞え、勝手のとやでは暗い中から鷄が曉を告げて鳴いた。

前の井戸端で顏を洗つて居ると、都に行く一番の上り汽車が、野に滿ちた朝日に白い煙を光らせながら、轟々といつも音を立てゝ通つて行つた。

清はこのさびしい寺の境內を歩きながら、いつも都の活動を思つた。活動の巴渦の中に居ては解らない活動の狀態が此處ではつきりと眼に浮んで來るやうに思はれる。電車の中にチラ〳〵する色彩や、其日其日の忙しい勤めや、片時も人の心を安ませまいとする物の響や、電燈の明るい光の下で見る美しい女の顏や、それらの中にイラ〳〵した自分の姿が其處にも此處にも見える、何處とも分らぬ町の狹い通りの角が見えるかと思ふと、今度は馬車で埋まるばかりに混雜した橋の上がちらと浮んだ。

二人はいつも酒を飲んだ。清は此處に來る時にはきまつて牛肉か何かを買つて來た。それをジワ〳〵やりながら、『何うもお寺でかういふ匂をさせてはいかんねえ。……何うも感じがよくない、』などと言ひながら、旨さうにしてそれを食つた。田舍には食ふやうなものは何もなかつた。鯉のあらひ、鮒のあらひ、それも何うかすると泥臭かつた。利根川で「あいそ」の獲れる時には、それを骨折つて町中を搜して貰つて、鹽燒にしたり、ぎよでんにしたりした。けれど一番旨いのは矢張晩春に獲れる鮎子であつた。時節になると、利根川の土手には、屹度鮎子小屋といふものが懸けられて、轆轤で卷き上げられる

やうに出來て居る大きな網を上げる度に、金色をした小さい魚が潑溂として春の日影に光つた。二人は散歩の次手に、其小屋に寄つては、いつもそれを買つて來た。

三

利根川を渡つて一里ほどの處に、清の生れた故郷の町があつた。清は雍之助をよく其處に連れて行つた。『僕の故郷はもう本當の故郷になつて了つた。家はあつても他人が住んで居るし、親類はなし、幼友達は皆な僕の顏を忘れて了つたし、何んなことをして歩いても構はない。』こんなことを言ひながら清は町の大通りを歩いた。

四辻の角に里程標が立つて居たり、種物屋の赤い暖簾に白く字が浮き出して居たり、呉服屋の店に小僧があくびをして居たりした。町の賑かな家並の處でさへ、軒の傾いた家屋が見えるほど町は著しく衰へて居た。

城址に續いた士族町はあらかた畠になつて居た。濠も耕されて田となつた。昔の屋敷で殘つて居るものには、農に歸した士族か小學校の先生が住んで居る。清はいろ〳〵と其頃の追憶を友に話して聞かせた。

清の生れた家はもうなかつた。しかし生立つた家は元の儘になつて居た。栗の樹もあれば竹藪もあつ

た。裏の土手下の濠には、葦だの、藺だの、雜草だのが網のやうに繁つて、それに午後の日影が明るくさし透つて居た。其處に佇んだ二人の胸には種々のことが取集めて考へれらた。

『我々がかうして連立つて、君の故郷に來て見るといふのは、面白いことだねえ。……人間と言ふものは、離れたり合つたり、合つたり離れたりして行くものだねえ。僕があの寺の玄關に居る時分、君が此處から小學校に通つて居たと思ふと、意味が深いねえ。人生には運命の糸の塊といふやうなものがあつて、それが彼方に引張られたり此方に引張られたりしてゐるやうなものだねえ。それを強く引張ると結んで解けなくなる。僕と君などは結んで解けなくなつた連中だねえ。もう、一生何んなことがあつても解けない連中の組だね。』

雍之助は袂からマッチを出して、卷煙草に火をつけながら言つた。

『本當だねえ。』

かう言つた清は、其後までも其時のことを忘れなかつた。強く引張ると結んで解けなくなる。結ばれかけて、何かの加減ですぐほどされて了ふものもある。結ばれる運命を持つて居ながら一生結ばれずに終つて了ふものもある。一度結ばれたが最後、もう何うしても解れなくなつて困るものもある。ぷつゝり切れて了ふものもある。『さうかな……この友と自分と自分の妻と……さうかな、一生何んなことがあつても解けない連中かな。』清はかう思つて見た。何だか其束縛が苦しいやうな氣もした。

ある想像がかれを利根川の渡場につれて行つた。其渡場には小さい小屋があつて、蘆荻が高く岸に繁つて居た。渡船は今出ようとして居た。自轉車を慌てゝ載せて居るものもあつた。船の中には此處等に見馴れない若い一人の庇髪の女が乘つて居た。其女は海老茶の袴を穿いて、細い蝙蝠傘を片手に持つて片手には薄い一册の書を持つて居た。

それは清が十年前に書いた『故鄕』といふ小册子であつた。其故鄕の田舍町を女は遠くからわざ〳〵見に來た。かれは複雜した糸の關係を考へずには居られなかつた。

歩きながら二人は其女のことを話した。

『また出て來るつて言つたが、何うしたねぇ？』

『來年になつたら、出て來るんだらう。山の中に引込んで居ては、淋しくつて仕方がないつてよく言つて來るよ……。來年になつたら、親が許さうが許すまいが無理にも出て來るつて此間も言つて來た。』

『一體あの二人の關係は何うなつて居るんだえ？　手紙にはそんなことは書いてないかえ？』

かう雍之助が訊いた。

『別に書いてはないが、矢張思つて居るらしいねぇ。けども今度出て來たら、まさか前のやうなことは無いだらう。山の中に一年以上もぢつとしてさびしく暮して居るんだから、今少し自己を顧みて見る

といふ處が出來たらうと思ふねぇ。それに、其點は僕も吳々も言つて遣つた――』

『けれど一體女が文學を遣ると言ふことはむづかしい話だねぇ。あの人の將來の爲めから考へて見ても、最初の過は改めるとして、田舍で相當な處に嫁いて了ふ方が幸福になる道だと思ふねぇ。』

『幸福と言つたら、さうかも知れん――しかし……』

かう言つて清は言葉を留めた。

少時歩いてから、

『僕はしかし出て來る方が好いと思ふねぇ。第一、田舍に氣に入るやうな相手があるやうな女ぢやない。それに第一歩は過つたにしても、東京に出て來て、自分も勉強するし、相手の男も眞面目に其問題を解決しようとするなら……二三年の後、双方の心持を聞いて見て、一緒にして遣つたつて差支ない。』

『それも好いだらうけれど……』

『理想に過ぎないかねぇ？』

『まァ、さうだね。』

と雍之助は笑つた。

『しかし、僕にはかの女を幸福にしてやる責任があるんだ。僕を便つて來た女、僕に一生の運命を託さうとした女、その女を單に藝術の犧牲にして、それで好いとすましてゐることは出來ない。僕は責任

を感じて居る。』

『しかし、それは君に責任があると言ふ譯ではない。君の藝術の材料になつたと言ふことは、さういふ事件を藝術家たる君の眼の前に廣げて見せたからだ。唯それだけだ。君には責任といふほどの責任はない。』

『さう言へば、さうも言へる。僕もさう思つて自から安んじて居る時もある。しかし實際のライフ――人一人の一生、それと藝術と何方が貴いだらうか。何方を重んじなければならないだらうか。……藝術家から言はせれば、無論藝術が貴いと言ふに違ひない。思ひあがつた藝術家の中には、人生は藝術の模倣だ抔といふものさへあるからなア。けれど僕は藝術家といふ名に空虛を感じて居る一人だ。何故、藝術家は普通の人のやうに全力を擧げることが出來ないのか。何故馬車馬のやうに傍目も觸らずに猛進することが出來ないのか。何故その實際の巴渦の中に入つて生又は死を經驗することが出來ないのか。僕は何故かの女を熱烈に愛することが出來なかつたか。僕は此問題に邂逅すると、いつもさういふ風に考へるよ。』

『それは藝術家と言ふ點よりも、君の性質にあるのぢやないかねえ？』

『それは無論さうさ。』かう言つた清の顏には血が上つた。やがて一種の冷笑を面に見せて、『僕は拙い出來損ひの藝術品と血もあり肉もあるラヴとを交換した馬鹿な男だ？』

『相變らず極端に物を考へるねえ。』

かう言つて雍之助は笑ふと、

『だつて本當にさうだもの仕方がないさ。二三年來の僕の新しい血は、實際あの女が湧かして呉れたんだもの……。僕の書いたものに少しでもフレッシュな鮮かな處があるとすれば、それは皆なあの女が僕に與へた印象から來て居るんだからねえ。』

清はこんなことを平氣で言つた。それほど二人は平生心を打明けて居た。妹の知らぬことも兄はよく知つて居た。清に取つては、義兄と言ふよりも昔の親しい友といふ間柄であつた。

二人は默つて並んで歩いた。

『しかし、僕は……』と清は再び言葉を續いで、『僕は今ではかれ等の爲めに心から力になつてやらうと思つて居る。二人が幸福に生活するといふことを寧ろ僕は神かけて祈つて居るねえ。一體僕が馬鹿さ。人の物笑ひになるやうな馬鹿々々しい幕を打つて見せたのさ。しかし僕にも利益はあつた。物に對する見方や考へ方がすつかり一變したばかりでなく、僕の心持をも全く新らしくして呉れたからねえ。』

『そして男は今何うしてるんだえ？　矢張文學を遣らうつて言ふのかえ。』

雍之助は急に話頭を更へた。

『さうださうだ……。早稻田に籍を置いてるんださうだ。』

『君があの作を公けにした時、其男に對する觀察が違つて居るとか、あんな男ぢやないとか、隨分いろいろな批評が出たが、實際何んな男なんだえ？　有望な男かえ。』

『さうさねえ、僕にもよくは解らんがねえ。しかし出來の悪い男ぢやないんだらう。あの作には無論其男が十分に書けて居ない。』

『あの作が出てから逢つたことがあるかねえ？』

『ある、一度ある。』

かう言つて清は其時のさまを思ひ出すといふ風をして見せた。

『何處で逢つたえ？』

『電車の中で鳥渡逢つた。』

電車の中で一種不思議な間の抜けた挨拶をしたことを清は思ひ出した。女が父親に連れられて山の中に歸つてから、其當座は其男はよく清の家を訪ねて來た。清に縋つて其の戀の糸を手繰るより他にかれには女に近寄る途がなかつたのであつた。しかし其作が出てから、其狀態は全く一變した。其日は清は例の橋際の電車の停車場から乘つた。處が其處に其男が早稻田大學の新しい角帽を冠つて、久留米絣の書生羽織を着て乘つて居た。お互ひにはつと思つたが、しかし知らぬ顔をする譯にも行かなかつた。男が先づ挨拶をした。清は輕く『ヤア……』と言つた。

『それで十分ばかり默つて乘つて居たよ。』

『何も言はずに……』

『無論さ。』

『それは可笑しかつたねえ。』

『餘り好い心持のものでもなかつた。』

『それはさうだらうさ、』と雍之助は笑つて、『言はゞまあ、競爭者だからねえ。』

『いや、競爭者と言ふほどの烈しい感情でもなかつたねえ。これが、同じ年輩で女との關係が深くなつて居ると言ふのなら、それはさうした心持が湧くに相違ないが、僕のは其時は寧ろ自分の愛して居るものを毀損した男といふやうな輕い憎惡の念――娘を誘惑した男に對する父親の憎惡の念、それに似たやうな心持が其男に對して起つた。』

『それでまた、君の家に置かうと言ふのかえ？』

『それはまだ考へて見たこともない。來るか來ないかもまだきまらないのだから……。まさか親の許さないものを、僕の家に呼寄せることも出來ないからねえ。』

『僕は餘り關係せずに置く方が好いと思ふがねえ。』

『僕もさうは思つてるのさ。』

と言つた清の聲は低かつた。

『しかし、僕にしては、何うかして幸福にして遣りたい、成功させて遣りたい、此儘放つて了ひたくない……。だから、此間もさう言つてやつた、藝術を修養するといふ方面に於ては、いかやうにも御世話はするが、實際の方面は、自分で責任を感じて、自分で其始末をつけて行くやうにしなくつてはいけないつて……』

『ところが、それが旨く行くか何うだか、頗る疑問だからねえ。』

『旨く行かなくつたつて實際の方面は僕は關係せんから好いさ。』

『さうは行かないよ。』

『襤褸を出さないやうにするなら、何んなことでもするが好いさ。僕は今度は何も言はない。知らん顔をして居るよ。』

『君にそれが出來るかねえ。』

と雍之助は笑つた。

清は心と言葉とは一致し難いものだと感じた。かれの頭には山の中のさびしい町のさまと長い廊下の盡頭にある二疊の一間とが歴々と見えた。其二疊の間には、小さい机が置いてあつて、雜誌や書籍や文反古が一杯に散らしてある。退屈すると、其處から女は出て來た。髪の亂れた白い顔を秋の夕日が照した。

停車場から其山の中の町までは十二三里あつた。かれはある時車で其處を通つたことがある。最初泊つた處は、山の麓にある狹い汚い町であつた。夜もすがら落葉の音がガサ〳〵聞えた。『木下の嬢さん、此處等でも評判の嬢さんですがな。學問がえらうお出來なさるつてな。此間もお母さんと泊つて行きなはつた、』などと旅籠屋の婢が言つて聞かせた。あくる日は山と山との間の谷のやうな處を通つた。小さい峠には休茶屋があつた。明るい秋の日影に薄白い雲が懸つたり晴れたりした。町に入つたのはもう午近かつた。かれは其處に過した二日二夜のことを考へずには居られなかつた。暖かい家庭とやさしい父母、それすら戀の爲めには辛い束縛であると言つた女のことをかれは考へた。

『今少し時節を待つてお出なさい。』

其時、かれは女に向つてさう言つたことを思ひ出した。かれは成たけ其問題には觸れないやうにして居た。男の話もつとめて成たけ爲ないやうにした。二階から細い廊下、それを通り越すと、其處には廣い湯殿があつて、湯氣が微白く颺つて居た。湯氣に曇つた大きな鏡の下には、白粉や櫛や石鹼が混雜と置いてあつた。何うした聯想か、それが今はつきりと清の眼の前を浮んで通つた。

氣が附くと、二人は狹い町の通りを歩いて居た。寺の門が其の近くにあつた。銀杏の見事に黃葉したのがあたりを明るく見せた。

清は雍之助に言つた。

『それが僕の家の寺だ。入つて見ないか。』

四

此處には幼なくして死んだ姉の墓があるばかりであつた。一家が都に出てからは、何年にもお參りをしたものもない。しかし墓石は倒れても居なかつた。

清は自分の幼ない時のことを友に話して聞かせた。寺の隣は小學校で、よく此寺の中を抜けて近道をして行つたことや、いたづらな子供が墓石を倒すのを和尚が怒つたことや、母親と一緒に盆にお墓參に來た時のことや、それからそれへと話が盡きない。『この姉の夭死した後の腹に僕がすぐ出來ることになつたのだ。この姉が死なずに居れば、僕は今時分こんな處にまご〳〵して居なくつても好かつたんだ。』かう言つた清は、墓石の前を立去りかねたやうに見えた。

『そら見給へ、明治四年一月と書いてあるだらう。僕は明治四年十二月生れだ。ライフと言ふものは面白いものだねぇ。』其聲には過去の追懷の悲哀が籠つて居た。

今日に限らず、故郷の町を歩く時は、清はいつもかうした調子であつた。ひどく感情的になつて、初戀の物語や一緒に遊んだ友達の話やらをした。此處には上品な白鬚の爺樣と綺麗な娘の兒がさびしく暮して居た。此處には早く死んだ同級生の娘が住んで居た。此處は初戀の女がよく通つた路だ。總てかう

いふ風に清は連れ立つた友に話して聞かせた。

『フム、フム。』

と雍之助はいつもそれを聞流しながら歩いた。

雍之助の眼には唯のさびしい田舍町としか映らなかつた。古着を遠くから仕入れに來る町、麥落雁といふ菓子の出來る町、『麥飯とろにたんと〳〵』といふ俗謠のある町、それ以上に餘り多くの興味を惹かなかつた。それでも沼を隔てた桃の花や躑躅の花の盛りを見た時には、成程これは名所だけあると感心した。

それから二人はきまつて軒燈や御神燈の出て居る細い通りを歩いた。御神燈にも軒燈にもいろ〳〵な女の名が書いてある。それは大抵板葺の間口の狹い小さい家であつた。中には藁葺の汚いのもあつた。二人は玉かつみの小照といふ藝者を知つて居た。

別に來歷といふほどのこともなかつた。二三年前、新緑の頃に、矢張二人は此處に遊びに來て、町の料理屋で午飯を食つた。その時その小照が出て酌をした。東京の者で、一月ほど前に來たといふ話をした。それに何處か人を引付けるやうなところがあつた。二三度來る中には、段々面白い氣象だといふことも知れて來た。『小照のお酌で、酒でも飲んで來るかね、』などと言つて、二人はよく出かけて來た。

料理屋は町の裏のところにあつた。其の奥の一間の靜かなのを二人は常に選んだ。其處からは裏の大

きな欅の樹に夕日の落ちるのも手に取るやうに見えた。冬は西風が凄じい潮のやうな音を立てた。

『誰も知る人のなくなつた故郷に、かうした新しい知人が出來るといふのも面白いことだねえ。』

清はこんなことを言つて見ることもある。

神樂坂にも住んで居たことがあつて、『金色夜叉』の作者も知つて居るなどと小照は言つた。『其時は私はまだかういふ商賣をして居なかつた時ですからねえ。……彼處に大弓がありましたねえ。よく彼處に來ていらつしやつたものですねえ。』

またあの時は、

『彼處にしる粉屋があつたでせう。船橋といふ肥つた上さんの居る菓子屋があつたでせう。さう〳〵角の葉茶屋の若い上さん、あの上さんはあれで若い時は中々好い娘でしたよ。』

段々心が置けなくなつて來た。時には小照の方から身の上話などすることなどもあつた。『貴郎方、御商賣で時々いらつしやるんですか。』かう聞いて見ることもあつた。

座敷に入りながら、

『まァ、皆さんでしたか……』と莞爾と笑つて見せて、『今日は何でも久しく御目にかゝらない方に屹度逢ふと今朝からちやんと知れて居ました。』

沼の向うの躑躅の咲く頃には、こんな町でも人が彼方此方から入込んで來た。時節になると、料理屋でも一時雇ひの酌婦を五六人も殖やして、交替に山の方に出張らせるやうにした。山には大きな二階建の出店があつた。何處の間からも沼が見え躑躅が見え渡船が見えた。小照は町の外れの辨天祠のある處から小さい田舟に乘つていつも出掛けた。

其頃には水草の新芽ももう大分出て居た。菱だの、蓴菜だの、藻だの、『葦だのが其處にも此處にも浮いて見える。二人は其の花の時分にもよく出かけて行つた。小照が一日隔きに乘つて行く其の汚い田舟にも乘れば、その大きな二階屋の廣間の混雜した中で酒を飲みもした。その時には、小照は屹度出て來て挨拶をした。『花の時分はゴタ〳〵して居て仕方がありませんねえ。……一日手傳つて歸ると、體が綿のやうに勞れて了ひますからねえ。』などと言つた。

二人は來る時は、『小照はまだ居るかしらん。もう東京に歸つたかも知れない。』などと言つて遣つて來た。

小照の顔を見ると、

『まだ居たねえ。』

といつもなつかしさうに言つた。

『もうねえ、餘り長くなりますから、東京に歸りたいと思つて居りますけれど……。此間などももう

歸るばかりに、支度までしたんですけれど。』

『まア、今少し居るさ。』

かう言つて、二人は酒を飲んで行つた。

一二年の間に此町にも少なからぬ變遷があつた。利根川の手前でつかへて居た鐵道は、鐵橋が出來上つてやがて開通した。町にも大きな寺の裏山を開いて停車場が出來ることになる。運送業が出來る、製粉會社が出來る、今度は更に大規模のモスリン會社が城址に建てられると言ふ。つひぞ見たことのない活氣が古い町の隅から隅へと行き渡つた。小照は其時、『汽車が開通してから大變賑かになりましたよ。今ぢや藝者が三十人以上も居りますからね、』と言つた。二人は小照の他に藝者が三人しか居なかつた時のことを想像した。風の吹荒れるのを聞きながらさびしく飲んだ時のことが思ひ出された。小照は今年は何うしても東京に歸ると言つて居た。

『もう、此處で御目にかゝることは御座いますまいねえ、御機嫌よう。』小照は停車場まで送つて來て言つた。

五

都の近郊と遠い山の中との間には、絶えず手紙が往復された。女は細い綺麗な字で二枚も三枚も書いてよこした。感情の著しく昂ぶつてゐる時もあれば、思切つて沈んだ調子の時もあつた。徒らに過ぎ去つて行く歳月――それに對して、女は殊に堪へ難い深い煩悶を見せた。

『私だつてもう來年は廿二になるんですもの、そんな無謀な智慧の無いことは致しません。』かう書いてあるかと思ふと、また時には、『何う願つても、父は許して呉れません。私は意味もなく目的もなくかうして山の中に暮して居ましたつて、生きて居る甲斐が御座いません。先生、私はもう覺悟を致しました。』かう書いてあることもあつた。

また次ぎのやうな手紙も來た。

『母はそれでもいろ〳〵と心配して呉れますの、私が夜も晝も奥の二疊に引籠つて、いつも蒼い顔をして居りますと、何も申しませんけれど、何彼と慰めたり何かして呉れますの。此間も天氣の好い暖い日が御座いましたが、お重箱の海苔卷なぞを拵へて呉れまして、家にばかり引込んで居てはいけないと申して、先生も御存じのあの山際の別莊に母と一緒に參りました。冬にもこんな暖かい好い日があるかと思はれるやうな日でした。……先生、母の心を考へますと、私は涙がこぼれて仕方が御座いません。折角決心した覺悟も母の顔を見ると鈍つて了ひます。』

それに對して、清は慰めたりなだめたり叱つたりした。貴女の決心さへ固ければ――自分で自分の身に十分の責任が感じ得られさへすれば、如何やうにも父母を説得して、再び出京の出來るやうにして上

げると書いて遣つた。さうかと言つて、清も女が出京してからのことを考へぬでもなかつた。出京すれば、自分の宅に置かなければならぬ。自分が再び保護者たり監督者たるの地位に立たなければならぬ。男が以前のやうに自分の宅に出入することは謝絶するにしても、何物の束縛をも感じない戀の力を拒ぐことは出來ない。それに、其他にもいろ〳〵な問題がまだ解けずに殘つて居る。しかしかれは女の境遇をも思ひ遣らずには居られなかつた。

『最早二年の年月も經過致し候ことゆゑそのやうなる御心配も無之こと、存候――小生も今度は十分なる責任を以て、監督者の地位に立ち可申候。』

かういふ文句の入つた手紙が清の手から父親の許に行つた。

ある時はまた、『折角小生を賴りて文學の道に志せし敏子を此ま、田舍に埋らせ候ふは、如何にも殘念に存候、今一度十分なる勉強あらんことを希望仕候。始めは年齡も若く、そのやうなる自覺的思慮もこれなかりしこと、存候。二年間の田舍の生活は敏子に少なからぬ影響を與へ候こと、存候。御心配のほどは十分に御察し申上げ候へども、今一度御考慮のほど幾重にも願上候。』などと書いて遣つたこともある。

冬から春までの間に、少くともさうした手紙の五通や六通を清は出した。始めは疎い形式的の文句が多かつたが、後にはそれが段々細かい處に入つて行つた。『それは御尤に存候へども、親と子との間の關

係なども御考へなされ度候。親は子等の精神までも束縛すべきものに候や否や――』こんな文句も入るやうになつた。

父親の手紙、母親の手紙、敏子の手紙――それがいろ〳〵に清の心を動搖させた。『それほどまでに言ふのならば、今一度出京させて見よう。』父母の間には、かう相談が纏つたらしくも見えた。『しかし出京させるに就いても、今度は信用して貴方にばかり任せては置かれない。』かう邪推されるやうな處もあつた。

丁度其時兄に當る人が、京都から東京に轉任して、二月には、新しく貰つた細君を伴れて出京するといふことを敏子は報じて來た。それには屹度父が行くから、是非其時には一緒に連れて行つて貰ふ積りである。近い内にお目に懸れるのを喜んで居る。かう書いてある。

『兄さんが東京に家を持つやうになつたさうだ。さうなれば、非常に都合が好い。お嫁さんの居る中に敏子が居ることは出來ないにしても、何かにつけて都合が好いからねぇ。』かう清は細君に言つた。

しかしその狀態も幾度となく變つた。父母は敏子の出京を許したやうにも見えた。女から來る手紙もある時は樂觀し、ある時は悲觀した。

『何うせ出京することは出來さうにもありません。先生、私は山の中に埋れて了ひます。』かう書いて

よこしたこともあつた。

春が來て、梅が咲いた。裏の林には青い草が芽を出して、蓬だの、嫁菜だの、なづ菜などが萠え始めた。二月は三月となり、三月もやがて盡きる樣になつた。しかし矢張しつかりとした音信はなかつた。

久しく間を隔いて、もう何うしても父親が出京した時分と思ふ頃、突然敏子から手紙が來た。それは絶望的な手紙であつた。それにはかう書いてある。『……先生、父は今月の上旬に兄の嫁になる里方に參つて居りましたが、其處からすぐに發つて了つた樣子で御座います。私が二年間思ひ詰めたこともう水の泡になつて了ひました。先生、もう先生には何時お目にかゝれるか知りません。唯々先生の御機嫌よくお榮えなさるゝを祈るばかりです。』これを讀んだ清の胸は震へた。

清は自分の信用されぬのを殊に心外に思つた。其夜は清は遲くまで机に向つて、敏子の母親に宛てた手紙を書いた。

『父君も母君も大に考へて然るべきだと思ふ。個人の行く道は個人より外に干涉する權利がない。父母は自己の子女の爲めに肉體上の保護は絶對にしなければならぬが、精神までを自由にすることは出來ないと私は信ずる。』

激昂した筆はいつものやうな形式的敬語を並べる餘裕はなかつた。

『世の中では、いろ〳〵なことを申したでせう。私の製作から起つたいろ〳〵御心配になるやうなことがお耳にも入つたでせう。然し私は信用して戴き度い……私は父君のやうな基督敎信者ではない、けれど克己とか犧牲とかに就ては人後には落ちない積りです。』

こんな文句も中にはあつた。

『父君は御上京なされし御樣子、實は私は眞面目にお目にかゝつて、不仕合せな敏子の爲めに、いかやうな御相談をも受けたいと考へて居りました。先年私が此問題に關係した時、それなら貴方に娘を上げる。自由に勝手に何うにでもせよと父君は仰せられた。私は今度は御不都合ならば、さうしてなりと——私の家の籍に入れてなりと、敏子を田舍の希望のない中から救ひたいと思つて居ました。』

かうも書いた。

『敏子を將來幸福にすることは私には難かしいかも知れません。けれど敏子が實際、心から文藝の道に立たうといふ決心なら、いかやうにしても世の中に出して遣りたいと私は思つて居ました。私は敏子を世に出すに就ては全力を擧げる積りでした。實際問題は知りません。馬橋との關係などは何うすることも出來ぬかも知れません。けれど文藝の上に於ては出來得るだけ敏子の爲に計りたいとは今でも思つて居ます。ですのに、父君母君は世間の下らぬ誤解を信用して、私を信用して下さらなかつた。これは心外でした。』

最後にかう書いた。

『改めて申上度い。敏子が文藝の道から離れて、普通の女子として、人の妻として、それで安んじて行けるなら、それに越したことはない。私は心からそれを喜ぶ。しかし實際文藝の爲めに一生を犧牲にしたいといふ堅い決心でしたら、何うか世間の誤解やつまらぬ身分の名譽のことなどに拘泥して、人間一人の靈魂を無にして了ふやうなことはして下さるな。これは私の眞心からの御願です。』

封筒に入れて、宛名を書いて、すぐ出させようとしたが、もう夜は十一時を過ぎて居た。かれはあくる日の朝、またそれを出して讀んで見た。平靜な心の狀態にかへつて見ると、何うして昨夜あのやうに激昂したかゞ自分にも解らない位であつた。かれは靜かに事件の內容を繰返して頭に浮べて見た。何も自分からさう熱心になつて說いて遣る必要もない。さうした烈しい手紙を書いて、自己の激した愚かな心を先方に示すにも當らない。……かう思ひ返して、かれは手紙を机の抽斗の奧の方に藏つた。

懊惱した日が續いた。『何時逢はれるか知れない。』かう言つて來た女の言葉が朝に夕に氣に懸つた。そんなことは決して無いと知りながらも、田舍の舊家の奧の二疊に起つたゆくりない珍事が鮮かに眼に見えるやうな心持がする。ロマンチイツクな一幕が必ず起るやうに思はれて仕方がなかつた。

女の體の弱いのが心配になつたり、自分の作品の起した影響が頭を惱したり、平凡な無意味な家庭が氣分をクサ〳〵させたりした。西といふ友人は、一月ほど前に、それを聞いて、『こまつた女だねえ、さ

うして親を困らしてまで男に逢ひたいんだねえ。』かう平氣で言つた。田邊といふ友は肺病で海岸に療養に行つて居たが、昨年の暮に鳥渡歸つて來て、『また、出て來るんだッてねえ。男は今も早稻田に居るんださうぢやないか。現に、僕の家に來る葉山君などが敎へて居る生徒だつて言ふぢやないか。そいつは面白いねえ。今度出て來て、もつと好い男に其女が乘り換へて見るやうだと猶面白い。』こんなことを言つて笑つた。

天氣も晴れた日が少なかつた。冴え返つて寒い風が吹いたり、雪が萎びた梅の花の梢に重く降り積つたりした。電車の停留場まで出る近郊の路は、靴では歩けぬほど泥濘が深かつた。

ある夕暮、薦包の荷物を載せた荷車が淸の門前に來て留つた。車力が門のくゞりを明けて入つて來て、『服部さん、荷物が參りました、』と言つた。其時、淸は門の傍の鞦韆の處を逍遙して居た。遲い梅の花が白く薄暮の空に浮き出すやうに見えた。やがて門を明けて引込んだ荷車の齒は重く玄關先の小砂利に輾つて聞えた。荷物の數は七箇、それは敏子の山の中から來たのであつた。

六

荷物が着いてからも、消息は久しく解らなかつた。敏子からの手紙もぱつたりと來なくなる。『なに、そんなに心配することはないんですよ。もうすぐ逢はれるからと思つてそれでよこさないのですよ。』細

君はかう言つて夫の顔を見て笑つた。

その細君も後には『何うしたんでせうねえ、』と不思議にした。それほど長く消息がなかつた。父親が上京したのかしないのかそれすらはつきりとは解らなかつた。長い間、薦包の大きな荷物は、繩で絡げたまゝ、暗い玄關の二疊に積まれてあつた。

ある日曜日に、西といふ友人が遊びに遣つて來た。この人は田舍寺にかくれた山崎だの、肺病で今茅ヶ崎の病院に入つて居る田邊だのと、昔一緒に往來した夥伴で、清夫妻に取つては殊に親しい間柄であつた。細君は殊に力にして居た。

『何うしたんだえ？　此荷物は？』

案内も乞はずにづか〳〵と入つて來てかれはかう訊ねた。

『遂々遣つて來るのかえ。よせば好いのに……男は東京に居るんだらう？』

かう續いて言つて、懷から讀みかけて來た洋書を出して坐つた。

細君に向つては、

『また、宅に置くんですか。』

『まだきまつた譯ではないんですけれどもねえ。』

『先生の兄が今度東京に轉任して來て家を持つからねえ……今度は僕が監督するといふ譯でもないんだ。』

清は傍からかう言つた。

『何うも新時代の女も好いけれど……此頃のは隨分閉口するのが少くないからねえ。ノラやヘダのやうなのならそれや好いけれど、附燒刃ぢや仕方がない。』こんなことを言つて、『餘り新思想を鼓吹した君達にも責任がある。』

清は默つて笑つて居た。

『お蔭で片輪者や、一生不仕合せに世を渡る女などばかり出來て仕方がない。今の女子大學あたりの良妻賢母も御免だが、新時代の犧牲になつた女も厭だねえ。』

『犧牲の出來るのは仕方がないさ。』

『何うも困つたものさ……日本の女の特色が段々なくなつて來る。』

『その代り、女が大分鮮かな生々とした色を出して來たぢやないか。』

『餘り鮮かでもあるまい……』

西はかう言つて言葉を切つて了つた。

續いていろ〳〵な話が出た。自然主義の話も出れば、西洋の新しい脚本の話も出た。西の話には何處かかう上品なやさしい處があつた。それに、社會本位といふやうな處もあつた。清はさうした友の思想

を前からよく知つて居た。

『時に田邊は何うしたらう。近頃見舞に行つたかえ？』

西はかう訊いた。

『暫く行かないがねえ、餘りよくないさうだ。』

『さうだらうねえ、かう寒くつては――』と言つて、『氣の毒だなア。僕も見舞に行つてやらうと思ふけれど、先生の顔を見ると、いろ〳〵なことを考へなければならないからねえ。今度行つたら、よろしく言つて置いて呉れたまへ。』

清は輕く點頭いて見せた。

七

忙しい間に暇を拵へて、清は病んだ友を度々相模の海岸に見舞つた。田邊の容體はもう大分悪かつた。醫師からも見離されるやうな狀態にあつた。

此友のことも考へれば胸が塞がるやうなことが澤山あつた。十五六年も心をぴつたりと合せて來たゞけに、一層同情の念が湧き返つた。白楊で圍まれた小學校や、松林の處々にある別莊や、鰺の開いたのが一面に日に干してある漁師の家や、さういふものゝ目に留る海岸の道を、かれはいろ〳〵なことを頭に

浮べながら通つた。ライフといふことが染々と思はれるやうな年齢にかれはもう達して居た。

電信柱に病院の名が白く書いてあつたり、幾筋にも別れる道の角に建築しかけた二階屋があつたり、深い綠の葉の中に眞赤な乙女椿が咲いて居たりした。停車場から病院まで十五六町は何うしてもあつた。だら〳〵と低く折れ曲つた坂路を降りると、病院の海氣室が砂丘の上に白く見えて、其向うにひろい相模灘が開けた。

その相模灘は、田邊の居る病室の廊下からも見えた。病室は南の盡頭になつて居て、長い廊下を通つて來て、其の扉を靜かに明けると、痩せこけた病人の青い顔が先づ第一に眼に映つた。『服部君――』かう言つて、田邊はいつも嬉しさうに身體を擡げた。

寢臺の下に三疊ほどの疊の敷かれる處があつた。其處には新聞や雜誌や果物を入れた籠などが置いてあつた。氣分の好い時は、田邊は寢臺から下りて、其疊の處で機嫌よく話した。『また、後で咳が出ておこまりになりますよ。』お榮さんといふ二十六七の女が心配してかう言つても、容易に言ふことを聞かなかつた。お榮さんは、脊の高い、すらりとした、顔になつかしい表情のある女であつた。細君に比べると何處かかう若々しい艶なところもあつた。

窓の細かい金網に砂がばら〳〵と當るほど烈しい寒い風が幾日か續いて吹いた。單調な浪の音、色彩の無い砂山の道、春になつても春は容易に來さうにもなかつた。『花でも咲くやうになつたら――』かう

言つて、病人は暖かい日影に憧れた。

時には此頃に珍らしいやうな好い暖い日もあつた。『服部君は來て呉れたし、天氣は好いから、お榮さん、鳥渡其處まで出て見ても好いだらう。』かう笑つて言つて、廊下の出口の石段を下りて、南の日向のベンチに腰を掛けた。

『海は矢張好いねえ。』

かう言つて、キラ〳〵光る遠海の日の光を眩しさうにして見た。

其年は餘寒がいつまでも續いた。櫻の花が咲くやうになつてからも、雪が度々降つた。ある日曜日に清が東京から遣つて來ると、危ないと思つた空が、平沼あたりから大雪になつて、ボタ〳〵した雪片が一間先も見えぬ位に降頻つた。藤澤を通る頃には、海の遠鳴が遠雷のやうに聞えて、灰色の雲が物凄く地平線の上に垂れた。清は停車場に一臺しかない車を雇つて、白楊や竹藪に重く降積つた雪道を辛うじて病院へと志して行つた。

神戸東京間の急行列車は、清の車が病院の見える坂の上に行つた時、轟と音を立てゝ後の方を通つて行つた。敏子は其列車に乘つて居た。

八

初めて病院を見舞つた時の夜の事が今でもはつきりと清の頭に殘つて居た。其時お榮さんは長い廊下を送つて來て呉れた。廊下にはぼんやりした洋燈が處々に點いて居て、看護婦の白い服が時々病室から靜かに出て行つた。田邊は何うしても今夜は泊つて行けといふ。『二十町ほど行けば、君達を泊めても羞かしくない海水旅館があるけれど、其處まで行くのは大變だ。今夜は僕の爲めに辛抱すると思つて、其處の近くの旅籠屋に泊つて行つて呉れ給へ……それとも僕の家に泊つて呉れるか。』清はかうした病人の希望を容れぬ譯には行かなかつた。

『もう解りますから。』

長い廊下を送つて來るお榮さんに清は幾度となく振返つて言つた。お榮さんのすらりとした姿はしんとした廊下に浮き出すやうに見えた。何となく胸の痛くなるやうな夜で、病院の周圍にある松の音が冴えて聞える。

入口の扉を明けて戸外に出ると、暈を被た薄月がぼんやりと地上を照して、玄關前の砂利の上には、低い松の影が微かに映つて居た。斷つても斷つても、お榮さんは送つて來て呉れた。草履の砂利に鳴る音がチャラ〳〵と後から跟いて來た。

旅籠屋は低い松林の中にあつた。裏に廻ると、雨戸が一枚明けてあつて、其處から燈の光が見える。お榮さんは先に立つて案内を乞うた。出て來た婢に一言二言言つて居たが、『それではよろしくお願ひしますよ、』と言つて、今度は清に向つて、『それぢや御緩りおやすみなさいまし、明日はまた起しに參りますから。』

かう言つて歸つて行つた。

婢の連れて行つた室は、細い廊下のかげに當る汚い六疊の一間であつた。かれは酒を一本註文してそれを飲んだ。婢は肴はもう何もありませんと言つて、鰺の干物を三枚ほど燒いて持つて來た。清は何だか十年も前にかへつたやうな氣がした。田邊や山崎や西などと田舍を旅行した時のやうな心持になつた。

取集めていろ〳〵なことが考へられて來た。女に對する自分達の考への著しく變つて來たことが先づ第一に頭に上つた。田邊が妻に逃げられた當座の煩悶、ロマンチィックな西の煩悶、それを今に比べると、實に別な人かと思はれるやうだ。確かに別な人間だ。

お榮さんと田邊との關係もかれは久しい間見て來た。時には反感を起したり、時には眞面目に忠告しようと思つたりした。細君が氣の毒だと思つたこともあれば田邊が可哀相だと思つたこともある。しかし此夜ほどお榮さんと田邊との間を染々考へたことはなかつた。

『女はラヴが生命だつて言ふけれど、女よりも男の方がラヴが生命だよ。』

かう田邊が言つたことを清は思ひ出さずには居られなかつた。

清は遲くまで眠られずに居た。海岸の松林の中の病院、廊下から海の見える病室、其處にお榮さんと細君とに看護されて居る友のことが染々と思ひ出された。

夜もすがら松の音がした。

その旅籠屋から麥畑を越した處に、田邊の家族は別莊を借りて住んで居た。六疊に八疊に二疊、其處から松林を隔てゝ相模灘の波の音が聞えた。

細君とお榮さんとは、交替に看病に出懸けた。留守に殘つたものは、何かめづらしいものが出來たと謂つては、松原を越して、病院の裏門から近道をして持つて行つた。子供等も母親やお榮さんの後に跟いて、日に幾度となく父親の病室へ行つた。

一番幼ない末の女の兒が一人取殘されて、其の松原の中の路を泣きながら歩いて來ることもあつた。

病人は常に都を戀しがつた。昨年まで新橋近くに住んで居て、天ぷらは橋善、鰻は竹葉、菓子は壺屋と贅澤な生活をして居た身には、病院の食物は拙くつて食へなかつた。見舞に來る人々は、それを知つて居て、珍らしい果物だの、菓子だの、牛肉だのを見舞に持つて來た。竹葉の鰻の蒲燒を小包で送つて來る人などもあつた。

『東京には是非一度歸り度い。死ぬともう運命が決つて居ても、一度は治つて、新橋の停車場から下りて見たい。』

病人はいつもこんなことを言つた。

見舞に來る人が多かつた。文學者が來たり、新聞記者が來たり、雜誌記者が來たり、畫家が來たり、書肆の店員が來たりした。かれの作品を愛讀する青年はわざ〳〵遠くから遣つて來た。

日曜日には、其三疊が一杯になることなどもあつた。

段々暖くなつて來た。裏門へ通ふ路には菫や蒲公英が咲いて、前の麥畠からは雲雀が元氣の好い聲を立てゝ高く空にあがつて行つた。清も見舞に行つた次手に一人で病院の構内を歩いて見ることなどもある。海氣室の小高い處からは、ひろ〴〵として海が繪のやうに開けて見えた。

蒼い痩せた顏をした若い庇髪の女が、海氣室のベンチに腰を掛けて、茫然として海を見て居た。膝の上には小形のバイブルが開かれてあつた。

ある時細君と一緒に歩いて居ると、細君はふとある建物を指さして、

『あれが死亡室ですよ。』

かう清に言つた。

清は細君の顏を見た。細君も清の顏を見かへした。

子供等は賑かな東京からかうした田舍に來たので、一緒に遊ぶ友達とてもなかつた。お榮さんが拵へて呉れた松林の中の鞦韆に乘つたり下りたりして、長い春の日を暮して居た。其向うの麥畠と松林との間には、停車場から病院へ通ふ路が通じて居て、見舞に來る車がをり〳〵通つた。

清と青年畫家と二人並んで其處を通ると、子供等が其の鞦韆に無邪氣に遊んで居るさまが明らかに松の間を透して見えた。

『龍男さん。』

青年畫家は遠くから呼んで見たりした。

田邊の作品は一二年以來世に認められて來た。それだけ世ではかれの不治の病に罹つたのを惜んだ。海岸に來てからも、何ぞと謂つては、新聞はかれの病狀を報じた。中には寫眞を挿れて一段半もその消息を掲げたものもあつた。

病院から海水旅館のある處まではかなり遠かつた。見舞に來た人達の中には、次手に其處に行つて午飯を食つて行くものもあつた。その人達は多くは近道をして、波打際を眞直に突切つて行つた。其處には砂山があつたり、網を干した漁師の家などがあつたり、船が岸に引上げられてあつたりした。海中にある烏帽子岩には白く波が碎けた。

客がまだ少いので、海水旅館の戸は半ば締め切られてあつた。客を待たせて置いて女中は雨戸を明け

たりなどした。帳場のある處から、暗い長い廊下を通つて遣つて來ると、間の踏板が外されて渡れなくなつて居る。脊の高い青年畫家がそれにも躊躇せずにぐん〳〵飛んで渡つて行くと、後から來た脊の低い小說家は、『コンパスの長いものは違つたものたな、』と笑つて立つて居た。

三人の群の中には淸も居た。

『ヤァこれは飲める。』女中が茶湯臺の上に鯛の刺身と鰺の酢の物を運んで來た時、小說家は盃を淸にさしながら言つた。日の暮れる時分には、三人はもう大分醉つて居た。

『中年の戀……僕なども大に中年の戀といふことを感じますよ。今度書いた僕の作を一つ君に是非見て貰ひたい……僕のは、君のやうに事實ぢやない。何うせ想像だから、詰らんけれど、中年の戀といふことはそれでも感じて書いたんですよ。……戀なんて、僕は何うも眞面目に考へられん、』と眞面目のやうに冷かすやうに言つて、『服部君なんぞだつて、こんな大きな體をして、今更ラヴでもないぢやないか、庇髪を相手にしようつて言ふんだからねえ、これで、君！』

かう言つて青年畫家の方を向いた。

『あはゝ、』と青年畫家は大きく笑つて、

『だつて、君だつて庇髪黨ぢやないか。』

『それはさうさ、僕はまだこれで服部君よりは若いやねえ。』

三人は聲を合せて笑つた。

『だつて……服部君だつて、』と小說家は暫くしてから、『此頃は遣るんでせう。大分、僕も聞き込んだことがあるよ。田邊君がまだ丈夫な頃、あの二階から一緒に出懸けたことがあるが、あの時などは猾いからねえ。大に仙人ぶつたり何かして……』

『さういふ譯でもないさ。』

かう言つた淸もかなり醉つて居た。

青年畫家のスケッチブックにはいろ〳〵なものが寫生してあつた。病床の上の田邊の顏、看護婦の横顏、お榮さんの笑顏、それから今日三人して其處で坐つて話した時のさまも描いてあつた。病院から此處に來る途中で寫生した船やら漁師の顏やら烏帽子岩などもあつた。

小說家はそれを手に取つて、いろ〳〵な批評をしながら見て居たが、『おい、君、二三枚何か畫いて吳れ、此處から二三軒出してやらう。』かう言つて、女中にはがきを五六枚持つて來させた。

漫畫の上手なので世に聞えた青年畫家は、大きな手や足をした男だの、わざと誇張した漁師の顏だの、松原の上に白帆の見える處などを描いた。三人して酒を飲んで居る處は殊によく出來た。

『これは好い、服部君などはそつくりだ、』と小說家はそれを手に取つて、『これを一つ病院へ遣らう。』

『君もよく似てるよ。』

清は傍から見て言つた。

病院に遣るのには、『此の清宴に君の無きを憾む』と書いた。ある雜誌記者にはわざと氣取つた文句を並べた。青年畫家がそれからそれへと達者に筆を揮ふのを片端から取つて、二人はいろ〳〵な宛名を書くのに餘念がなかつた。

清の書いた宛名の中には、西だの山崎だのがあつた。小說家はそれを見て居たが、『山崎君、さう〳〵、僕もそれに署名させて貰はう。』かう言つて、名を書いて、『山崎君にも久しく逢はんねえ、何うしたねえ。先生？』

かう思ひ出したやうに訊いた。

『なまじつか文壇などに出てまご〳〵して居るより、お經でも讀んで居る方が餘程氣が利いて居るねえ。』

かうも言つた。

一枚傍に伏せてある端書は、敏子に宛てゝ書いてあつた。小說家はそれをそつと取つて、

『見給へ、服部君はこれだから。』

と青年畫家に見せた。

青年畫家は笑つて見せた。清は別にそれを取返さうともしなかつた。矢張笑つて居た。

『服部君は若いねえ——まァ一つ上げませう。』小說家は笑ひながら盃をさして、

『僕も一つこのはがきに書かして戴きませう。好いでせう、服部君。』

かう言つて、其處に俳句を書いた。

中年の戀といふことがまた繰返された。病院に居るお榮さんの話も出れば、女に對する氣持が段々變つて行くといふ話も出た。男は幾人でも一緒に戀をすることが出來る。かういふ話もした。

『こんな話をすると、昔は服部君は眞赤になつて怒つたものだがなァ。』

昔を知つて居る小說家はこんなことを言つた。

翌日、三人の姿は再び病室の狹い二疊に見られた。昨夜は大變苦しんだが、今日は餘程好いなどと病人は言つて居た。はがきが今少し前着いたと言ふことから、昨夜彼方此方にはがきを出した話、敏子に出した端書に小說家が俳句を書いた話、中年の戀の話、それからそれへと話がはずんだ。お榮さんも笑はずには居られぬやうな話も出た。

病人はふと思ひ出したやうに、

『さう言へば、めづらしい話があるよ。服部君の遊ぶ所をちやんと報告して行つた人がある。』かう快活に、しかし清の顏に其眞僞を判じようとするやうな眼付をして、『けれど何うも、服部君が遊ぶにしては、其の場所が非常に不便な所なんだがねえ……。電車の都合も惡いし——』かう言つて、咳嗽を輕く二

つ三つして、『しかし報告した人にも信用の出來る點があるがねえ。』

小說家も青年畫家も笑つて淸の顏を見た。淸は別にそれを打消さうともしなかつた。

九

遲くなつたからもう出懸けようとして居た。ふと門の明く音がした。

『客かしらん。』

かう思つて淸は耳を欹てた。しかし玄關前の小砂利の音もしなかつた。立上つて、緣側から玄關に出る扉をあけて見た。

遲い花の交つた新綠が午前の日影を受けて繪のやうに見えて居た。

誰も居なかつた。

ふと振返つたかれは、思はずはつとした。門からぐるりと廻つた茶の間の前の庭には、敷石づたひに小さい扉があつた。今朝婢が掃除した時に明けたまゝにして置いた。其處から菫色の袴を穿いた敏子が色の白い顏を出した。

二年逢はずに居た先生と弟子とは相對して立つた。

日を受けた新綠はチラ〳〵した。

『先生！』

久し振でそのなつかしさうな聲を淸は聞いた。淸の眼には少しく赧くなつた顏と例の生々した表情に富んだ眼とが映つた。

『まア、敏子さん。』

『まア、奧さん。』

かうした會話がやがて女同士の間に取交された。脫いで上つた敏子の草履には赤い派手な緒がすげられてあつた。

今まで靜かであつた一間は俄かに鮮かな色を着けて來た。メリンス友禪の座蒲團は持つて來られる。久し振の挨拶は繰返される。出懸ける支度を其方除にして淸は其處に來て坐る。何から話して好いか三人が三人とも解らなかつた。

『今も話して居たんですよ。敏子さん、もう屹度來たに相違ないが何うしたんだらうつて……。あの本のことがあるから、もう宅には來ない積りなのかも知れないなんて言つて居たんですよ。』

細君はこんなことを言つた。

敏子は、

『もう、餘程前に來たには來たんですけれど、今日こそ上らう今日こそ上らうと思つて居たものです

から、お手紙も上げなかつたんですの、……奥さん、それや此方に來てから忙しかつたのよ。此方に來る翌日から貸家を捜して歩いたんですもの。』

『それで、兄さんのお宅はきまつて？』

『え、やうやく。』

『何方？』

『小石川なの。』

『ぢや、當分あちらにいらつしやるのねえ。』

『いゝえ、』と敏子は清の顔を見て、『私は一日も早くこちらにお世話になりに上りたいんですけれど、嫂がまだ剛れないもんですから。奥さん、そりや、面白いのよ。お嫁さんて言ふものは面白いものねえ。』

清も傍から時々口を挿れた。段々心が落着いて來た。いろ〳〵に思つて居た疑惑もいくらか解けたやうな心持にもなつた。作品が惹き起した心の狀態には、清も敏子も成たけ觸らぬやうにして居るやうに見えた。

細君が時々それを言ひ出さうとすると敏子は、『奥さんあのことはもう言はないのよ、』と言ふやうな眼色をして見せた。

次の間に寢かしてあつた赤兒が不意に泣き出した。細君が急いで立つて抱いて來るのを敏子は見て居たが、『まア、奥さん、お目出度いことがあつたの？　知らせて下さらないんですもの、ちつとも知りませんでしたよ。何時御誕生でしたの？』

『この二月に生れたんですけれどもねえ……もう赤ん坊なんかめづらしくありませんものねえ、敏子さん。』

かう言つて細君は笑つて見せた。

『まア、可愛いこと、あんな大きな眼を明いて……坊ちやん？』

『女さ。』

と清は傍から突如に口を挿んだ。

『敏子さんの出ていらつしやる時には、屹度かういふものが生れて居てね、不思議のやうねえ。』細君は敏子が先年初めて清の家に來た時、このすぐ上の男の兒の産褥に居たことを思ひ出した。

『さうねえ。』

敏子の眼には例の表情が著るしく表はれて見えた。三人は暫し默つた。『妻がもし死んだら？　自由の道が開けたら？』作品の中にかう清が書いた。その言葉がこの場合誰の頭にも上らぬ譯には行かなかつた。三人はさま〴〵の心を抱いて、默つてこの沈默を見守つた。

子供ばかり殖えて行くことが、清の胸に一種の哀愁を誘ひ起した。

近所で新築して居る鉋や手斧の音が午前の靜かな晴れた空に高く聞えた。

『それでもよくうちが解りましたねえ。』

清は沈默を破るために、かうしたことを言つて見た。

『えゝ。』

かう言つて敏子も急にはその沈默の中から出られないやうに見えた。しかしそれも長い間ではなかつた。『だつて、お手紙でよく解つて居ましたもの……』かう言ひ懸けた時には、もう常の狀態に復して居た。

『私、いつか手紙に想像して圖を書いて寄越したでせう。丁度其の通りでしたでせう……』

『えゝ〳〵、さうでしたねえ、』と細君も思ひ出して笑つて、

『何うしてこんなによく知つてるんだらうつて、其時も言つたんですよ。』

『だつて私、此處等はよく散歩したんですもの……』敏子はかう言つて笑つて、『だから、今日も初めて來るうちとは何うしても思はれませんの。何だかかうもう幾度も〳〵來たことがあるやうな氣がして仕方がありませんの……でも變つたことは變りましたのね。』

『それは變つたとも……丸で屋敷町になつて了つた。』

かういふ清の後に跟いて細君も言つた。

『それやもうねえ、敏子さん、私達が此處に引越して來た時分から見ても、すつかり變つて了ひましたよ。越して來た時分には、前も後も皆な畑で、夜などそれやさびしかつたんですよ。』

『でも、先生には元のさびしい時分の方がよかつたでせう？』

『それはさうだねえ。』

敏子は遠い山の中で想像したこの近郊の家を見るべく立上つた。『何うもひどい家よ。』かう言つて細君も赤兒を抱いたまゝ跟いて來た。座敷には見馴れた海岸の松の油畫だの、高田の諏訪の森を描いた水彩畫だのが懸けてあつた。北向の書齋の机の周圍には、例の如く書籍やら雜誌やらが一杯に散らばつて居る。敏子の置いて行つた前硝子の本箱もあつた。

庭には椿だの、松だの、檜だのが裁ゑてあつた。其處にある木犀や躑躅は、牛込の兄の家から持つて來たといふことを細君は話した。

『さう言へばねえ、あちらのお兄さんもねえ。お亡くなんなすつたつてねえ。』

『あちらの奥さん、矢張彼處に居らつしやるの？』

茶の間に戻つてから、敏子はかう訊ねた。清と細君とは、亡くなつた兄のことやら、遺族のことやら、嫂のことやらを話した。『殘念なことをしたのさ……兄などは我々兄弟や一家の爲めに犧牲に生れて來た

やうなものだからねえ。』清はかう言つて、續けて來た話を結んだ。

『本當に好い方でしたのにねえ。』

敏子は染々と言つた。

『段々死んで行つて了ふ。もう僕の一家では、僕が一番目上になつて了ひましたからねえ……。兄が居る中は、何だと言つては、相談をして寄りかゝつて居たものだけれど、もう寄りかゝる人もなくなつて了つた。』

『本當ねえ。』

『田邊ももう長いことはないよ。』

『さうですつてねえ。私、來る時、茅ヶ崎の處で思ひ出しましたの……もう本當にお治りにならんのでせうか。』

『もう難かしい……。あれで一度でも好いから、少し快い方に向くと好いけれど何うもむづかしい。』

『お氣の毒ねえ。』

『後が大變ですねえ！』と細君は傍から言つた。

清は此頃自分の心の狀態ををり〳〵考へて見ることがある。今までは唯前へ前へとばかり進んで居たが、此の頃では何となく周圍が顧りみられた。今まで超えて來た谷々が明かに見渡されるといふやうな

位置にあるやうな氣がして來た。

『死ぬといふことに就いても、もう以前のやうな同情は起らなくなつた。悲しいと思ふ念よりも、其人の居なくなつたといふ損失から起る悲痛、さういふことを感ずるやうになりましたよ。實際から起る悲痛、それに越す悲痛はない。』かう言つた清の感情はやゝ激して來た。『あなたも今度は一つ眞面目に勉强して下さらなくつては困りますよ。ラヴも好い。眞面目なラヴは僕も賛成だ。しかし巴渦の中に入つて、すぐ盲目になつて了ふやうでは仕方がない。さういふことは貴方も少しは解つたでせうねえ。一つ大に勉强して貰はなくつちや――』

『本當ねえ。これから、敏子さんも勉强なさらなくつちやねえ。山の中に二年も苦しんで居たんですから。』かう細君が言つた。

『本當よ。』

敏子は微かに點頭いて見せた。

清は一歩を進めたかつた。其一歩先に觸れたかつた。其處には暗黑なある物が潜んで居た。『其男は？』『其のラヴは？』『東京に來てからもう逢つたか？』疑問が彼方此方から起つた。

敏子もそれを感じたらしく見えた。清の方を見た眼は著るしく光つた。敏子は低頭き勝ちにして居た。しかしこの疑問には、何方からも觸れることは出來なかつた。その疑問を背景にして、二人は他のこ

とを語つた。其間に赤兒をそつと寢かして來た細君は、茶を淹れかへたり、菓子を勸めたり、煮え立つ鐵瓶に水を注したりした。婢につれられて町へ買物に行つた五歲になる男の兒も歸つて來た。敏子は、『まァ、勉さんこんなに大きくなつて?』かう言つて、それを膝の上に抱いて見たりした。時計は十一時を打つた。

細君が勝手へ行つて、午飯の支度に懸つて居ると、何だか落付かぬやうにして居た敏子は、

『もう、お午なの……。私、又來ますわ。』

『まァ、好いでせう、午飯の支度をして居るから。』

細君も出て來て、『まァ、好いぢやありませんか、何にもありやしませんけれど、久し振ですからさ。……何か、用がお有んなさるの。』かう言つて敏子の顏を見た。

敏子は振切つて歸りもしなかつた。茶湯臺の上に野菜の煮たのなどが並ぶ頃まで居た。『他の方ぢやないから、お膳を出さずにこれで御免を蒙りますよ、』などと細君は心易立を言つた。淸も何うせ遲くなつたのだから、午飯を濟してから出懸けようといふ積で居た。二年前に、牛込の山手の一間で、かうして一緒に食事をしたことが誰にも思ひ出された。其頃から見ると、敏子は女といふ特色を一層鮮かにした。想像とは違つて、頰だの、手だの、膝だの、何處にも張り切つたやうな處があつた。眼の邊にも深い影が

生じた。

輕い笑聲や押へるやうな囁きが其の周圍に起つた。淸はビールがあつたのを一本拔かせて、明るいコップに泡の立つのを旨さうにして飲んだ。敏子はつゝましやかに音を立てぬ樣にして食事をして居たが、箸を持つ指は何だか物を落しさうにあぶなげに見えた。

『久し振で、敏子さんの箸の持ち方を見ましたねえ。』

こんなことを言つた淸は、いかにも心持好さゝうに見えた。

最後の一椀を半ほど殘して敏子は細君の方を見た。最後の一椀に茶をかけて食ふのが敏子の習慣になつて居た。

『あゝさうでしたねえ、お茶でしたねえ。』かう言つて、細君は笑ひながら、土瓶を取つて渡した。

食事が濟むと、淸はすぐ出懸ける支度をした。洋服を着ながら、

『荷物は書齋の押入の中に藏つて置いたから、今日解いて、入用のものは持つて行つたら何うです。』

『いゝえ、もうぢき來ますから、其時まで預つて置いて戴きますわ……。私は、早く來たいと思つて居りますのですけど、いろんな用があつたのですもの。』かう言つて少し途切れて、『でも、もう好いのよ。大抵片附きましたから。』

『今度は大に勉强するさ!』

『えゝ。』

と敏子は笑つて見せた。

細君と一緒に玄關まで敏子も送つて出て來た。『ぢや緩くり話してお出なさい。私の歸るまで遊んで居ても好いんでせう。』かう言つて清は出て行つた。

初夏の鮮かな心持のするやうな日であつた。ある家の鞦韆の傍には、遲咲の躑躅が眞赤な燃えるやうな色を見せて居た。空は碧く晴れて、細い垣根道には、扇骨木の嫩葉が日影に光つた。清は斜草の庭の周圍を緣取つた櫻の新緣の傍を通つて、向うの臺地にチラ〳〵する西洋づくりの家や、硝子窓や、二階屋の新しい欄干などを目にしながら、汽笛や電車の音のする方へと急いだ。

十

新建の長屋の裏やら丘に凭つた靑いペンキ塗の洋館やらかたまつた欅の森やら、さういふものゝ見渡されるやうな處を電車は駛つた。爺が白い旗を出して居る踏切があつたり、葉櫻の交つてゐる疎らな林があつたり、牛の寢ころんで居る牧場があつたりした。新緣が到る處に鮮かな色を展げた。

郊外から都へ行く電車の中、――それは淸に取つて日毎の生活の意味ある一部分であつた。其處でかれはいろ〳〵なことを思ひ立つた。また其處でかれはさま〴〵のことを思ひ返した。知らぬ人と知らぬ人との間に腰を懸けて、ぢつとして居る間にのみ、かれは自己の內面に深く立入つて考へることが出來るやうに思つた。

見覺えのある車掌の顏、それにも日毎の自己の生活が細く織り込まれてあるやうに思へた。夜遲く終列車の赤い光に照らされた眠さうな顏や、黎明の鮮かな空氣の中に浮出すやうに見える生々とした顏や、思ひも懸けない停車場から思ひもかけない時間にふいと邂逅した驚いたやうな顏や――それが其度毎に起した細かい感情と神經とを、いつも歷々と蘇らせて見せた。

『不思議な處で此人に逢つた。』

かう其顏が言つた。

『今時分……こんなに遲く……』

かう其顏が不思議にした。

平生庇髮に結つて、菫色の袴を着けてゐる女が、ある日高島田に銀簪を挿して、思ひかけない停車場から乘つた。それが其女のライフの變化を淸に思はせたことなどもあつた。乘つて來る人々、降りて行く人々、其處に生々とした複雜したライフがあつた。

『電車が出來てから、人間と人間との交渉が餘程親密になつたねえ。第一、向ひ合つてゐると、其人人の家族といふことまで考へられるからねえ。自分の周圍の人達では、さう離れて考へることは出來ない

けれど、電車の中で見る人達なら、草木を見る位に離れて見ることが出來る。好い木もあり、悪い木もある。』

西さんはある時こんなことを言つた。またかうも言つた。

『此間、飛驒の山の中を歩いて居たがねえ。……それは深い山の中で、人寰には五里も六里も離れて居るといふ處さ。其處で電車の中でいつも見知つて居る顔などを思ひ出すんだから面白いぢやないか。』

ある停車場では、驛長が金緣に赤い色の線をつけた派手な正帽を冠つて居た。ある停車場では、若い助役が着いた驛の名を特色のある聲で高く觸れ廻つて居た。トンネルを出た處の赤い煉瓦に雨の脚の繁く降りかゝるさまが鳥渡眼に映つて見えると思ふと、今度はレールに添つた小さい家で、金網の鳥屋に鷄を飼つて居るさまが不思議にもはつきりと眼に浮んで見えたりした。電車はいつも其間を快く走つて行つた。

其日は電車は空いて居た。前に島田に結つた綺麗な女と、洋服を着た紳士と、印絆纏を着た職人風の男とが乘つて居た。日光を受けた兩側の新緣が車内の人々の顔や衣の上に動いた。

敏子と妻と三人して話した一間のさまがまたしてもかれの眼の前を浮んで通つた。

一人で居る時の心を清は常に離れて考へて見た。其處には暗い影があつたり、恐ろしい影が見えたり、

不安の分子が著しく含まれてあつたりした。秘密にする程の必要のない秘密でも、成丈け人に知られたくないといふ心もあつた。『普通の人間は平氣で生きてゐる。何故自分ばかりかう不安なのだらう。何故かうイラ〳〵して居るのだらう。』

時にはまた、

『一體、さうした暗い處に觸つて見るから悪いんだ。普通の人は、本能とか秘密とかいふものには成たけ觸らないやうに成たけソッとして置くやうにして居る。止むを得ず、それに接觸しなければならない時には、默つてそれに從つて、其影の一刻も早く通過するのを待つて居る。さうでなければ、それを利用して平氣でそれと同化して居る。だからそれに同化されない人間は、成べく避けて居るより他に仕方がない。一體、それに觸つて見るから悪いのだ。』かうも考へて見た。しかし矢張平氣にはなれなかつた。

引緊めて置いた手綱を延ばすと、其處に自由な境地は展けた。しかし『自由』の奥は深かつた。暗かつた。

男と女とは絶えず恐ろしい對照を爲して居ることをかれは感ぜずには居られなかつた。かれは電車に乘りながら、いつもかうした問題を考へた。節操を唯一の寶とする普通の女と、節操を弊屣の如く捨て顧みない女と――本能の命ずるまゝに何の顧慮する處なく巴渦の中に入つて行く男と、本能の手綱を出來得る限り引緊めてそれを一意抑制して行く男と――其間に複雜した心理があり悲劇があり運命があ

つた。

不眞面目で起つても最終まで不眞面目では居られない。眞面目で始まつても徹頭徹尾眞面目ばかりでは居られない。其處に矛盾と衝突とがあつた。

かれは秘密にして置かなければならないことを、男の心で平氣に解釋して、秘密にしなかつた爲めに、ある女を失つたことを思ひ出した。其時、男と女との持つてゐる領分の別々なのを染々感じた。それから節操を一たび破つた女の男の爲めに終極まで玩弄され支配されるあはれさと、遁げて行く女の後から一生懸命に追懸けて行く男の意氣地なさとをも考へて見た。

『人間は年を取れば取るほど、段々性慾的になつて行くやうですねえ。』

平生そんなことを言ひさうもない友がつくぐ感じたといふ風で、さう言つたことを思ひ出した。

『人間は肉體を磨けば肉體が發達する。精神を磨けば精神が發達する。何でも磨いた處が發達するんだねえ。』かう言つたこともあつた。

一二年此方、清の胸は其方面にも展けて來た。年を取つても、女は矢張男の唯一の對照であるといふ風に考へられて來た。此頃時々清が出かけて逢ひに行く女も一人あつた。

十一

書齋を明けて敏子に貸すことにした。處々に躑躅の明るく咲いた芝草の庭を前にして、敏子は薦包を開いた。

包の中からは書籍やら雜誌やらが出た。行李の中には、晴れの場所に用ゆる高價な帶や衣類なども入れられてあつた。『もう再びとは田舍に歸るまい。』包を拵へる時、さう思つて、敏子は何も彼も入れて來た。

大きな信玄袋の中には、男の手紙や清の手紙なども入つて居た。

硯だの、筆架だの、水入れだのを順序よく机の上に置いて、傍の前硝子の本箱には、紅葉全集や樗牛全集やツルゲネエフの全集などを綺麗に並べ立てた。清が社から歸つて、其處に顏を出した時には、もうあたりは綺麗に片附いて居た。

フランネルの單衣を着て、金茶色の帶を後に見せて、明るい窓に向つて坐つて敏子は頻りに手紙を書いて居た。

『夏になると、此室は少し暑いよ。何うも西日がさして……』

清はかう言つて其處に立つた。

『それでも明るいから、住心地は餘り惡い方ではない。』敏子が此方を向くのを見ながら言葉をついで、

『此處なら、少しは落附いて勉强が出來るでせう？』

『えゝ〳〵。』

書き懸けた手紙を急いで丸めて、敏子は膝を此方に向けた。

清は机を座敷に移した。讀み懸けた洋書や雜誌や原稿紙や手紙を入れた反古籠などを其處に持つて來た。違ひ棚の上には新たに買つた洋書を並べて、下の小さい押入にはいろ〳〵なものを入れた。硝子障子になつて居るので、庭の新綠が鮮かな色彩やら日光やらを室内に漲らした。清は其處で筆を執つたり書を讀んだりした。敏子が書齋に居て、自分と一緒に勉强して居るといふことが、何となく辛い藝術の努力を力づけた。

細君もかなり細い處まで清と敏子と敏子の戀人との心理狀態を知つて居た。敏子が今度來ない前、清は輕い心持で、さうした心の狀態を言つて聞かせたこともある。『何うだ、面白いだらう。己ぢやなくつては、鳥渡打てない幕だらう。』こんなことを戯談半分に言つて見たこともあつた。『大丈夫だよ、お前などには、己の心が解りやしない。……十年も一緒に居て、子供の四人も拵へて、それで夫の心が解らんのだから、遣り切れんねえ。』かう言つたこともある。

『しかし心配するのも無理はないさ。かういふことは一足飛だからねえ、……一瞬間だからねえ。一時間――いや十分、五分でも其狀態ががらりと變つて了ふんだからねえ。……しかし大丈夫だ。』

笑ひながらこんなことも言つた。

細君とは女同士だけに、敏子は少しは立入つた話もした。細君を透して、清は敏子の心を知り得た。田舍に居る間も絶えず手紙の往復をして居たことやら、『奥さん、もう其話はよして頂戴、私は今それ處ぢやないんですから、』と言つたことやら、其他種々のことを聞いた。

五月は暖かい南風がよく吹いた。其間に雨が降つたり、月が射したりした。夜は座敷も書齋も明るかつた。

十二

想像したとは違つて、事のない平凡な日が續いた。食後に文學の話をすることなどもあるが、それとても大したことはなかつた。本を敎へてやるやうなことはもう出來なかつた。

午から友達の家へ出懸けてまだ歸つて來ないといふこともあつた。朝から小石川の兄の家へ出懸けて行くといふこともあつた。しかし夕飯をすまして歸つて來るやうなことはなかつた。

『成るたけ交際などはしない方が好いですよ。落附いて、藝術に隱れるといふ心持で遣つて御覽なさい。存外、其處に別天地が展けて居る。』

かう清は言つて聞かせた。

敏子も存外落附いた風に見えた。原稿も一つ二つ書いて見せた。今日から詳しく日記をつけて見ようと言つて、青い罫の引いた用紙を半分に折つて綴ぢて、それに一日の出來事を詳しく書いた。清の談話を二頁も三頁も書いて見せたことなどもあつた。

平凡な日が猶續いた。

清にしても、其の平凡な穩かな日が物足りないながらも滿足であつた。朝に晩に其顏は笑を含んで送り迎へた。影の生じたその眼はいろ〳〵なことを無言で語つて聞かせた。スウイトな明るい哀愁は常に輕く清の胸を通つた。

清は其間にも一二度茅ヶ崎へ出懸けて行つた。

『何うも餘程惡くなつた。咳嗽が烈しく出るやうになつたのが一番惡い。あの病氣はほか〳〵暖くなつて來ると、猶惡いんだつて言ふからねぇ……しかし海岸はよくなつたよ、麥がもう丈が高くなつて夜は螢が飛んでね、今度は近い處の、初めて行つた時泊つた旅籠屋に泊つたが、いろ〳〵なことを考へたよ。田邊も小說の中の人物になつちやつた。』

歸つて來て、かう細君や敏子に話した。

細君は其留守に山田といふ人が敏子を訪ねて來たことを話した。

『若い、綺麗な莞爾した人ね。』

かう細君は附加へた。

それは敏子の友達でもあり、また敏子の戀人の親友でもあつた。敏子が親に伴れられて國へ歸る時にも、いろ〳〵と其間に立つて奔走した。清の作品の出た時にも、友人の爲めに寃を雪いだやうな文を書いて雜誌に載せたことがある。しかし清はまだ逢つたことはなかつた。

一度は清の居る時に其人が訪ねて來た。其時茶を取りに來た敏子の素振には、何處となく落附かないやうなところがあつた。其前に來た時にも、書齋の障子を締切つて、何かコソ〳〵內所話でもするやうに一時間ほど話して行つたさうだ。

『敏子さんには、澤山男のお友達があるのねぇ。』

細君はかう言つて何か搜すやうに清の顏を見た。

食後に、『此頃は山田さんよく入らつしやるのね。』細君が何氣なくかう言ふと、敏子はちらと清の方を見て低頭いて了つた。

清が座敷に立つて行つてから、『昔からの親友ですけれど、面倒なところがあつて、私、山田さん嫌ひよ——』敏子はこんなことを言つた。

十三

清の周圍の家族なども三年前とは著るしく變つて居た。細君の里になる見附側の雜貨店には、依然として母親が見世番をして居るが、此頃では腰が目に立つほど曲つて、客に應對するのがいかにも大儀さうに見えた。別に家を持つた役所勤めの若い息子は、そのぢき近所に住んで居たが、子供はもう二人になつて、其の總領の可愛い女の兒は、毎日のやうに、危ない電車の道をチョコ〳〵と通つて、祖母さんの店へ遣つて來ては遊んだ。

その家の五六軒先に、その姉になる軍人の未亡人が長い間住んで居た。敏子に取つては、路に添つたその狹い格子造の入口は尠からざるなつかしい追懷の種であつた。敏子は其處に少くとも一年は居た。其の路に向つた一間に、一閑張の机を据ゑて、英語の溫習をしたり、文章の練習をしたりした。一番町にある英語の塾にも其處から通つた。髪に挿した白いリボンとハイカラな生々とした扮裝とが、あたりの屋敷町の噂の種に上つたこともある。しかし未亡人はもう其處には住んで居なかつた。

未亡人は一人娘が目白の學校に通ふ便宜上から、一つは其持家が度々一月も二月も明いて居ることがある處から、春の初めの頃に、此處から牛込の山の手の奥に引越して行つた。敏子が何かの次手に訪ねて行くと、快活な肥つた未亡人は、

『まァ敏子さん、』と喜んで迎へた。

『秀子さんも見違へるやうになりましたのね。』丁度學校から歸つて來たハイカラな一人娘を見てかう敏子は言つた。

隣の家も前の家も皆な未亡人の持家であつた。隣の家には、清の兄の遺族がさびしい生活を送つて居た。家が頻りに明く時分、『何うも人任せでは仕方がない。お兄さんが亡くなつて、何うせ彼處に住んで居られないのなら私の家に入つて下さいませんか、家賃など廉くつても好う御座んすから。』かう未亡人が言つた。兄の妻のお三輪は、其時十九になる息子と姪になる不幸な女の兒とを伴れて移つて來た。財産もない兄の遺族は、清と、清の弟になる軍人との補助を受けて生活しなければならなかつた。

しかし、お三輪は矢張元氣であつた。

『此處等はもう後家揃ひぢやがね。かう後家ばかり出來ちや本當に遣り切れんがね。』こんなことを言つて、大きな聲を立てゝ笑つた。

未亡人が引越して來てからは、お三輪は裁縫を持つてよく其家へ行つて一日を暮した。未亡人は十年一日の如くに裁縫の手を止めなかつた。あらゆる苦勞や心配を裁縫に忘れるといふやうに他からは見えた。路に向いた六疊の明るい部屋には、大きな裁物板を中央にして、裁縫を教はりに來る子等が、ずらりと並んで居る。紅絹や銘仙や羽二重などが其處等一面に散ばつて居た。

お三輪の家では、敏子が行くと、『人のお世話になつて居ては、本當に何にもお構ひも出來はしないがねえ。』かう言つて鹽煎餅を茶請に出した。亡くなつた人の話を敏子がすると、お三輪も一緒になつて、やさしい人だつたといふことを盡きず話した。供へられた花が暗い佛壇の中に明るく見えた。

敏子が歸つてから、お三輪と未亡人とは、いろ〳〵に其事を噂し合つた。

『よく親が出しましたねえ。』

かう未亡人が言ふと、

『清さんも中々大變ぢやね、……男が居ちやァねえ、危ないもんぢやね。』

お三輪はかう言つて笑つた。

『しかし、それは大丈夫でせうけれどねえ。』未亡人は言葉を續いで、『あれであの人は中々しつかりして居ますからねえ、……もう前のやうな失敗は爲ないでせうけれどねえ。』

『何うぢやかわからん。』

お三輪は頭を振つて見せた。

清の噂が出ると、お三輪は、

『さう言へば、清さんも此頃は大分樣子が變つて來たぢやないかね、……さばけて來たぢやないかね

……』

『段々年を取つて來ると、さう頑固にばかりもして居られないからねえ。』

『そればかりぢやないと思ふがね……此頃は少しは遊ぶんぢやらうね。』

『まさか、さうでもないだらうけども……』

未亡人はかう打消した。

未亡人のことを清が『姉さん〳〵』と呼ぶので、お三輪も矢張『姉さん』と言つて居た。時には『お姉さん』などと態とらしい敬語を用ゆることもある。『お姉さんなどの眞似は、そりやとても私などには出來はせんがね……あんな働き者は何處に行つたつてありやせん。人の世話にならずに、どん〳〵殘して行くんぢやからねえ。』こんなことを清や清の細君の居る前でよく言つた。

未亡人はまた一人娘の秀子の生立に心を盡して居た。昨年の春、蒼い顏をしてハンケチに藥瓶を包んで醫師に通ふ頃には、此上なく苦勞にしたが、此頃では大分元氣が出て、血色も心持も段々生々として來た。音樂が好きで、ピアノだのヴァイオリンだのゝ稽古にいつも通つて居た。それに學校が學校だけに、萬事ハイカラなことが好きで、髮なども常に流行を趁つて結つた。色の白い眼の綺麗な子であつた。

『家の秀には、何うかさういふことがないやうにと、私はいつでも心の中で祈つて居るよ、お前。』

未亡人はかう清の細君に言つた。

お三輪の家に居る男の兒は、秀子と同じ年で、中學校の四年に學籍を置いて居た。女の兒は昨年漸く小學校を卒業したばかりで、三つほど年下である。若い者の居る二軒の家は、いつも賑かな笑ひ聲で充された。

秀子は袴を穿いて、風呂敷包を抱へて、早稻田の田圃を越して、いつも學校へ行つた。途中で知つて居る人に逢ふことなどもをり〳〵はあつた。秀子は敏子が山の中へ伴れられて歸つた當座、叔父さんの家で取次に出て、その敏子の戀人を知つて居たが、此頃、早稻田の新開町あたりで其顏によく邂逅した。

敏子を餘所ながら知つて居る秀子の友達が同じ級に一人居た。ある日、

『あなた、あの人また出ていらしつてね？』

『何うして知つていらつしやるの？』秀子が訊くと、

『だつて、私、逢ひましたもの。』

かう言つて其友達は笑つた。

『何が可笑しいの？』

『だつて、一人ぢやないんですもの。』

『さう……、本當？』

驚いたやうに目を睜つたが、『何んな人？　眼の下つた？……紺絣の羽織を着てる人ぢやなくつて？』

『さうよ。』矢張笑つて居た。

『さうなの？　本當？　まア。』

秀子はそれを母親に話した。

さういふことが段々清の耳にも入つて來た。

其他にもいろ〳〵聞き込んだことがあつた。何ういふ狀態になつて居るかそれは解らぬが、男と手紙の往復をしたり、一緒に並んで歩いたりするといふことだけは確かであつた。

かうした結果になるのは、豫期しない譯でもなかつた。出京と戀人――父親もそれを第一の危險の理由にした。清もそれを危まぬではなかつた。しかし、清は危險を冒しても、猶ほその成行が見たかつた。

まさかに今度は初めのやうな失敗を繰返すこともあるまい。それに、清は其戀に關しては、寧ろ擁護者とならうと思つて居る。互にしつかりとした考へを持つて、將來を期して一緒にならうといふのならば、いかやうにしてなりと父母の心を解くやうに努めて遣りたいと思つて居る。それだけ二人の恋な行爲を口惜しくも思つた。

しかしそれを糺して見ようといふ氣にもなれなかつた。それを敢てするのは、何だか餘り出過ぎたやうにも考へられた。

『自然に任せて置く方が好い。もう娘ではなし――』かうも思つた。

『實行上のことは私は知らない。馬橋との關係に就いても、當人の心次第、私は何うすることも出來ない。しかし、藝術の方面では出來るだけお世話をして成功させて上げたい。』かう父親に書いて遣つたことを清は思ひ出した。藝術――苦しくなると、清はいつも藝術に遁れた。

『巴渦の中に入つて了つてはいけない。其處には藝術はない。藝術の神は嫉妬深い、實行してゐるものゝ頭には決して宿らない。』清はかういふことを絶えず言つて聞かせた。しかしそれを言ふ時には、その調子に一種の強い力が屹度籠つてゐた。敏子は陰を流るゝある暗潮の壓迫を感ぜぬ譯には行かなかつた。

敏子は斜に坐つて、頭を低れて、默つてそれを聞いた。生々した其の眼は、時々清の方を見た。

時には、清の心が漲るやうに敏子の方へ流れ寄ることもあつた。かれは度々一年前と同じやうな心持になるのを自分ながら恥かしく思つた。その時分と比べると、今では無論餘程離れた心持で居られねばならぬ筈である。女といふものゝ情の曲折も多少は知つたし、自己の心理を客觀することの修行も少しは積んだ積りである。しかし實際に當つては、それは何の効力もないといふことが段々知れた。

清と敏子と馬橋と――この三つの心が絶えず觸れ合つて居るといふことも段々知れて來た。三人が三人とも三人のことを思つて居るといふことも知れて來た。

離れた心持になつたり卽いた心持になつたりした。監督者といふことも考へた。あれほど父親を說いて出京させて、もしものことがあつては申譯がない。かういふ風にも考へた。

けれど其身が監督者として十分な資格を持つて居ないといふことは清自からも知つて居た。其處へ行くと、かれはいつも考へない譯には行かなかつた。男の居る危險を冒しても猶上京を勸めた心の奧をかれは解剖して見た。

ある力に乘せられて行く餘儀なさを清は味つた。

山田といふ其友達がまたある日の午後に遣つて來て、玄關の處で敏子と立話をして、やがて一緒に事ありげに慌てゝ出て行つたといふ話を細君から聞いた時には、一層其力が身の四邊に押寄せて來たやうに感ぜられた。時には、座敷で筆を執つて居りながら、それに對する不安が何といふことなしに萌して來ることなどもあつた。夜は家の周圍を、誰かゞ彷徨つて居はしないかとさへ疑はれた。

郊外の穉樹の林の中が想像されたり、柏木あたりの電車の停留場の近くにあるあやしい二階屋の一間が眼の前に浮んで見えたりした。細君も此頃夫が頻りに懊惱して居るのを見遁さなかつた。

『敏子さんのことになると、貴郎は丸で調子が違つて來るんですからねえ。』

かう細君が言つた。

『何うして？』

『何うしてつて……よく解るんですもの。』少し笑ひ懸けて、

『何もそんなに心配なさらなくつたつて好いぢやありませんか。』

『心配しやせんさ。』

『そんなことがあるもんですか。』

細君は笑つて見せた。

氣難かしくなつたり、性急になつたり、喪心した人のやうになつたりするのを細君は常に見てゐた。一ところを見詰めてぢつと物を考へて居ることなどがあると、

『それ、考へて居るぢやありませんか。』

いつもかう突込んで言つた。其時は淸はきまつて機嫌の惡い顏をした。

敏子の擧動にも何處となくそは〳〵したやうな處があつた。成たけ書齋に引込んで出て來ないやうにして居た。食事の時にも、何か言はれやしないかといふ不安が、絕えずその態度を曖昧にした。物を書いたり書を讀んだりするやうな樣子もなく、机の邊には、書きかけて丸めた半切の反古やむだ書きをした紙などが一面に散ばつて居た。だらしなく机に凭りかゝつて、亂れた髪を後に見せて、ぢつと物を考へて居ることもあつた。

蒼いヒステリツクな顏をして、頭が痛いと言つて居ることもあつた。

持病の肩が凝つたと言つては、國の母親から送つて寄越した持藥を常に用ゐた。

一日、小石川の兄の處から電報が來た。スグコイとしてあつた。慌てゝ出かけて行つた敏子は、翌日歸つて來て、嫂が病氣になつて國へ歸つたに就いて、後に手がないから、また少し手傳つて遣らなければならないといふことを報じた。此間から兄の嫁が落附かなくつて困ると言つて居た。田舍から出て來て、望鄕病にかゝつたやうな處もある。かうも言つて居た。何か嫁の里との間に紛紜が起つたやうでもあつた。

敏子は一時また兄の家へ行くことゝなつた。

十四

茅ヶ崎の病人の容體は段々重くなつて來た。六月の初めには、院長ももう長くはあるまいといふやうな語氣を洩した。咳嗽が出て咳嗽が出て仕方がなかつた。耳鹽に顏を入れて、眞赤になつて苦んで居る處に人々はよく邂逅した。

廊下の隅に食堂らしい處があつた。見舞に來た客の內に、此處で病院の拙い飯を食つて行くものもあつた。淸も一度其の冷めたい卓に坐つたことがあつた。其時、田邊の細君は其處へ來ていろ〳〵なことを話した。

『今一度は何うにかして、少しでもよくしたいと思ひますけれどねえ。』

甲斐の無いことを染々とした調子で言つた。細君の送つて來た辛いライフを知つて居るだけに、清は一倍の同情を起さぬ譯には行かなかつた。財産とてもない後々のことまでも想像した。薄倖な田邊のことも思ひ出された。

『折角、世の中に認められて、これから落附いて筆も執つて行かれる身になつたのに……』かう言つた清は、涙が胸にこみ上げて來て飯などは咽喉に通らぬやうな氣がした。

海水旅館には、大阪に居る田邊の弟が細君を伴れて來て居た。看病旁〻書きに來て居る小説家の室には、いろ〳〵な人が訪ねて行つた。十日ほど前に小説家やら雜誌記者やら新聞記者やら知人やら十人近く病室に集つたのを記念として、病人をお榮さんが負つて、廊下の入口の處に伴れて行つて、明るい光線の下に寫眞を撮つたが、今ではもうさうした元氣は全くなかつた。病室の扉には來客謝絶の札が掲げられてあつた。

同じ年代に生れて來て、同じやうな物の考へ方をして、同じやうな心の閲歴を經て來て、同じやうな女を戀して、同じやうなライフを送つて來た身には、其群の一人がかうして死んで行くのを、深い感激を以て見ぬ譯には行かなかつた。通つて來る病院への路、茅葺屋根の漁師の家、麥の赤く色付いた松原の間の畠、美しく日の輝く初夏の海――かうした複雜した色彩が一層その背景を明かにして見せた。

『まだ、何も爲ない中に……爲よう爲ようと思つて居る中に、人間は死んで行つて了ふんだねえ。』

かう言つて田邊が笑つたのは、まだ昨年の冬のことである。清はそれを染々と胸に繰返した。

梅雨に入つてから、鬱陶しい天氣は續いた。泥濘の深い郊外の路を拾ひながら、清は海岸のさびしい暗い病室を想像した。

かれは新聞に載せる小説に毎日々々追はれて居た。十年前に死んだ母親と其頃の家庭のことを書きながら、十年後の今日の境遇と思想との變遷を比べながら筆を執つて居た。

『暫く病院に御無沙汰をした。今一二回書き溜めて、出懸けて行かう。』かう思ひながら矢張其日々々と追はれて居た。かれは一夜遲くまでかゝつて母親の死んだ後の混雜の一章を書き上げた。夜はもう十一時を過ぎて居た。雨がサツと降つて通つた。臥床に入つてもかれは長い間眠られなかつた。いろ〳〵な過去のことが思ひ出されるやうな夜であつた。其處へ電報が來た。

友の死を報じた電報を、かれは雨に濡れながら門のくゞりを明けて受取つた。

十五

翌日、清が行つた時には、遺骸はもう病院から引取られてあつた。清は顏にかけてある手巾を取つた。眼を少し明けて苦痛の痕もなく田邊は死んで居る。ぢつとそれを見入つた清の眼からは涙がこぼれた。

机の上の茶碗には、水が一杯滿されてあつた。線香の煙は明放した一間に細く眞直ぐにさしのぼつた。此頃は珍らしい梅雨晴で、麥畠や桑畑などに、朝の日影が鮮かに照り渡つて、波の音がブランコのある前の松林を越して聞えて來た。

家の内は靜かであつた。まだ東京から來るものもなかつた。細君とお榮さんと老母と、それに今朝清と一緒の汽車で來たある新聞記者の細君と、それだけの人達がおゆづりを縫つたり線香を上げたり臨終の時の話をしたりした。『貴郎に逢ひたがつて居りましたのよ、それは——』細君はかう話して聞かせた。清は早く來なかつたのを悔いた。

清が座敷の肱懸窓の處にぽつねんと坐つて居るのが外からも見えた。やゝ色付いた麥畑を越して、灌木の新しい綠が漲るやうな豐富な色彩を見せて居る。麥畑の間には、海岸に出る路があると見えて、其處を網を擔いだ漁師が肩から上を見せて通つて行く。薄い鼠色の交つた白い簇々とした雲の間からは、碧い溶けるやうな空が覗かれた。

此處等によく見るやうな藁葺屋根の百姓家がその肱懸窓のすぐ向うの處にあつた。水草の生えた井戸側には釣瓶が伏せてあつて、入口には簑だの、鋤だのが懸けてある。女が一人、鍋と座繰に向つて、せつせと糸を取つて居る。母屋に續いた小屋の低い屋根には、籠に入れられた繭が一二枚干してあつた。その眞白な繭に日が美しく照つた。

子供が喧しいので、お榮さんがそれを伴れて、松原の方へ出て行つたが、暫くして歸つて來た手には、しどめの花だの、撫子だの、名も知らない草花だのを束ねたのが持つて來られた。お榮さんはそれを机の上の茶碗の水に入れて供へた。

東京から一番先きに遣つて來たのは、田邊が青年時代に崇拜したなにがし新聞の主筆であつた。此人の文名は十五六年も前から文壇に聞えて居て、一時は青年から非常な崇拜を受けたことがある。今も政治社會の方面に立派な紳士として、現想的な新聞記者として名聲が頗る高かつた。清も曾ては其文章を崇拜したことのある一人で、二三度逢つて其顏を知つても居れば、その新聞と田邊との關係に就てもかなり詳しく知つて居た。清は田邊から前の細君時代に於ける此人との關係を度々聞かされた。

丈の高い洋服姿は座敷に入つて來たが、やがて悲哀を帶びたハキ〳〵した言葉は其の靜かな一間に聞えた。

『一度來たいと思つて居ましたがつい自分にかまけて、……かう言ふことになつて了つて……それに、新聞で見てもさう惡いやうに書いてなかつたものですから。』かう言つて、顏にかけてある手巾を取つて見て、『ウム、ウム、かうなつて了つては——』と悲しさうに言つたが、すぐ元の通りにして座に戻りながら、『佛とは隨分古い馴染だつた、東京に出るとすぐ私の處に來たんですから。……まだ若かつた、まだほんの坊ちやんだつた。』

老母の眼を泣腫らして居るのを見て、

『しかし、母さん。好い兒を持ちなさつた。佛もなか〳〵豪い人物になつた……こんなに世の中から惜しまれるやうな兒を持つたんだから、母さんも本望だ。』

細君と清とに向つては、

『何か書き殘して置いたものがあるつていふ話を聞きましたが……それは矢張小說ですか。』

『いゝえ日記のことでせう。』

かう清が傍から言つた。

『日記？』

細君は立つて行つて、遺骸の側の押入を明けて、其處から風呂敷に包んだ原稿を持つて來た。

『二十五六年から三十年頃までの日記です。貴郎のお社に居る頃のことや、日清戰爭時分のことが詳しく書いてあります。』清は傍からかう說明した。

『はゝア。』

かう言つて、其上の一册を取つて、『はアこれは細く書いてある。よく斯樣に書いたもんですな。』處々を擴げて見て、『廿五六年から卅年……フム成程……』主筆はある一節に眼を留めた。

其日記には、新聞社のことだの、前の細君との戀愛事件だの、主筆に對する批評だの、總べて思つたことが遠慮なく突込んで書いてあつた。

暫く見て居たが、

『これは面白い。』高い聲で言つて、『これは立派なものだ。財產だ。得たいたつて得られない寶だ。これは一つ、』と清の方を見て、『貴郎方——其時分を知つてる人に校訂して貰つて、世の中に出せば、立派なものだ。本當に好い形見だ。』

かう言つて、讀み懸けた處を伏せて傍に置いた。

笑を含みながら、

『其時分、父さんが社の應接間に來て、其事を私に話して行つたことがあつたです。少し女のことに關したことで……つて、かういかにも話し憎さうにして。』

清に言ふでもなく、細君に言ふでもなく、主筆は田邊と前の細君との戀のことを話した。誰の胸にも其時分のことが考へられた。

『私などは何うも昔から人情のことは解らん方で、さういふことには考へがつかない。其時にも餘程後まで丸で知らないで居たです。ところがこの佛にまかせて置いた雜誌の校正が非常に間違ふ。どうも變だ、變だつて言つて、その校正の間違ふといふ處からその關係が私にも知れて來たといふ譯で——。何うも私などと違つて、話は旨い、調子は上手、若い娘さんにはすぐ眼につくといふやうな人でした。』

主筆は忙しさうに見えた。やがて包の中から香奠を出して、『何か、私がお役に立つやうなことが御座いましたなら、何うか遠慮なく仰やつて下さい。……それに、社の者にも誰か一人來るやうに申して置きましたから、何うかそれも遠慮なくお使ひ下さい。』かう言つて歸つて行つた。

あとはまた元の午前の靜けさにかへつた。波の音が微かに聞えた。清は細君やお榮さんの何彼と忙しい間を、獨り遺骸を前にして、傍に置いてある『日記』のところ〴〵を讀んで見た。

『日記』は三十年の春に清と日光に行つた處で切れて居る。

『もう日記をつけることはやめる。』思ふ處があるが如く、其時田邊は言つた。

日記に書いてある生活とそれから以後の生活とが比べて考へられた。

『奥さん、日記はこれで全部ですか？』

清は暫くして細君に訊いた。

『えゝ、それだけでせう。他にいろ〴〵書いたものもありますけれど。』

清は日記を繰返しながら、

『お照さん、今、何うしてるんです？』

『何うして居りますかねえ。』

『少しも居る所が解りませんか？』

『何でも吳とかに旅籠屋のお上さんになつて居るやうな話ですけれど。』

『一度、新聞に書かれたあの人と一緒になつて居るんですか？』

『さうでせう、屹度。』

『子供は何うしたんです？　一緒に伴れて行つてるんですか。』

『屹度さうでせう。』

前の細君の從姉に當る人が、一月ほど前、清の勤めて居る社に電話を懸けて、

『病人がさういふ希望があるなら、一生のわかれだから、せめて子供だけでも逢はせて遣りたい、』と言つて來たことがあつた。照子が夫を捨てゝ身を隱した時、其子が腹に出來て居たことを、田邊は七八年後に知つた。

其時貰はれて行つた田舍から、可愛い七八歳になる女の兒の寫眞を送つて來たのを今の細君の居る前で田邊は清に見せて、『定坊の姉さんが僕にはあるんだせ、君。不思議なことがあるもんだらう。』かう言つて笑つて、『丸で思ひも懸けないことなんだから面白いさ。見給へ、何處か定に似てるだらう。……つまり懷姙して居ることを僕に知らさなかつたんだね。そこがあの女のえらい處だ。知らせると僕との關係が全く切れなくなると思つたんだね。』すぐ言葉をついで、『今の妻の身になつたら、かういふことを聞いたら、隨分不思議な氣がするだらうね、おい、何うだえ、どんな氣がしたえ？』と細君の方を向いて、『無

論嬉しくはないだらう、さうかと言つて、妬けるほどの大問題でもない、鳥渡くすぐつたいやうな、酸ぱいやうな氣がするだらうねえ。』

『酸ぱいは面白い。』

と其時清も笑つた。

清は田邊から戀愛時代の照子の手紙を幾通か見せられた。田邊を捨てゝ去つた後に寄越した長い手紙も半分ほど讀んで聞かせられたこともある。照子から田邊に贈つた聖書は、綺麗な枝折が入れられたまま、久しい間田邊の書架の中に入れられてあつた。

清は『日記』の頁を飜へして見た。

其處には丁度その戀愛時代の處が開かれてあつた。戀した二人が周圍の人々に壓せられ礙げられて懊惱したり憤激したりするさまが細かく書いてある。先程來た主筆に反抗した言葉などもをり〳〵其中に交つて居る。主筆は其戀に關して同情者でもありまた監督者でもあつた。ある時はその間を破壞しようとする態度に出たこともあつたらしかつた。

清は熱心に讀み耽つた。

其處へお榮さんが來て線香を上げて行つた。

十六

午後からは人々が集つて來た。

洋服姿もあれば、羽織袴もあつた。新しいパナマ帽を冠つた新聞記者、ハイカラな扮裝をした雜誌記者、角帶をしめた書肆の店員――さういふ人達は、狹い家の中に入り兼ねて、緣側の處に立つて居たり前の松原の中をうろついて居たりした。

親しい人達は、病院から運んで來た寢棺を緣側から座敷へ入れた。もう遺骸を棺に納める時が來た。細君達は骨折つておゆづりを着せた。

病室から自宅の一室へ、一室から棺へ、棺から燒場へ。さういふことが人々の悲哀を更に新たにした。平生物に動かない細君の眼からも涙がこぼれた。お榮さんは泣腫らした眼を手巾で押へて居た。

棺に納めようとする時まで、老母は力にした子の遺骸に離れ難ないといふやうに、悲哀に窶れた老いた姿を其處に見せて居たが、もう堪らなくなつたといふやうに、

『秀夫！』

かうけたゝましく名を呼んで、身もだえして、いきなり冷い遺骸に抱き着いた。

『秀夫、秀夫。』

嗄れた母の呼聲と全身に漲り渡つた悲哀とは、眞面目なヒツソリしたこの一と間の空氣を動からず動かした。何だかそれが餘りに芝居めいて見えるほど、其の光景は四邊に伴はなかつた。

人々は呆氣に取られたといふやうに、默つてこの離れ難ない母子の絆に對した。見るに堪へないやうな心地を誰も感じた。

老母の眼からはふり落つる涙は、蒼白いぐたりとした田邊の額やら頰やらを傳つて流れた。

『秀夫、秀夫！』

泣く聲が其呼聲に續いた。皺の深く刻まれた顏には、衰へた筋肉の顫動が歷々と見えた。

弟は次の間から飛んで來て、

『母さん、母さん。』

かう言つて、遺骸から母親を離さうとしたが、老母は抱へた手を容易に離さうともしなかつた。弟の顏にはかうした光景をこの多くの人々の前で見せたといふことを恥ぢるやうな色が上つた。

『秀夫、秀夫、』と老母は猶かき口說いた。

『母さん、そんなことをしたつて仕方がないぢやありませんか。』

細君だの細君の里の母親だのが弟と一緒になつて、漸くのことで抱へた手を放させて、後から押すやうにして、老母を別室へ伴れて行つた。

殘つた人達は、其間に遺骸を棺に納めた。女達の採つて來た花を其中に入れた。長い間看護した病院の若い看護婦も其處へ來て眼を泣腫して立つて居た。蓋をしようとする時、お榮さんは今一度と言つて其顏を見て、暫く手巾で眼を押へて居た。

段々人が多くなつて來た。夕方近く、日が斜に松原に射し透る頃には、東京に用足しに行つた誰彼も歸つて來た。新聞記者や雜誌記者は、故人の交友を彼方此方に要して、めづらしい話を聞かうとして居た。やがて坐る處もないほど室の內は大勢の人で充された。其處に結飯が盆に盛られて出されたり酒の充された貧乏德利が置かれたりした。緣側に腰をかけて、話をしながら、茶碗で酒を飲んで居る人もあつた。

老母はその大勢の混雜の中に小さくなつて坐つて居た。

日はやがて暮れて燒場へ行く時が來た。

行列は靜かに麥畑の道を出て行つた。もう暗くなり懸けた空氣の中には、晒布で卷いた棺が高く白く見える。燒場まで行かない女連は、家の傍の小高い處に一かたまりになつて見送つて居たが、中には歔欷の聲も交つて聞かれた。老母は珠數を兩手で額の處に合せて居た。

通りには漁師の嗅だの、百姓の女房だの子供だのが多く集つて居た。『學者だつてなア、若いのに惜しいことをしたなア。』『肺病つて言ふ奴は……』こんな言葉が其群の其處此處に聞えた。

送つて行く群の中に弓張提燈を持つて居る人も二三人はあつた。『提燈を持つたものは成たけ棺の傍に行つて呉れ給へ。』誰かゞこんなことを大きな聲で言つた。提燈の火は段々光を放ち始めた。

話聲やら足音やらが暫しごた〳〵と夕暮の田舍道を賑かにした。松林の傍を通つたり臺所の灯の明るい農家の傍を掠めたりした。丈の低い小說家と新聞記者との笑聲は、際立つて高く四邊に聞えた。

半ば晴れた夜であつた。暮れ殘つた薄明りが西の空のちぎれた雲を鮮かに見せた。靜かな夜風が麥の穗の上に吹き渡つて、をり〳〵螢が闇を縫つて飛んだ。

燒場まではかなり遠かつた。尠くとも一里半位はある。停車場から病院までの間は、度々見舞に來て誰も知つて居たが、それから先きは人足の行く後について行くより他に仕方がなかつた。停車場や茅ヶ崎の町の灯を後に見捨てゝ、さびしい東海道の松並木を暗い闇の中に見た時には誰も黯然としないものはなかつた。賑かな話聲や笑聲もいつか絶えて、前へ急ぐ人々の足音のみ聞えた。

松並木の間の廣い路がやがて前に開けた。其間にひつそりとした宿場らしい處もあつた。しかし藁葺の屋根の黑く兩側に並んで居るのを見るばかりで、戸を明放して居る家などは一軒もなかつた。人足は唯道を急いだ。

松並木のしばし途絶えた處から燒場へ入る細い路はわかれて居た。提燈を持つた洋服姿が棺を昇いだ人足のすぐ跡に續いて行つた。其處には小松があつたり草藪があつたり麥畑がそれと微かに見渡された

りした。もう置き初めた夕露はわけて行く人々の衣の裾を霑ほした。

松林と麥畠との間に一軒小さい家屋の立つて居るのを誰も皆な見た。人足は昇いで來た棺を一時其處におろしたが、薄暗い二つ三つの提燈の光を取卷いて、ついて來た人々がぐるりと其處に立つ頃にはもう棺を其燒場の釜の中へ入れて居た。

『もうかうなつちやお終ひだ。』

誰か後の方で、こんなことを言つたものがあつた。

しかしこの薄倖の詩人の最後のロマンチィックな光景には、誰も心を動かさないものはないやうに見えた。誰も皆な默つて、人足の火を點ける準備をするのを見た。

傍に立つて居た淸の顏が提燈の光にぼんやりと薄く見えた。

人足は石油をかけた燃料に火を點ずる。火はチラホラと燃え出した。

それを見て人々は歸途に就いた。

十七

西さんはこの六月の始めに、官用で九州地方へ出張した。

福岡、熊本、鹿兒島、宮崎、この四縣を巡回する豫定であつた。出發する前、

『僕も病院に寄つて行かうと思ふんだけれど。……寄らずに行くから萬事賴むよ。事に依ると、もう逢はれないかも知れない。』かう淸に言つた。淸は西さんと田邊との此頃の心持を知つて居るので、達つて病院に寄つて行き給へとも勸めなかつた。

福岡からは博多柳町の繪葉書が來た。二階屋が海に並んで連つて居るところで、其上に、この俗氣紛紛たる地もこの一區あるがためになつかしといふやうな文句が書いてあつた。筑前では朝倉郡から城壁のやうな耳納山脈を越えて、矢部川の谷の奥深く入つて行つた。征西將軍宮の末路と肥後の菊池一族の勤王の蹟とに深い興味をもつたやうな手紙も來た。西さんは古蹟を探る歷史家ではない、また名勝を探る漫遊家でもない。地方經濟の狀態を研究したり、同業組合の事業を奬勵したり、町村自治の狀態を視察したりする忙しい旅行家であつた。縣廳のあるところでは、彼方此方に行つて演說もしなければならなかつた。宴會にも臨まなければならなかつた。農政學の講話もしてやらなければならなかつた。それに、旅行中は常に縣廳の屬官が跟いて歩いた。

熊本では阿蘇山に登つた。山麓の靜かな溫泉場には、溪流が笛のやうな音を立てゝ流れた。『忙しき旅の中にもこの樂しき小閑を得申候、田邊の病氣如何。』其處から寄越した繪葉書の上にはかう書いてあつた。

三角港の海の中に小山の出て居る繪葉書も來れば、天草島の見馴れない海岸の港の繪葉書も來た。面白い處から處へと旅して行く暢氣さ加減が淸には堪らなく羨しかつた。

連日降りつゞく梅雨に濡れて行く旅の佗しさなどを書いて寄越したこともあつた。

天草から再び本島に戻つて、八代から球磨川の谷へ入つた。人吉から寄越した端書には五箇庄近くまで其谷を泝つたことが書てあつた。それから加久藤越、櫻島、鹿兒島、其處では學生時代の連中で一緒に歌を詠んだ昔の友達に邂逅したと書いてある。今一人の友達はこれから船で二日二夜懸らなければ行けないやうなわだつ海の唯中の島に居た。

月の末には、西さんは鹿兒島の西の田舍を視察する人であつた。縣道にはそれでも馬車があつたが、少し脇へ入ると、草鞋がけで歩かなければならないやうな處が到る處にあつた。芭蕉、椰子、蒲葵——日本では見られないやうな南國の植物が其處此處に繁つて居た。土地のものは、外國へでも來たかと思はれるやうな耳に遠い解らぬ言葉で話し合つた。

雨の降頻るある夕暮であつた。さびしい海岸から少し入つた矢張さびしいなにがし町に西さんは着いた。

其處には東京からの手紙がかれを待受けて居る筈であつた。旅行の日割を彼れは豫め東京の親しい人人に知らせてやつて置いた。旅籠屋の女中はやがて受取つて置いた封書や端書を持つて來た。其中にあつた田邊の死を報じた電報はかれを驚かした。

薄倖な田邊の一生はこんな遠い田舍のさびしい旅籠屋の一室にでも考へられた。外には雨が蕭々と降

つて居た。

西さんは清に遣る端書を書いた。

十八

田邊の遺骨は、雨の降頻る日に青山共葬墓地に葬られた。翌日の新聞紙は筆を揃へて其の光景を報じた。中には其記事に二段以上を費したものなどもあつた。それほどかれの死は世に騒がれた。

清は其混雜の中で敏子の父親の上京したといふ報知を受け取つた。御訪問したいがお忙しい御近狀に遠慮するといふ風に其手紙は書いてあつた。清は葬式の濟んだ翌々日出懸けて行つた。

其兄の家は植物園の裏手に當るやうな位置にあつた。矢張雨は降つて居た。かねて敏子に聞いて置いた町の近くに來て、清は俥の幌の中から幾度か覗いて見た。小綺麗な新建の二階屋が其處にあつた。玄關の格子戸を明けて案内を乞ふと、靜かな足音を先に立てゝ、やがて敏子が其顏を出した。

『まァ、先生。』

いそ〳〵として迎へた。

父親も二階の登口まで出て迎へた。丈の高い鬚の濃い莞爾した顏は二年前と變るところがなかつた。父親も清の變らない丈夫さうな顏を見た。

『實は今朝お出懸前に敏と一緒にお宅に出ようと思ひましたけれど……昨夜のお端書で、急に延ばすことにしましてな。』

笑ひながら父親はかう言つた。前夜、柳橋の川に臨んだ料理屋で清は二三の友達と小會をした。其時人々は興に任せて繪端書を書いたり藝者の扇に歌を書いたりした。其處から清は田邊の遺骸に侍した時に詠んだ歌を敏子に寄せた。

『柳橋では、とても今朝はお宅にお居ることはないと思ひましたけん……』

かう言つて猶笑つた。

此父親は敏子が西鶴文粹を繙いて居るのを見て、『娘の身でこんなものを讀んでは仕方がないな、』と眉を顰めたことがあつたといふ。その話をした時、『私などには西鶴はちつとも解りませんけれど、父などには解ると見えますのねえ。』かう敏子は清に言つた。父親は今でこそ堅い禁酒家だが、昔は三味線の一つや二つは彈いたこともある人で、敏子が稚いころ踊を習はせられたのも、矢張この父親の好みであつた。

『お友達でしたさうなが、田邊さんも惜しいことをしましたな。』

こんなことも言つた。

敏子に關しては、

『何うですな、旨く行きますかな……貴郎があゝまで仰しやつて下さるから出すことにしはしましたがな、何うも危ないものぢやと思ひますがな……何うも私や母のいふことは少しも聞きませんけえ。』敏子が茶器を運んで來るのを見て、『何うも分らなくつて困るですけえ、文學の方を遣るなら遣るで、一生懸命に勉强すれば好いが、何うもそれも出來ない。それなら文學の方は思ひ切つて、嫁になるならなるで、いくらも親が好いやうにして遣るんですけれど、それも解らんから困るですけえ。』

敏子は茶をつぎながら、父親と清の顏とを竊むやうにして見た。自分の身の上が何ういふ風に二人の間に話されるかを聞きたくもありまた聞きたくもないやうに見えた。

敏子は何となくそは〳〵して居た。

『貴女も此處に來て、父さんの話を聞いたら好いでせう……そして言ひたいことは話す方が好いぢやありませんか。』清にかう言はれても矢張敏子は落附いて其處に坐つては居なかつた。

『しかし、當人同士が眞面目にやらうと言ふのなら、お父さんだつて、さう飽まで不同意だと仰しやるんではないでせう――』

敏子は膳を運んで來た時、清が父親に向つてかう言つて居るのを聞いた。

『イヤ、駄目でせうな……第一私は男が氣に入らんけえ……。普通の人なら、さういふ過ちも仕方がな

いつて許すことも出來るが、我々神の名に兄弟だと言つて居て、さうしてさういふ不都合をするやうな青年は、何うも賴もしうない。』

父親は笑ひを含みながら言つた。しかし其調子は强かつた。

敏子は膳を清と父親との前に据ゑて、赧くした顏を低頭き勝にして、すぐ下へ下りて行つた。

『しかし、當人同士が好いなら、却つて其方が敏子さんの幸福ぢやないでせうか。』

『幸福？　親の意に背いて、幸福などが得られよう筈がない……』かう言つて笑つて、『兎に角、私は此話には乘らんけえ……貴方のお手紙にも、それは大丈夫だ、誓つて圓滿に事を運ぶやうにと書いてあつたけん、それで今回もまァ上京させることにしましたが、とても駄目なら、今からでも連れて歸る。』

『さういふ譯でもないですけれど……』

清は後を濁らして默つて了つた。

田舍の聲望家で、主人としても、父親としても立派な常識ある五十を越した老紳士とイブセンを讀んだり西洋の思想にかぶれたりした中年の男とは、かうして長く相對して語つた。清は其身と青年の群との間に超え難い崖があると同じやうに、矢張この老紳士と自分の間にもさうした障壁のあるのを感じない譯には行かなかつた。

親と子との關係――イブセンが多くの作品に描き出したその同じ親と子との關係が、少からず此問題

の中にも含まれてある。』そんなことを仰しやつたつて、子は子の好む道へしか行きはしません。』清はこんな處まで話を深く持つて行つて見た。

敏子は其間座敷へ出たり入つたりして居た。吸物を拵へて來たり、ビールの抜いたのを持つて來て清のコップに注いで行つたりした。かうした話をしても、父親は敢て激したやうな樣子もなかつた。莞爾と笑ふ顏には、さうした親の權威を子に强ひやうとする人のやうには思はれなかつた。

段々話が碎けて來た。

後には『まァ、しかし、いろ〳〵のお世話を燒かせて、困つた孃さんですわい、』などと言つて笑つた。

『先生がいくら仰しやつたつて、お父さんには解らないんですもの。』敏子は媚びるやうな調子でこんなことをも言つた。敏子が下に下りて行つた後で、

『何うも矢張私の教育の仕方が間違つて居たんですけえ、何うも仕方がありません。今一人あとにあれの妹がありますがな……さう貴方も御存じだ。あれは一つ旨く教育しようと思つて居ます。どうも餘り學問をさせ過ぎた。神戸などに出したのが、矢張いかんのですわい。』

『さういふこともないでせうけれど。』

『イヤ——矢張家庭で育てなければいけない。寄宿舍生活を長くさせると、家庭を家庭とも思はなくなりますわい。……何うもあれなどにしても、田舍に居るのが自分の宅に居るやうな氣がしないと見える。』

かう言つたが、すぐ話を更へて、

『矢張東京に居るんでせう？』

『さうでせう。』

『何うもそれぢや危いものですな。』清の顏を見て、『いつそ連れて歸りませうか。』

『それ程にすることもないでせう。』

『何うもしかし信用が出來ませんな。』

父親は考へながらかう言つた。

『何か、さうしたことでもあるんですか？』

かう清が訊くと、

『いや——さういふ譯でもありませんがな……一人で出懸けることはよくあるやうです。此間なども、あの雨の降る日に、田邊さんの葬式に行くと言つて出懸けて行つて、遲くなつて歸つて來ました。』

『餘程遲くですか。』

『え、十時頃——娘の身で夜の十時頃まで戸外を出て歩くといふことは困るですからな。……それに、手紙の往復位はしてゐるんぢやないかと思ひますが——』

『さうですか。』

清は他に言ふべき言葉もなかつた。覺束ないといふことは父親以上に感じて居た。しかし折角出て來たのを再び連れさせて歸すといふにも忍びない。それに惜しいやうな氣もする。

『其事は私からも敏子さんによく申しませう。敏子さんだつてまさかさういふことが解らん譯はないですから……此事は矢張當人を信用するより他仕方がないですな。』

『それぢやまア、今少しあなたにお任せすることにしますかな――』

父親はかう笑ひながら言つた。

それからいろ〳〵な話が出た。嫁が病氣で國へ歸つた話、何うも此借家住居は不愉快で仕方がないから好いのがあつたら家を一つ買ひたいといふ話、田舍の別墅の話、そんな話が盡きずに繰返された。ビールの二本目を拔いて敏子が其處へ持つて來た頃には、清はもう大分醉つて居た。

階下で玄關の格子戸の明く音がした。

『兄さん歸つて來てよ。』かう小聲で言つて、敏子は下りて行つた。

少時すると、紺の脊廣を着た敏子の兄が其處へ上つて來た。二人は初對面ではなかつた。四年前清が戰地へ立つ時、京都の停車場に態々逢ひに來て吳れたことがあつた。ボウィが『服部さんつて言ふ方はありませんか、』と客車の中を呼んで歩いた。清は急いで客車の中から薄暗いプラットホオムへ行つた。其時ハイカラな敏子の兄は初對面の挨拶をして、林檎を入れた籠を一箇吳れた。其後京都の岡崎の家を清が

298624

訪ねて行つた事もあつた。其家には敏子が學校友達だといふ若い綺麗な細君と深切さうな婆やとが居た。その綺麗な細君は昨年の春頃心藏を病んで死んだ。清はその細君の悔みから言はなければならなかつた。

十九

敏子はをり〳〵訪ねて來た。

非常に元氣の好い時があるかと思ふと、また時には蒼白い沈んだ顏をして居ることもあつた。心が絕えず動搖して居るといふことは、落附かない其態度に歷々と見えた。

『此頃は少しは勉强して居ますか。』

かう清が訊くと、

『何うも兄の家に居ると、氣が落附かなくつて何も出來ませんの。』

敏子はいつもかう言つた。

清は座敷から書齋へ机を移した。敏子の机は硯箱だの水入だのを載せたまゝ、其一隅に置かれてあつた。本箱の上には、鏡が立てかけられたまゝになつて居た。

清は其鏡に自分の顏を映して見ることなどもあつた。

搜すものがあつて、押入の中に一杯入つて居る雜誌や本を整頓して居ると、其處から、ふと敏子の書

いた短い小説らしいものが出て來た。

題は『二人』としてある。

讀む氣もなしに五六行讀んだ清は、容易に其原稿を擱くことが出來なくなつた。それには男と女との出會が書いてあつた。婢が教へて呉れたので、何氣なしに女が出て見ると、其處に二年間逢はなかつた男が立つて居た。其處は建仁寺垣や扇骨木垣などの續いて居る屋敷町で、午後の靜かな通りには、人の影も稀であつた。女は引れるやうに其男に跟いて行つた。

其近所に樹木の繁つた古い社があつた。二人は其處で種々なことを話した。二年前のやうな無謀なことはもうすまい……。もうラヴどころではない。女はかう言つた。幾度となくさういふ風なことを言つた。『今、一二年は逢はずにお互に勉強しませう……貴方はそれを誓つて下さるでせう。でなくては、私は東京に出て來た甲斐がありませんから。』女はこんなことも言つた。しかし男は容易にそれに應じようともしなかつた。

男の應じない心がことに清の心を強く衝いた。

小説とは清には何うしても思はれなかつた。清は自己を顧みない譯には行かなかつた。

しかし清は其問題に餘り深く觸れて見ようとはしなかつた。眞面目に考へて見ては、またそれをすぐ突崩した。

『行く處まで行かせよう……自分は唯傍觀しよう。』

梅雨は晴れて、段々暑くなつて來た。

二十

月の末に清は旅に出た。

旅に出て初めて此頃の身の周圍が振返られるやうな氣がした。あらゆる刺戟物から離れた眼の前に、夕暮の碧の海が見えたり、繪のやうな海岸の港が開けたりした。

丘のやうな低い山には白い雲がふは〳〵と懸つて行つた。

京都で費した一日が鮮かに眼に殘つて見えた。麩屋町あたりの大きな旅館の一間、其處には總のついた綺麗な小簾が襖の代りになつて居て、暑いキラ〳〵する午前の日影が庭の緣に明かに照つた。當世風に髪は結つて居ても、感じのやはらかな明るい顏をした丁寧な若い女中やお上さんに送られて、三人は車で見物に出懸けた。威勢の好い車はカタ〳〵と鳴つた。

三條の大橋を渡つて少し横に折れた細い通りでは、名代の京櫛を賣る家の古暖簾をわけて、京の商人らしい番頭に、すき櫛やら鬢かきやらを出させて女達の買つて居る間を、紺の脊廣にイタリヤンストロウの帽子を冠つた清は午近い日影のキラ〳〵するのを前にしながら暫く立つて待つて居た。知恩院では高

い石段をわざと三人は登つて行つた。登り終つて時、若い女の方はセィ〳〵呼吸を切らして、二人の方を見て笑つた。キー〳〵と鳴る鶯張りは、女達を珍らしがらせたが、前に幾度も來て知つて居る清は、さうしたものよりもひろ〴〵とした涼しい寺の空氣に心を奪はれた。ところ〴〵の圓柱に『ひる寢無用』と書いてあるのを見て、『成程此のひろい處で晝寢をしたら好いだらうねえ、』などと言つて笑つた。出口の庭には白粉草が赤く白く咲いてゐた。

清水では、五條坂の傍の京の街を一目に見るやうな料理屋の奥の一間で午飯を食つた。清は淡く醉ひながら、かうした種類の女のことやら、敏子のことやらを考へて居た。清水の舞臺や、祇園の櫻や、八阪の塔や、殊に三十三間堂は女達の眼を喜ばせた。『京の三十三間堂の佛の數は三萬三千……』などと小聲で歌ひながら、其堂の内の暗い處を、はしやいで通つて行つた。

西本願寺から嵐山へ行く路は、隨分遠かつた。京の街を外れて、田圃に出ると、七月の夏の日は燃えるやうに車の幌の上から照り附けた。其處には小さい川があつたり、竹藪があつたりした。燕子花の名所だといふ官幣中社の境内には、人の影も見えなかつた。車夫が傍にある車井戸で水を汲上げてゐると、清は暑さに堪へ兼ねたやうに釣瓶に口を當てゝ飲んだ。女連も其處へ行つて水を飲んだり手巾を絞つて顔を拭いたりした。

嵐山の下の川には、人の居ない屋根船が一艘、繪でも見るやうに涼しい綠蔭につながれてあつた。

夜は駒下駄を鳴らして四條の納涼に出懸けた。電燈の明るい中をいろ〳〵な人がぞろ〳〵と通る。橋際のビアホールには、舞子と藝者とお客とがビールを飲みながら騒いで居るのが明かに見える。晝間見た時にはこんな處で納涼が出來るかと思はれるほど殺風景であつたが、夜は驚くほど賑かで明るかつた。涼臺の灯と兩側の電燈とが一緒になつて水に映つてそれがチラ〳〵と綾をつくつて流れる。女達は綺麗な水に足を浸けたりなどした。

長い間に觸れまいと思ひつゝ觸れて行つた心を今までにも考へて見たことも幾度かあつた。好奇心で始まつたことが段々一種の親しい離れ難ないやうな情になつて行く不思議さを、清は染々と經驗せぬ譯には行かなかつた。

それから自由に開いて見た心の複雜した狀態もかれには珍らしく新しかつた。自己の周圍に起る事件と人物、それに對するさま〴〵の異つた感情、眼の前を過ぎて行く種々の現象——それが眼まぐろしいほど早く廻轉して行つた。

二日一緒に居た女連と別れたのは大きな賑かな停車場であつた。乘る人降りる人でプラットホオムは混雜して居た。窓の處に清が顔を出して居ると、一度挨拶して別れて行つた若い方の女が再び戻つて來て、

『ぢや早く歸つて入らつしやい。』

かう言つて笑つて、

『途中からも手紙を下さいね。』とつけ足して言つた。

汽車が出るまで、少し離れた處で、二人の女は白い顔を見せて見送つて居た。

別れた時は自由になつたやうな氣がした。これからが自分の旅だ。かうも思つた。深川で生れた女、賴りにならない性質の好い父と利口な氣の勝つた母とを持つて、十三四の頃から世の中の苦勞をした女、初めから節操を守ることが出來ないやうな境遇に身を置かれた女――さうした女と清は別れて來た。

知つてからもうかれこれ一年になる。其間に其女はいろ〳〵な話をして聞かせた。東武鐵道の停車場のある田舍町に居たこともあれば、海の見える芝の高臺に住んで居たこともあつた。後には何も彼も隱さず話した。田舍に居る頃世話になつた若い豪農の若旦那の話もした。

初めて逢つた時には、濃い勝色の衣に芭蕉の模樣の大きく出た帶をしめて、若々しい扮裝をして居た。庇髪にして居る時もあつた。銀杏返しに結つて居る時もあつた。都を離れた海岸の道を二人して並んで歩いた時には、畠にそら豆の花が白く咲いてゐた。海水浴場のある處から松原を拔けて、小高い丘の上へ登つて行くと、其丘の上には石のお宮があつて、海が其處からぐるりと見渡された。二人は眺め盡した。其海水浴場は青年時代に清がよく出懸けて行つた處であつた。西さんと來たこともある。田邊と來た

こともある。肺病患者のやうな蒼い顏をして松原の中を一人で歩いて居たこともある。磯には依然としてその時分の綺麗な清水が湧いて居た。

小豆貝といふ赤い小さい貝があつた。これは西さんが『妹わすれ貝』と歌に詠んだ貝で、夕暮の散歩には、きまつて拾つたものであつた。女と二人で行つた時も矢張其の赤い小さい貝を搜して歩いた。

『あの時、田邊のことを考へたつけ……もう其人は居ない。』

清は車窓に迫る夕暮の色を見ながら、かう思つた。かれは旅中に校訂する爲めに、鞄の中に田邊の『日記』を入れて來て居た。

上郡といふ驛を通つたのはもう夜中であつた。清はそれでも起上つて、窓をあけて、闇の中の小さい停車場の灯を見た。其處から十三里の山奥の町、其處に敏子を訪ねたのは、二年前の秋の晴れた日であつた。

汽車は絶えず駛つて居た。

耶馬溪の谷では、かねて清に手紙を寄せたり文章を見せたりした一青年の墓に詣でた。志を抱いて死んだ青年の墓は其家の裏山の奥にあつた。老いた父母は緣の高い風通しの好い座敷で、細々と其時のことを話して聞かせた。門の前の深い谷には、鮎を釣つて居る男が其處にも此處にも見えた。

其の青年はロマンチックな空想に憧れたり、白い萩の花に愁を寄せたりする人であつた。さうした心持は淸には殊にはつきりと解るやうに思はれた。境遇に依つてある人の運命は開け、あの人の運命は閉ぢられて行つた。

東京へ東京へとあくがれたその二階の一間からは、隣の田舍寺の鐘樓と庫裡とを隔てゝ、幾重かさなる山々の翠が見渡された。寺の庭には、九連草や天竺牡丹などが明るい夏の日影に照されて見えた。

父母は土地で出來る卷柿を解いて、それを巴渦のやうに切つて、古い盆に載せて、わざ〳〵息子の墓に詣でに來て吳れた東京の客に勸めた。

客は京都で女連と並んで歩いた人とは丸で別の人のやうであつた。暑いのと不便なのとで、洋服と靴とは鞄の中に藏つて、白地の浴衣にヘコ帶をしめて、京都で買つた山桐の安下駄を穿いて居た。金緣の眼鏡のピカ〳〵光るのが、門の處で草を取つて居た母親の眼には異樣に映つた。朴訥な父親の眼にもつくろはない見馴れない姿が、常に遣つて來る旅の商人か何ぞのやうに見えた。『ちつとも存じませなんだでな……失禮して。』後には濟まなかつたものゝやうに、幾度もかう言つて申譯をした。

昨夜日が暮れて馬車で着いた旅籠屋は、すぐ下に溪流の見下ろされるやうな位置にあつた。灯の周圍に山の蟲が無數に集つて飛んで來るので、何處の家でも、洋燈は軒に出して吊して置いた。馬小屋では一日石ころ道を走つて來て疲れて飢ゑた馬が體をハメ板にこすり附けたりモソ〳〵藁を嚙んで居たりした。其傍の圍爐裏では、髮を箒のやうにした上さんがせつせと櫛にさした鮎を燒いて居るが、活々と起きた火に、其顏は照反されて赤く見えた。子供等は蚊の刺すのにも頓着せずに、ごろ〳〵と其處等に寢て居た。半ば祖になつた爺は解らね言葉で、馬車の別當と何か聲高く話し合つて居た。

『福岡の病院から戻つてお出の時は、もう餘程わるかつたんですねえ。』父さんに手を曳かれて此處で一寸休んで行きやした。學者だつていふにな。』宿の女中はかう言つて、其青年のことを話して吳れた。

馬車は四角な六人乘で、石の多い道をガタ〳〵と駛つた。耶馬の谷から大連に遁げて行かうとして、門司で追手に捕へられた十七八の娘は、色の白いぽつてりした綺麗な顏をして居た。連れて歸つて行かれるのが別に苦勞のやうにも見えなかつた。繭買らしい男に立場で氷水を御馳走して貰つたり、戲談口を聞き合つて笑つて居たりした。

中津から宇佐へ行く汽車は、耶馬溪の山々と海岸との間にある平野の間を駛つた。卓のやうな山からは白い雲が簇々と湧上つた。宇佐へ行く間の大きな川の船橋の渡船小屋には、腰の立たない爺が居た。

櫨の樹が丘から丘に續いた。『此頃は養蠶が盛で、櫨は駄目になつた。』と車夫は話して聞かせた。さまざまの人やさま〴〵の人の生活が眼に映つたり消えたりした。

宇佐の太鼓橋の中にある古風な旅館の二階の一間は廣かつた。隣の間の若い二人づれは新婚旅行の人

達らしく見えた。空色の袖のついた襦袢や、處々汗にぬれた絽の單衣や、ズボンやワイシャツなどが一緒に前の欄干に並べて懸けられた。語り合ふ聲は低かつた。

此旅館には花崗石の立派な風呂があつたり、柑橘の大きな木があつたり、何處となくさびしい顏をした上品な上さんが居たりした。膳を運んで來る女中も丁寧であつた。遠い昔のことが思はれるやうな一夜であつた。

蚊帳の中で、清は『日記』の二十六年の條を校訂した。空想に富んだ二十二三の青年の感激が到る處にある。『痛切に宇宙の事象に觸れざるべからず』かういふ風なことが殆ど毎日のやうに書いてあつた。眉の濃い顏の細い眞面目な元氣な田邊が清の眼の前を歷々と浮んで通つた。清は讀みながら傍に置いた色鉛筆を取つて、誤字を直したり疑問點を打つたりした。賴んで一枚明けて置いて貰つた雨戸の間からは涼しい風が入つて來た。

翌日も車、馬車、峠から見た海——それも別府近くなると、趣が全く變つた。夕立の烈しく降る間をある立場で待つて居ると、二階ではだらしのない姿をした女が三人も四人も其處に白い顏を出して、降頻る雨を見て居た。奥からは鼓や三味線の音が賑かに聞えて來た。溫泉の匂ひ、白粉の匂ひ、賑かな明るい町がやがて其前に展けた。

埠頭近い細い通りには、小さい溫泉宿が軒を並べて居た。何處の家でも客が一杯で、四疊半一間すら

一人で占領することが出來なかつた。其處では、清は三階の隅の六疊に四十位の地方の人と一緒になつた。夕飯の時には、麥酒のコップの遣り取をした。其人はこれから四十里ばかり離れたある役所の屬吏で、兼ねて此地の溫泉を久しい間心に懸けて、漸く遣つて來たといふ話をして聞かせた。隣の間には子供を二人連れた學校の先生らしい夫婦者が大きな鞄や行李を持つて來て居た。その細君は幼兒の泣くを嫌しながら、子守唄を歌つたりなどした。濡れた襁褓が緣側の隅につかねられてあつた。

埠頭の夜は明るかつた。夏蜜柑、氷水などを賣る肆が其處にも此處にもあつた。灯が波に映つてチラチラした。人々の待ちに待つた汽船はやがて來た。汽笛が更けた海に震へて聞えた。

端舟の船尾には提燈が一つボンヤリ薄暗く點いて居る。夜は暗かつた。沈むかと思はれるほど荷物や客を載せた大きな傳馬は、暗い波を搖かして靜かに出て行つた。

清はやがてその沖の汽船の甲板の上に立つ人であつた。其處から見た別府の湯の町は、灯にかゞやいて居た。

夜明には、汽船はもうひろい海に出て居た。岸を縫つた低い山の裾には、小さな港があつたり、さびしい漁村があつたり、帆を揚げた小さい船が通つたりした。海には波頭が白く連つて見えた。

汽船はある小さい島の傍を通つた。漁師の家が二三軒其處にあつた。網が竿にかけつらねてあつた。家根からは朝炊の烟が細々と立ちのぼつた。かうした海の唯中の離れ小島にもライフがあつた。

海は染めたやうに碧であつた。晴れた日影が風を帶びた波頭にキラ〳〵と碎けた。

甲板の上に立つて居た清は、

『もう、佐伯はぢきですか？』

油と煤烟と塵とで黑光に光つたボオイにかう言つて訊いた。

佐伯の港はもう近かつた。其處等あたりの島の上には、薄い鼠色の交つた白い雲が低く靡いた。汽船は段々島と陸地との間にある入江の中へと進んで行つた。

『佐伯の町は船から見えますか。』

『船のつく處から一里位離れて居りますから町は見えません。』

かう傍の人が敎へて呉れた。

田邊の『日記』には、この佐伯港のことが詳しく書いてあつた。田邊は二十六七年の頃に、英語の敎師として此處に一年以上も來て居た。清は其話を田邊の口から聞いたことも幾度かある。地方の青年を相手に、ウォルズウォルスの詩集を抱いて、熱い涙を流したことや、弟と一緒に大入島へ船でわたつて行つたことや、可愛い娘の子の家へよく遊びに行つたことや、紀州といふ乞食が居たことや、其他いろいろなことをよく話して聞かせた。日光の山の中の、谷川を前にしたある寺の二階の一間で、その遠い海岸の話を聞いた時のことは今でも明かに清の頭腦に殘つて居た。田邊は漁師の家の明るい灯に見入つ

て。『此處にもライフがある』といつも深い思ひに撲たれたといふ。その一青年の姿が今見えるやうな氣がする。

次第に近寄つて來る佐伯の港を、清は深い感を抱いて見ぬ譯には行かなかつた。

大入島はすぐ其前に横つて居た。帆を揚げた船が其處にも此處にも見える。碧い海と蒼い空と、遠くに連る山々の襞に照る日の影と、それを前にして、白い新しいペンキ塗の汽船は、埠頭を距る五六町の處に來て停つた。

舵機が廻轉する度に、海は白い碧い沸騰した泡をもく〳〵と底から湧かせた。

白い服を着た巡査が一人、埠頭から來る端舟に乘つてゐた。町は低い山の陰になつて見えなかつた。

埠頭には、旅館らしい大きな家が二三軒並んで居て、其前に俥が五六臺置かれてあつた。

下りる人々は汽船の左舷の處に集つて立つて居た。鞄を持つたものもあれば、風呂敷包を脊負つたものもあつた。大分から暑中休暇を國に歸る庇髪の女學生も三四人は居た。

女工の群も交つて居た。

端舟が左舷に廻ると、人々はぞろ〳〵と下りて行つた。上から卸す荷物を下から手を延して受取るものもあつた。庇髪の娘はほつとしたやうに亂れた髪をかき上げて居た。端舟が容と荷物とを積み終つて汽船を離れると、舵機がまた動き出して、碧い白い水の泡が再び船の周圍に盛んに沸騰した。暑い夏の

日影がそれにキラ〳〵と眩しく照る。

十分後には、汽船は既に其港外に出て居た。清は甲板の上に立つて別れて行く港にぢつと見入つた。一生の中再び來ることもあるまいと思はれる港に。

日向の海岸の道には、馬車が時間で立場から發つやうになつて居た。松並木の間からは日向灘の波がをり〳〵白く見えた。

縣廳のある町に近づいたのは、もう午後四時を過ぎて居た。ある立場からは、バナマの古く汗に滲んだ帽子を冠つた洋服の男と、これも矢張脊廣を着た三十二三の男と、透綾の羽織を着た商人風の男とが乘つた。脊廣の男はある旅から歸つて來たといふ風で、バナマ帽の男に頻りに其話をして聞かせた。

『椎葉の山の中はそんなにひどいですかな。』

『ひどいつて何のつて、それはお話になりやしません。路なんてないやうな處を歩くんですから。』

『よくそれで東京の人は歩いて行きましたな。』

『え、中々足の達者な方で……見かけによらん人でした。事務官などは隨分弱つて居りましたけれど……』

『で、今日は延岡からですか。』

『え、縣の境まで送つて行つて別れて來ました。事務官は一緒に別府まで行くつていふことでした。』

『今度來た人は、若くつて中々學者だつていふことですねえ。』

『え、氣の置けない話が旨い人でした。』

『中央政府から來た人のお供も中々大變ですな。』

バナマの男は慰め顏に言つた。

中央政府の役人に椎葉の山の中までついて行つたといふ縣廳の屬官は、日に燒けた黑い顏をして、いかにも疲れたといふ風に見えた。これから家に歸つて、一日二日緩り骨やすめをしなくつては仕方がないといふやうなことも言つた。今一人の商人風の男は、『實業の世界』といふ雜誌の頁を繰返して、成功談だの苦心談だのを讀んで居た。かねて知合つた間柄らしく、三人は土地の話をしたり、旅の話をしたり、雜誌の話をしたりした。『成程此雜誌は廉い』などと言つて、バナマ帽は見終つた雜誌を商人風の男に返した。馬車は風のある埃の立つ暑い田舍道を駛つた。

この人達と相對して腰を懸けて居た清には、段々その中央政府から來た役人の誰であるかゞ解つて來た。それは疑ひもなく鹿兒島から此縣に來た西さんであつた。縣の屬官はその前に大隅の南部から日向の西南部を經て、鵜戸を通つて、宮崎に歸つて來たことなどをも話した。

『鵜戸は好い處ですよ。是非行つて御覽なさい。』

後には清にかう言つて聞かせた。

『その東京の人は、町の橋の傍の旅籠屋に泊つて居ました。』

こんなことも言つた。

西さんは到る處で講話をしたり、演說をしたりした。此の縣では殊に評判が高かつたらしい。『あんなに若くつて、あれで中央政府の好い處に居るんですからなァ。』かうした話が絶えず三人の間に繰返された。清は西さんのことを考へたり、田邊のことを考へたり、かうして田舍に生活をして居る人々のことを考へたりした。

十三四年前に戀だの、空想だの、藝術だのと言ひ合つて、本鄕の通りを並んで歩いた青年とは丸で別の人のやうに思はれた。

其夜清は橋の傍の旅籠屋に泊つた。宿帳には果して西さんの名が書いてあつた。一週間前まで此處に居た人のことがなつかしかつた。

二十一

何故か敏子のことが頻りに考へられた。

それは鵜戸に行く海岸の道であつた。其少し手前の港までは馬車が來るが、それからは草鞋ばきで歩かなければならぬやうな處であつた。崖のやうな處だの、磯と島との間に淺い汐がさし込んで居る處だの、漁師が椿の樹のかげで網を繕つて居る處だの、暗い木かげの川の中で男が手を洗つて居る處などが續いた。

鈴虫や松虫の鳴いて居る叢もあつた。

碧い晴れた午前の空に、明るい日影がかゞやき渡つた。清は胸の緊縮されるやうな悲哀を覺えた。何故涙が誘ひ出されるのか自分にも解らなかつた。

若い時から感情的であつた。それを撓めたり抑へたりして世を渡つて來た。今ではさうした感情が起る度に屹度自ら批判しては自ら罵るのが例になつて居た。感情に心を全く開いたやうなことは何年にもなかつた。それが今、此の海岸の明るい日影に漲るやうに押寄せて來た。

敏子に對する自己の心の狀態を考へる時には、清はいつも自から恥ぢた。それに打克つことが出來ないといふのが一つ。さらば何故に全力を擧げないかといふのが一つ。それは境遇から來るといふよりもむしろ性質から來る。感情に心を任せて了ふことの出來ない性質から來る。

『かうした師を持つたのが敏子の運命だ。』

歩きながら清はかう思つた。

『先生には一生離れない。ねえ、奥さん。母さんと呼ばせて下さいな。』清と清の細君との居る前で、

敏子はこんなことを言つたことがあつた。それを清は今思ひ出した。

海岸の道は長くもあり嶮しくもあつた。峠を越えると、其處に彎曲した渚が開けた。渚には汐入川があつたり、漁船が磯に上げられてあつたりした。渚を越えると、路はまた峠へと懸つて行つた。

此處は七浦七阪と呼ばれる處であつた。

阪に懸る度に、染めたやうな碧の海が前に開けた。この海にのみ――このひろ〳〵とした限りのない海にのみ自己の心が全く展かれるやうに清には思はれた。

途中から道連れになつた郵便脚夫は、丈の高い大きな男であつた。港まで郵便物を持つて行つて、今歸る處だといふ。鵜戸まではもう二つ峠を越さなければならないといふことも話した。

二人並んで歩いた。

郵便脚夫は途中で大きな木の枝を折つてステッキにしたりなどした。前の村で頼まれて來た出產の報知を持つて行つた家には、大きな椿の木が涼しい蔭をつくつて居た。其の蔭に湧いて居る此處らでも珍らしい冷たい清水に、清は渴いた口を當てた。

西さんは廿日ほど前梅雨の降頻る頃、鵜戸から港へと此道を通つた。途中の川に水が出て、それを渡るのが容易でなかつた。濁つた水が海の碧に流れ落ちるさまを歌によんで、それを端書に書いて寄越した。其同じ道をかういふ風にして清は歩いて行つた。

敏子のことを矢張思つて居た。

二十二

霧島山の半腹にある旅舍からは、櫻島を隔てゝ遠い海が見えた。其處ではかれは大海の唯中の孤島に居る昔の友に手紙を書いた。『新橋の停車場にて別れたる君と小生との運命のかくの如く相隔らんとは其時思ひ懸けず候ひし。小生は今君の故郷にあり。猶これより百里を隔てたる海上の君を思ふの情に堪へず候。』こんな文句が其中にあつた。清は其他にも繪葉書をあちこちに出した。敏子に宛てたのもあつた。

京都で一緒に歩いた女には、『こんな山の中を歩いて居る』と書いた。

鹿兒島では、これも矢張十二三年も逢はなかつた昔の友が旅館に訪ねて來た。暑い日影のキラ〳〵するのを前にして、二人は何から話して好いか解らなかつた。戀の爲めに世を犧牲にした此友の頭にはもう白いのが交つて居た。あの時分――かう言つて二人は餘念なく語り合つた。

膳を並べて午飯を濟してから、友は清を城山公園に案内した。登り口で、『もう此處には何年にも來たことがない。さう……』かう言つて考へて、『さう……東京に行く前に來たきり、登つたことはありませんよ。』それほどかれは世に疎く暮して居た。

『君は子供はあるんでしたかねえ？』

かう清が聞くと、

『いゝえ、一人も……』

笑ひながら言つた。

評判に立てられた細君にも逢ひたかつた。しかし友は連れて行かうとはしなかつた。『僕の家など暑くつて仕方がない。』かう言つて、かれは海岸の松の中の料理店に清を伴れて行つた。

翌々日は清はもう球磨川の流を下る人であつた。凄じく水珠のあがる瀬は到る處に展けた。一人は十八九、一人は其弟と思はれる顔のよく似た十五六の二少年が、舳先と船尾に居て櫂を巧に使つた。清のして聞かせる東京の話を熱心に耳を傾けて聞いた。重つた山は流に從つて段々展けて行つた。

其展けて海近くなつた所に八代の町があつた。征西將軍宮の廟のある町、それ以上に其町は清には緣故が深かつた。其處にはかれの父の墓があつた。

肥後八代横手村——

祖父の口に、母の口に、幾度それが繰返されたか知れなかつた。『大きくなつたら一度はお參りをしなくつてはいけない。』七八歳の頃から清はかう言つて聞かされた。父親は丁度今の清の年齢に此處に來て、御船附近の戰爭で彈丸を胸に受けて死屍となつて野に横つたのであつた。

停車場から町へ行く土手には、櫨の樹が涼しい蔭をつくつて居た。やがて古い汚い狹い町が其處に展

けた。三十年前に父親が軍服を着て通つて行つた町と同じであることは、その古い家並が明かにそれを證據立てゝ居た。清はいろ〳〵なことを考へずには居られなかつた。

三十四で後家になつて、大勢の子供と老人とを抱へて、故郷の小さい藁葺家にさびしい生活を送つた母親、力にした一人息子に別れて、長い間を田舍の緣側の隅に送つた目の盲ひた祖母、一家の爲めに志を犧牲にした兄——それ等の人々は皆なそれ〴〵異つた生活を得て、短かいライフの中に泣いたり笑つたりして過ぎて行つて了つた。車に搖られて町に入つて行つた清は、今年七歳になる男の兒のことを考へて居た。

官修墓地は町はづれの街道から見える處にあつた。笠のやうに兩方から蔽ひ冠さつた松並木の奥に、風雨に曝された古い門が見えて、周圍にはぐるりと柵がめぐらしてあつた。蘭のツン〳〵生えた向うには朝露を帶びた緣の蓮の葉の中に紅白の花が高く低く咲いて居た。

墓地を預つてゐるのは、それから街道を少し行つた處の鍛冶屋の隣の饅頭屋の爺であつた。花を手にした清と線香と鍵を持つた爺とは、荷車が通つたり田舍の上さんが通つたりする街道を並んで歩いた。門をあける鍵の音がガチャ〳〵と音を立てた。

中は綺麗に掃除がしてあつた。入口に野梅が二三本あるばかりで、蔭を成した木とてもなかつた。中

央にある隊長の大きな墓を前にして、同じ形の墓が幾通りも列を成して並んで居る。父親の名を發見するのも容易でなかつた。

『何と仰しやるんです？』

爺はかう訊いて、『あゝ、さういふ名がありましたつけ。何でも此方の方だと思つて居ました。』

爺は心當りの方を捜しに行つたが、やがて其墓の所在を知らせて呉れた。其前に立つた清は心を動かさない譯には行かなかつた。其處には父の名と隊の名と戰死した場所と年月とが刻んであつた。

父親の戰死が原因となつた一家の不幸――それももう今では終を告げた。祖父母も死んだ。母も死んだ。一家の犧牲になつた兄も、轗軻不遇の一生を汚ない病院の一室で熱にうかされてうは言を言ひながら死んで行つた。清にしろ、軍人の弟にしろ、今では人の夫となり、人の親となつて、其前には既に新しい生活の道が展けた。卅年の月日は短くはなかつた。

清の胸には追懷の情が漲り渡つた。母や兄の顔が其處にも此處にも見える。田舍の藁葺家も見えれば、母の死んだ原の中の一軒家も見える。殊に父の忌日毎に石摺の幅を床の間にかけて、八重櫻を花瓶に生けて、兄弟三人してお祭をした時のさまが鮮やかに眼の前にあつた。

墓に供へた線香からは細い〳〵煙が颺つた。白く乾いた土の上には、えぞ菊の紅や紫が際立つて見えた。

清は墓前に跪いた。

やがて立上つて、隣の墓石の上に置いた夏帽子を取つてかぶつた。夏の日はもう暑くなり出した。かれは門の處で草をむしつて居る爺の處に來て、何か二言三言言つて居たが、それもほんの僅かの間であつた。やがて笠松の間から街道の方へ出て行く其の姿が見えた。

一時間後には、かれは旅館の一間に歸つて居た。電報用紙を旅鞄の中に探つて、それに、『タヾイマチチノハカニマウズ』と書いた。遠い處に居る軍人の弟に知らせてやらうと思ひ立つたのである。

やがて此處らあたりに特色の赤い襷をした眼の綺麗な十六七の女中が、その電報用紙を受取つて、トントン音を立てゝ階梯を下りて行つた。

百日紅が鮮かな色を見せて居る二階の一間であつた。

二十三

旅から清が歸つて來た頃には、都にももう涼しい風が立つて居た。庭の隅にある鶏頭花は夕日に赤かつた。

留守中には別に變つた事もなかつた。敏子が度々訪ねて來たことや、裾廻しを直すと言つて晴衣を一抱へ風呂敷に包んで持つて行つたことや、此間も帶を持つて行つたことや、書齋に長く入つて何か片づ

けものをして居たことや、沈んで鬱ぎ切つて絶えず蒼い顔をして居ることなどを細君は話した。しかし歸つた二日目に來た時には、瀧縞のセルの單衣に金茶色の帶を緊めて、庇髪を綺麗に結つて、別にさういふ風にも見えなかつた。清のする旅の話を面白がつて聞いて、常に似ず元氣よく笑つて行つた。

『今日は久し振にていろ〳〵お話を伺ひ力を得候こと一通りにては無之候ひし。お話の中に人はいかなる生活の中にもあり得らるといふ御言葉、自づからの生存に價値を認めよとの御言葉、いかなるライフなりともそはわがライフなりとの御言葉、いづれも染々と胸に殘り申し候。』翌日清は敏子からこんなことを書いた端書を受取つた。

出勤の途中、電車の停留場の手前で、敏子が向うから歩いて來るのに邂逅した時には、敏子は餘程近くに來るまで清の來たのを知らずに、物思ひに耽つたといふ風をして歩いて來た。髪も亂れたまゝにしてあつた。顔も蒼かつた。

『何うかしたんですか？』

『いゝえ……』

其聲には狼狽したやうな處があつた。

清の通ふ途中の橋の畔に自働電話があつた。堀端を廻る電車が其前を通つた。向うには煙草屋だの雜誌屋だのが見えた。他人の聞くことを憚るやうな電話を懸ける人がいつも其處に入つて行つた。夜など

若い女が一人で長い電話を懸けて居ることもあつた。清は此處に來ていつも電話を懸けた。其家の電話の番號を白い壁の隅のところに鉛筆で小さく書いて置いた。

返事の來るのを待つ間、受話器を耳に當てゝ、向うの煙草屋の店の色白の娘を見るのがいつもの例になつて居た。其時はグワンと何かで頭を打たれたやうな氣がした。京都を一緒に歩いた若い方の女は、病氣で家に歸つて居て、此間は逢はれなかつたが、今日こそ是非逢はうと思つて遣つて來た。その女がもう居なかつた。先日限りひいて了つたと其電話は言つた。

一年間、別に深く思ふといふほどでもなく逢つて居た。さうした種類の女に眞面目な心を求めるほどかれはもう若くはなかつた。自分でも寧ろ淡すぎると思ふ位の心を持つて居た。しかし打突かつて見なければ解らなかつた。欺かれたといふやうな怒りが其時烈しく起つて來た。

想像は更に其影を大きく見せた。濃くも見せた。自働電話を出て、電車の停留場に行くかれの顔には肉の顫動が見えた。

『本當に病氣なのだらう。』

かう思ひたかつた。しかし何うしてもさうは思へなかつた。

停車場で別れた一幕が今は喜劇となつてかれの眼に映つた。かれは自分で自分を罵つた。

旅から出した繪葉書を取返して破つて捨てたかつた。

二十四

暑中休暇に國へ行つた敏子の兄は細君を連れて近い中に歸つて來る。それと入れ代りに敏子は房州の海岸に一月ほど行つて來たいなどと言つて居た。

其處には敏子の同窓で、油繪を研究して居る友達が行つて居た。

『何だか夏中こつちに居ましたら、體がすつかり惡くなつて了つて……何處かへ少し行つて來ないでは勉強も何も出來ませんから。』

かう言つて、其處の友達から寄越した端書などを敏子は見せた。

ある日、清が社から歸つて來ると、細君は、『今日、敏子さんが愈〻房州に行くんだつて、荷物を取りに來ましたよ。』

『荷物？』

と清は意外な氣がした。

『一時頃來ましてね、先に送つて置くんだつて……俥ももう頼んで來たんだつて、それは忙しさうでしたよ。何だか變だつた、今日は。』

細君の顔にも疑惑の色が見えた。

『荷物を持つて行くとは大袈裟だね。』

かう言つた清は、洋服をも脱がずに書齋に入つて見た。机は其儘にしてある。本も其儘にしてある。しかし重なる衣裳や何かの入つた行李は三箇ともなかつた。寢道具もなかつた。

清はその痕跡を捜すやうに彼方此方を明けて見て、座敷から再び玄關の方へと行つた。玄關の上り口の緣には、重い物を引摺つた痕が二條も三條もついて居た。

『それで、別に何とも言はなかつた？』

洋服を脱ぎながら、清は妻に訊いた。

『何だか、そは〳〵として居ましたよ。それに丁度其時、整子がやかましかつたものですから、其方に行つて居られなかつたですけれど……敏子さん一人で、セイ〳〵言つて行李を運んで居ましたつけ。』

かう言つて、すぐ後を續いて、『いづれ出懸ける前には一度來ますつて言つて居ましたよ。何うせ又來るんだけれど、少し長く居たいからつて……先生によろしくつて言つて行きました。』

『そしてすぐ歸つた？』

『私が整子に此處で乳を飲ませて居ると其處から顔を出して、それぢや奥さんつて言ふから、まア好いぢやありませんか、今、もう整子が寢るところですから、お茶でも飲んで入らつしやいつて言ふと、でも俥と一緒に行かなけりやならないからつて、急いで歸つて行きました。』

『小石川の兄さんはもう歸つて來たのかしら？』

『いゝえ、まだなんでせう。』

清は一服吸つた煙管を長火鉢の緣でトンとはたいて、

『何だかをかしいね。』

『本當に變でしたよ。』

しかしこれ以上に二人は何も言はなかつた。清は此頃體の具合が惡かつた。脚氣から起る神經性の不安が絶えず頭を惱まして居た。少しのことにも心臟の動悸が高くなつた。京都に伴れて行つた年取つた方の女は、廢業した女の內情を、話して好いことだけ話して聞かせた。

年の若い方の女はそれでも一度電話を清にかけて來た。

『是非一度お目に懸り度いと思ひましたんですけどもねえ……今、私、富岡前の自働電話で懸けて居るのよ。』こんなことを言つて、世話になつた禮を長々と言つた。

敏子が荷物を持つて行つた翌日は、灰色に空は曇つて、秋風が肌に冷々した。午後に郵便箱を探つた清の手には、敏子から來た端書が讀まれた。

鉛筆で走り書きをした其端書には、『小石川の電車の終點にて敏子』としてあつた。

『先生には是非一度お目に懸つてお話仕度存候ひしも、事情の爲め、此儘お別れ致さねばならぬことと相成申候、房州にまゐり候やうお話仕候へども其處には參り申さず候詳しくは手紙にて。』これを讀んだ清の胸は震へた。

『こんな端書が來た。』

かう言つて、清は妻にそれを見せた。夫婦は顏を見合はせた。

『一體何うしたんでせう。』

細君がかう言つたのは、暫く經つてからであつた。二人は默つて周圍を振返つて見た。思ひ當るやうなことが其處にも此處にもあつた。『何うしたんでせう一體、これぢやまだよく解りませんけれどねえ、』と夫の顏を見て『身を隱したんでせうか。』

『何うもさうらしい。』かう言つた清は、激昂したやうに頭を振つた。

『馬鹿な奴だ！』

少時してから清はかう言つた。しかしこれは敏子を罵つたのか清自身にも解らなかつた。

清は敏子を隔てゝ其男と相對したやうな氣がした。事情の爲め——かう書いてある。事情？　事情？

其陰には、其男の姿が歷々と映つて見えた。

今までのことがはつきりと頭に入つて來た。其男の握つた絲に敏子があやつられて居たさまが明かに

浮んで來た。

細君と長火鉢にさしむかひに坐つて居たつて仕方がないやうな氣がして、其の端書を持つたまゝ、清は書齋に來て机の前に坐つた。机の上には書き懸けた原稿紙が展げてあつた。それは今日中に書いて終はなければならない原稿であつた。清は苦しい胸を押へて、筆を手に取つて見た。いつものやうに、其苦しみを藝術に遁れて見ようとした。しかしそれは駄目であつた。

少時してから細君が行つて見ると、清は其端書を傍に置いたまゝ、兩臂を机に立てゝ頰杖をして、障子に向つてぢつと空虛を見詰めて居た。

外には秋雨が蕭々と降つて居た。

夕飯を知らせに來た時にも、清は矢張障子を見詰めて居た。

夕飯は默つて食つた。

それが濟んでから、

『それにしても一體何うしたんでせうねぇ？』

かう細君が訊くと、

『何うしたんだか、己に解るもんか。』

清の聲は尖つて居た。

『本當に身を隱したんでせうか。』

『さうだらう。』

『身を隱さなければならないやうなことがあつたんでせうか。』

『そんなことは己には解らん。』

『敏子さんも困つた人ねぇ。』

かう細君は心から言つて、『本當に、あの男の人と一緒に行つたんでせうか。さうなら、さうと言つて呉れゝば好いのに……よく話して呉れさへすればやそんなことを爲ないだつて好いのに……』かう言つて考へて、『此間もその積りで荷物を取りに來たんですねぇ。』

敏子と其戀人と自分との心理狀態が一歩深く内部に入つて行つたやうに清には思はれた。『それが言へないから身を隱したのだ。寧ろ男がそれを女に實行させたのだ――』かう思つた清は辛かつた。

二十五

手紙がやがて來た。

別れの手紙であつた。世話になつたお禮と身を隱さなければならぬ理由とが長々と書いてあつた。『先生の御恩の萬分の一をも報ぜず、藝術をも捨てゝ、實際の巴渦の中に入つて行かねばならぬ身をお許し

下され度候。』かういふ風な書き方で、二枚も三枚も續いた。

『これもいろ〳〵煩悶致し候結果に有之、これより他に私には出て行く道もこれなくと存候まゝ、やむを得ず決行仕り候次第に有之候。……思ひつめ候ことも一度や二度にはこれなく候へども、父母もあり兄弟も有之候身には、なき後の耻辱も思ひ殘され候うて、自由にならぬ身を悲しみ申候。』こんなことも書いてあつた。

小石川の宅から出したことにしてはあるが、消印は芝としてある。清は頭腦の廻轉するやうなのを覺えた。女の所行の大膽と言ふことよりも、恩知らずといふことよりも、自分の持つて居るものを奪ひ去られたといふやうな無念さが胸につき上げて來た。

『馬鹿な奴だ！』

かう言つて清は下唇を嚙んだ。

頭の中は嵐のやうであつた。いろ〳〵なことが想像された。なき後の恥辱！　よくそんな空々しいことが書けたものだと思つて、冷笑して遣りたかつた。何處かの二階の一間で、二人して自分を笑つて居るのが歴々と見えるやうにさへ思はれた。房州、無論房州に行つて居ないことは解り切つて居る。さうかと言つて、消印のある芝にも居る譯がない。身を隱した處から友達に賴むなり、自分で出かけて行くなりして投函したに相違ない。前から計畫して、踪跡を晦ますやうに企んだに相違ない。女を信用して

十分な監督をしなかつたことが今になつて後悔された。

絶えず煩悶して蒼い顔をして居ながら何一言もそれに關しては打明けて相談らしいことを言はなかつた。『先生に知れないやうに――』女はかう言つて居たに相違ない。『先生に縋つてゐた爲めに、此前は、失敗した。今度は少しでもそんなことを知らせては駄目だ。飽まで秘密に事を運ぶやうにしなければいけない。』かう男は女に勸めたに相違ない。清は頭の毛をむしりたかつた。

『馬鹿な奴だ！』

かう再び叫んだ。

しかしこれは瞬間であつた。激した心が次第に意識を恢復して來ると、今度は敏子の身を中心にしていろ〳〵な想像やら、推測やらが起つて來た。同情も起つて來た。

子が親や監督者を離れて、男に從つて行くあはれさといふことも考へられた。

『先生に御迷惑を相かけ候ことは何よりも大なる罪と存候。兄の宅より身をかくし候ことをせめても の好機會と存じ候うて、急に決行致し候ことに御座候。』手紙の中にこんなことが書いてあつたのを清は思ひ出して黯然とした。

女の一生といふことが染々考へられた。

敏子の家出を報じた清の手紙と行違ひに田舍の父親からの長い〳〵手紙が來た。清に宛てたのと同じやうな封書を敏子は田舍にも送つた。

清は敏子から來た封書を其儘に中に卷込めて田舍に遣つたが、父親からは、敏子が送つた手紙を丁寧に寫して、それをその中に添へて寄越した。

父親の手紙は半紙に達者な字で書いたのが三枚、營業用に使ふ半枚摺の罫紙に書いたのが一枚猶ほ言ひ盡されないと言つたやうに、紙の斷片に書いたのが一枚、それを一緒にピンで綴ぢて、封筒には切手をベタ〳〵と張つて、嚴重な書留にしてあつた。

激昂した心が歷々と其の手紙の上に見えた。平生に似合はない思ひ切つたやうなことが書いてあつたり、娘を一人東京に出した自己の不聰明を悔いたり、かうした娘が其家から出たのを恥ぢたりした。

『娘の愚かさ加減、想像にも及ばず、小生一時は五里夢中の心地致し、手、物を落すまで驚愕仕候。』かうした文句で其手紙は始まつて居た。

其處には親の驚いた心が隱すところなく顯はれて居た。清の作品が惹き起した問題から、敏子と其戀人との關係、當時の追想、二月以前に上京した時の狀況、さういふことが繰返して書いてあつて、かゝる不體裁を呈するに至つた動機を一面敏子に、一面清の監督の行屆かない處に置いた。

『畢竟今春貴臺より責任ある書面に對し、且つは當人も十分の責任を以て身を處すとの誓言有之候故

出京致させ候次第に候ふに、別紙の如き不始末、不體裁、實に申しやうもこれなき次第と存候。』

激昂しては、次のやうにも書いた。

『本人の不始末より生涯の目的を誤りたること故殘念ながら今は唯行末までの勘當を致し候より他に處置すべき道も無之候。上京の節、如何にしても馬橋に吳れぬといふことならば、自己に吳れよとの貴臺のお話し有之候、其時、貴臺にならば差上げてよしと申候、今は唯一刻も早く貴臺に送籍仕つり候他に致し方これなく候、さりとて表面戸籍を送り、陰に馬橋に配偶せしむるならば、九死の下瞑する能はず候。』

また次のやうに慨嘆した處もあつた。

『案に違はず、獸慾に陷り、累代會てなき不始末の行爲を敢てし、人に孃と呼ばれたる身を以て、無教育のものも猶敢てせざる不始末を實行するとは……性慾は自然のものなりと言ふやも知れざれど、人道を忘れ、親の恩を忘れ……この事を耳にして以來、母親は枕を上げ得ず、涙をすら自由に流すことも出來申さず……』

田舍では名譽ある家庭、其身は田舍の女學校の顧問として良家の子女をも預る地位にあることを父親は猶縷々として書いた。同じことが繰返し繰返し書かれてあつて、それが容易に盡きようともしなかつた。長い手紙の中には、慈愛深き父親として、名望ある一家の主人として、また狹い田舍に住める一紳

士としての感情が其處にも此處にも明かに見えた。

敏子の手紙には、清に寄越した手紙にないことが一つ書いてあつた。『いつそ自から身の處分を仕り度と煩悶仕り候へども、醜さ體を衆人の前に曝し、此上にも恥辱を一家へ與へ候ふに忍びず候うて――』

敏子は懷姙してゐた。

醜い體――

それが最も烈しく清の頭を刺戟した。ぢつとしては居られないやうな氣がした。

指を折つて、かれは月の數を數へて見た。敏子の上京したのが四月、今月までまだ六箇月にしかなつて居らなかつた。手紙の文句から考へると、懷姙したのは上京して間もない頃であつたらしかつた。

其時分と思はれる時のことが早く眼の前に浮んで通つた。清の家に來て居た頃、兄の家から電報が來た頃、山田といふ男の友達が迎へに來た頃、確かにその頃であつた。

新宿の町外れに汚い鮨屋があつた。其處に近郊の散歩から歸つたらしい若いある二人づれが入つて行つたのを清は見たことがあつた。其鮨屋の閉め切つた二階が見えるかと思ふと、今度は柏木あたりの雜木林の若い綠の中から男と女とが二間位離れて出て來るのが眼に見えた。近郊には若い男と女との爲に備へられたさうした家が其處にも此處にもあつた。踏切に近い處に赤い毛布を緣臺に敷いて、休茶屋らしく見せて、そつと座敷を貸す家もあれば、聾の爺婆が藁葺家の奥の一間を客に明渡して知らぬ顔をして近所に出て行つて了ふ處などもあつた。二十錢、三十錢位で時間を仕切つて貸すところもあつた。

中野あたりの停車場前の小さい飲食店、それから段々奥へ入ると、かなり奥深い林が林へと續いて居た。麥畠にはをり〳〵百姓が草を採つて居る位のもので、細い路を歩いて來る人は稀れであつた。日の光が鮮やかに林の緣にさし透つて、喜びがあたり一面に漲り渡る……何處に行つても、二人は自由なことが出來た。

下宿屋の一間、其處でもさうした一幕は容易に演ぜられた。若い青年の群は、其處此處から氣に入つた相手を選んで伴れて來て、平氣で自分の一間に入れた。其處には麥酒の罐だの、食ひ散らした餅菓子の竹の皮などが一杯に散らばつて居た。其處では歌を唄ふことも出來れば、酒に醉ふことも出來た。何んなに自由な放縱な行爲をしても、誰もそれをとがめるものはなかつた。

その自由な境から女は深い淵に落ちて行くのを知らなかつた。快樂の後に悲痛が來るのを知らなかつた。

新聞紙上に其頃毎日のやうに揭げられた女學生の墮落の記事――それを田舍の父親は前から心配してゐる。その記事をわざ〳〵切拔いて送つて來たことがある。それを見て敏子は笑つた。清も笑つた。それからまだ半年も經たなかつた。

私生兒、それを父親は烈しく呪つて來た。何んなに隱したつてそれは隱し了せるものではない。屆けもしなければならない。本籍をも名告らなければならない。萬一不心得のことでもあれば、それこそ刑事上の罪人になる。それこそ私等一家は世間の顏向けが出來ない。『一刻も早く送籍の手續あらんことを此際達つて願上候。』かう書いて來た。

モウパッサンの作に『アバンドンド』といふ短篇があつた。ある上流社會の令孃が海岸のさびしい家の一間で私生兒を生んだが、その私生兒を四十年も絕つてから訊ねて行くといふことが書いてあつた。訪ねて行く處も面白いが、さびしい海岸で、懷姙した令孃が波の音を聞きながら暮して居るさまがいかにも鮮かに描いてあつた。清はそれを思ひ出した。

もう四月……ことに由ると、五月になつて居るかも知れない。懷姙した女の狀態を清はかねてよく知つて居る。押へ難い幽鬱の思ひ、些細なことに苛々する神經の不安、ことに絕えず動搖する感情――其處にはもう美しい夢のやうな戀はない。他から想像するやうな花やかなロマンチックな戀はない。清は敏子が父に伴れられて初めて來た時の鮮やかな色彩の多かつた姿と蒼い灰色をした艶のない顏をした懷姙した姿とを比べて見ぬ譯には行かなかつた。梭のやうに段々織り込まれて行く運命の中にかうして過ぎ去つて行く敏子の靑春がそゞろに憐まれた。

經驗のない初產の苦痛を海岸のさびしい一間に、一人して味はなければならない不幸な女が歷々と眼

の前に浮んで見えた。

しかし清は何うすることも出來なかつた。搜索をしようと思へば、それはいくらも方法はある。人を賴んで、內々彼方此方を搜して見ても好い。けれど搜し出して連れて來たところが仕方がなかつた。

それに狀況の解らぬといふことが尠くとも多くの不安を清に齎らしたに相違なかつた。細君の他には默つて一言も他に洩さなかつたが、向うから何んな事變が起つて來るか解らなかつた。思詰めた揚句の死！　そんな空々しいことがと一時は冷笑したが、敏子のやうな神經性な空想的な女には、其狀況の如何に由つてさうした悲劇の一幕は演じられないとは限らない。清はさうした一幕を想像する度に、敏子の運命に及ぼした自己の責任を深く感じた。

朝每の新聞紙をかれは注意して見た。女の投身とか轢死とかといふ記事のある度にかれは胸を轟かした。

時にはまたこれで一生逢ふことがないのではないのかと思ふことなどもあつた。コルシカ島に身を隱したフランスの貴族の令孃と其の戀人とは、白髮になるまで其姿を人に示さなかつた。二人にはさうしたロマンチックな幕を打つことは出來ないには相違ないが、しかしさうした幕は打つて貰ひたいやうな氣もした。何處にも居ない、何處を搜しても居ない、年月はその間に經過して行つた。思ひがけない山の中か海岸の荒磯かでゆくりなく邂逅した時は、二人はもう老いて、腹の中の兒が大きくなつて居た……

二十六

清が第一に行つたのは、小石川の敏子の兄の家であつた。兄は二階の一間で清に逢つた。其處には卓だの椅子だのが飾り立てゝあつた。兄は微笑を顏に湛へて、綺麗に頭髪を分けて居た。『私が歸るその日の朝出て行つたんですから、更に樣子はわかりません。私が歸つてから行つたら何うですつて婢が達つて留めたさうですけれど、それまでは待つて居られないつて言つて出て行つたさうです。何うも仕方がありませんな、まア言はゞ當人の自業自得ですから……放つて置くより他に仕方が無いでせう。』かう言つて兄は笑つた。

『何うも一體我儘で仕方がなかつたです。私や親達がいくら喧しく言つたつて駄目なんですから。』

こんな風にも言つた。

先月中は、上野の圖書館に通ふと言つて、毎日辨當を拵へて、朝早くから出懸けて行つたさうである。十時過に歸つて來たことも一二度はあつたさうだ。荷物を持つて行つた話を清がすると、『いやそれは持つて來ません。それは屹度何處かに送つたんでせう。』かう言つて兄は考へ深い眼色をした。

『東京に居るでせうか。』

と清が訊くと、

『いや、東京には居ないでせう。屹度何處か氣の附かないやうな田舍に行つてるでせう……』かう言つて考へて、『けれど餘り騷がん方が好いでせう。搜し出して見たところで仕方がない。伴れて來て置く譯にも行かない。男の狀況を見て居さへすりや、自然と其所在が解りますから、餘り騷いで新聞にでも書かれると困るですから。』

『さうですとも。』

かう言つた清は、存外兄の平氣なのを慊らず思つた。

田舍の父親から來た手紙の話をやがて清は持出して、『私は籍を送つて來ても、それは構はんですが、何うしても馬橋にやるのは厭だ、籍を送るのは送るが、馬橋に遣るのなら一生の憾みだと言はれては、何うも私も困るですな。父さんから馬橋にやるのは厭だから、僕に籍を移して、此問題を解決しようと言ふなら解つて居ますが——』

かう言つた清は胸のつまるやうなある重い壓迫を感じた。敏子の爲め——清はかう思つてこの問題を解決しようとして來た。

『何しろ父が非常に激昂して居るやうですから。』落附いた調子で兄は言つた。暫くしてから、『……さうですとも、當人同士が好いものなら、何も我々がそんなに喧しく言ふ必要はない。もうさういふ狀態になつたんだから、當人達の好いやうにさせる方が好いです。父には折を見て猶さう言つてやることに

しませう……けれど、これで田舍では鳥渡厄介なんです。門地だとか、名譽だとか、いろ〳〵喧しいことがあるもんですからな、東京に住んで居る人には鳥渡呑込ないやうな處がありますよ。』

この敏子の兄の快活な明るい調子は、清の耳に快く響いた。何處かかう同じ年代の血が流れて居るやうに清には思はれた。話がすぐ中心に觸れる。心もよく解る。

歸りは夜になつた。電車の中から雨にぬれた町の灯が明るくチラ〳〵と搖いた。さびしい秋の夜であつた。

清は何することも出來ないやうな位置にあつた。如何なる煩悶も自から處分しなければならないのがかれの此頃の狀態である。『敏子の爲めには、いかやうな犧牲をも拂ひ申すべく、小生に相應せる盡力は辭する處にあらず候。』かう田舍の父親へ宛て〻書いた時には清は泣きたかつた。

書齋の前の梧桐の葉は朝に夕にがさ〳〵と音を立てた。背後の丘の工場の烟突の煤烟は西風に渦を卷いて、機械の動く音が手に取るやうにはつきりと聞える。丘から丘に通ずる路の坂が緣側から一ところ見えて、電信柱の並んで居る間を疎らに人が通つて行つた。風の薄ら寒い夕暮などには、灰色の空の天末を仕切つて、其處だけくつきりと晴れて居ることもあつた。

清は社を休んで、書齋の一隅に床を取つて、高窓から碧いさびしい空を仰向に見ながら、遠い〳〵海

岸のことなどを考へて居ることなどもあつた。

茶の間には、夕飯を食ふ頃、夕日がくわつと障子に射した。細君とさし向ひになると、いつも敏子の噂が出る。『敏子さんは何うも難かしいと思つて居た。』こんなことを細君は言つて、『それにしても何うしてゐるんでせうねぇ……一人で困つて居るでせうねえ。養女にするのも好いけれど、先方がそれほど思つて居ないのに、此方から無理にすることもないでせうねえ。餘り此方で一生懸命にならない方が好う御座んすよ。』長い間一緒に添つて居ても、矢張女には男の心が解らなかつた。

二三年來の絕えざる勞作――この疲勞も段々頭を擡げて來た。筆を執らうと思つても、何うしてもそれが手に附かなかつた。机の上の硯には塵が白く積つた。敏子の机にも座蒲團が載せてあるまゝになつて居た。『少し休まう。』清はかう思つて約束した雜誌の寄稿を斷つた。

成たけソッとして置いても、敏子の噂は段々知れて行つた。役所に勤めて居る細君の兄は、『敏子さん行つて了つたんですつてねえ。』かう言つて、清の顏を見た。

目白に通ふハイカラな細君の姪は、珍らしいことがあるものだといふやうな顏をして眼を丸くして居た。いつもなんでも無邪氣に言つてしまふといふやうな快活な娘だが、其の時ばかりは、默つて叔父さんや叔母さんの顏を見て居た。清の細君が話して聞かせると、『さうだつてねえ、』と低い聲で言つて、まだ其年齡では解らない其事件を眞面目に考へて見るといふやうな顏をして居た。

『秀ちやんなどもしつかりしなくつちやいけないよ。本當に好いお手本ですよ。』

細君がかう言ふと、

『私なんか大丈夫……』笑つて見せて、『伯母さん、ぢきあゝなんだもの、厭になつて了ふわ……敏子さんだつて好いぢやありませんか、自分の好きな人と一緒になつたんだもの。私は舊弊は大嫌ひさ！』

二十七

一月後には、清は田舍の寺に脚氣療養の人であつた。主僧は本堂の側の六疊を掃除して、其處に机だの火鉢だのを持つて來て呉れた。朝は高い簷に雀が喧しく囀つて、日影が晴やかに障子に射した。

霧の深い朝もあつた。銀杏や杉などが微かに其梢を見せて居る間を、肺を病んだやうな蒼い顔をして、清は其處等をブラ〳〵歩いた。何年も撞いたことのない鐘樓の周圍には草が高く深く生茂つて、山門の白壁は處々崩れて居た。たどつて行く路には、草の露が繁かつた。

庫裡の勝手の扉を明けると、其處から長い夜を待ち兼ねた矮鶏が三羽も四羽も羽をひろげて出て來た。朝炊の烟が細く颺つて、やがて寺の上さんが襷がけで桶を下げて井戸端へ水汲みに出懸けて行くのが見える。井戸の周圍には水草が深く茂つて、水をザアと滴すと、餘沫が四邊に露の珠を綴つた。傍には朝鮮菊が白く鮮かに咲いて居た

『いつもお早いですねえ。』

清が其處等をぶら〳〵して居るのを見付けて、上さんは常に言葉を懸けた。

寺の娘が手拭を井戸側にかけて置いて釣瓶の竿を一生懸命にたぐり上げようとして居る時には、清はいつもそれを手傳つて水を汲んでやつた。娘は金盥に明けた水でザブ〳〵と顔を洗つて、手拭の隅の方で擦るやうにして顔を拭いた。

やがて椀に餌を入れて來て、それを其處等に撒いて遣ると、矮鶏はあちらこちらからコ、と聲を立てて、立つて居る娘の周圍に集つてそれを啄いて食つた。

『まだお父さん、寢てる？』

『寢てるよ――』

娘は笑ひながら言つた。

主僧の起きるのは遲かつた。一面に射し渡る朝日を眩しさうにして、手の掌に入れた鹽で齒を磨いた。

『君はいつも早いぢやないか。』

『けれど、此頃の朝は好いからねえ。寢て居ては惜しい。』

『僕はまた此頃は寢心が好くつて起きられない。』

二人はこんな話を取交した。

清の居る本堂の六疊には、パンや牛乳を上さんが運んで來て呉れた。障子を明けると、夜もすがらガサ〳〵とさびしい音を立てた裏山の草藪の中に、漆の木が一本眞紅に紅葉して居るのが見えた。蟲の音が微かに聞えた。

今年の秋は染々とさびしかつた。今まで經て來たライフがそれとなく頭に繰返された。今回の事件に對する自分の位置と、自分の執らなければならない正しい道といふやうなことも深く考へられた。

墓場を拔けて、葉の枯々になつた桑畠の傍を通つて、ひろい野に行く路があつた。野には林があつたり、村があつたり、白壁がところ〴〵に見えたりした。電信柱の並んだレール路には、をり〳〵汽車が白い烟を立てゝ通つた。夕日が秩父の山に靜かに落ちる頃、清は一人でよく其路を通つて野へ行つた。夕暮の空氣の中にくつきりと出て居る其姿は、時にはレール路の上に長い間立つて居ることなどもあつた。

夕燒に其顏が明るく見えた。

『籍を君の家へ入れるといふことは、それは考へものだ。』

主僧はある時かう言つて清の顏を見た。

清が默つて居るのですぐ言葉を續いで、

『それはよく考へなければいけない。君が當人同士の爲めに謀るのは好いが、家庭にはまた家庭といふことがある。こつちのことも念頭に置かなくつてはいけない。』

『それは無論置いてるさ……けれど、僕は敏子の爲めに幸福を計つてやらなければならない責任がある。……と言ふよりも、かう言つては變だが、今少し深い緣と言ふやうなものがあつて、敏子の不幸を放つて置くといふことが出來ないやうな心持になつてゐる。僕もいろ〳〵考へて見たサ。普通から言へば、これを境にして放つて置いても好いんだ。裏面は兎に角、表面は自分の戀を遂げる爲めに師を欺いた形になつて居るのだからねえ。僕に寄越した手紙も一種の告別狀で、自分達は自分達で遣つて行くといふ調子も見えないことはないのだからねえ。僕は幾度かこのまゝ放つて了はうかと思つた。いや、時には師を師とも思はない其の態度に憤激したこともあつた。しかし、考へて見ると、憤激するだけそれだけ、放つて了ふことが出來ないんだねえ。』

『さう物を深く難かしくして了ふのは、僕は不賛成だ。』

笑ひながら主僧は言つた。

『これは昔からの僕の癖だけれどねえ。』

かう言つた清の胸には此友にも打明けて言ふことの出來ない暗い心のあるのを感じない譯には行かなかつた。自分と敏子との關係、それが今一歩進めて居つたなら、こんなノンキなことを言つて居ない、

また居られるものではない。三人の狀態が丸で變つて現はれたに相違ない……

『放つて了ふことが出來ないんぢやない、自分が其巴渦の中から離れるのが厭なんだ……』清はいつも其處まで行つては突當つた。事件の起る度毎に、敏子の眉目が益〻鮮かに印象されて來るのを清は感じた。

『これも僕が作品を公にした自然の報酬さ。』

清は態と輕い調子で言つた。しかし心は重かつた。

『敏子さんは、それは實際氣の毒だよ。……しかし君の爲めにも敏子さんの爲めにも放つて置く方が好いよ。巴渦の中に入るのは愚だ。』

『それは僕にも解つて居る！』と清は言つたが、『しかし、僕には此行先が何うなつて行くか解らん。巴渦の中に既に一歩を入れて居る人間には、よく其の巴渦の眞相は解りよう筈はないんだから……マア、然し、其の成行を見るサ。』

主僧は默つて了つた。

二十八

秋は段々深くなつた。刈稻を載せた車が幾臺となく街道を通つて行つた。

清は田舍の寺に一月以上も居た。其間に社の用事があつて、一度東京に歸つたことがある。再び田舍に戻つて來た汽車の一夜は長く忘られなかつた。

晴れた月夜であつた。明るい光の充ちた廣い野を汽車は轟々として駛つた。白い烟が流るゝやうに野を掠め、畠を掠め、車室の兩側を掠めて落ちた。

東京から乘合せた客は粕壁あたりで皆な下りて了つて、廣い二等室の一隅に、清は一人インバネスの袖をかき合せて居た。窓硝子を隔てゝ見る野は丸で夢のやうであつた。月の明るい光を帶びた白い烟が霧のやうに窓に當つては消え、當つては消えた。

清は自から其身を憐まぬ譯には行かなかつた。常に押へて居た若い感情が漲るやうに溢れて來た。

『若い人は若い人として世の中に出て行く權利がある。』

かう思つて、清は深く考へて見た。

『しかし、かうした運命になつたのは、誰の罪だらうか。妻あり子ある身で、若い敏子を愛したのは自分の罪だらうか。世の中に對して恥づべきことだらうか。

『罪？　罪とは言ふ事は出來ない。遠い山の中の良家に育つた娘、それが何うした原因でか、ふと自分と言つたやうな男と相對した。それが――この運命の初めである。父親は、「如何なる御緣にて父兄も及ばざるお世話に相成候かは存ぜず候へども、」かう書いて來たことがあつた。如何なる緣？　實際如何

なる緣か、かの女と自分との間にかういふ複雜した運命が作られた。

『つまり自分に愛せられたのがかの女の災厄であつたのである。自分に愛されさへしなければ、二人の間の戀も或は其萠芽を現さずに終つたかも知れない。又、戀に落ちたからとて決してかうした難かしい形式に現はれて來なかつたかも知れない。

『身を隱さなければならないやうなハメに陷つたのは、自分が其間に立つて居たからだ。敏子を愛した自分――第三者の資格のない自分が第三者として其間に立つて居るからだ。

『永久に、第三者で居なければならない憐むべき自己――』

『それほど解つて居ながら、何故それに打勝つことが出來ないのか？　何故、それを脫却することが出來ないのか？　さう倫理學者は言ふに違ひない。又、犧牲といふことの價値を說くかも知れない。それは解つて居る。しかし、しかし……

『長い歲月の下に、その感情が一つの空氣を釀して居たら何うしよう？　その空氣が一朝一夕に稀薄にして了ふことが出來ないやうなものであつたら何うしよう？　感情が感情を生み、運命が運命をつくつて行くのは、果して其當事者の罪だらうか。

『哀むべき敏子！』かう思つた淸の胸には悲哀が潮のやうに漲つて來た。

客車の扉を明けると、月の光と共に白い烟がぱつと四邊を掠めて流れた。

『哀むべき敏子！』

淸は暫し其處に立盡した。

二十九

馬橋の居る處が段々知れて來た。淸が田舍から歸つて來る頃には、その下宿してゐる家を敎へて呉れる人さへあつた。

敏子を何處かに隱して置いて、其身は平氣で其下宿に居るらしかつた。かれの交遊の間でもそれを知つて居るものは餘りないらしいといふことも解つた。

其下宿は牛込の山の手のある細い路を突當つた處にあつた。その二階の六疊の間に馬橋は居た。

いよ〳〵其問題を何うかしなければならない時が到着した。しかし淸は今少し放つて置きたかつた。自然に展けて來る解決の時を待ちたかつた。かれは每日例の花園の傍を通つて、郊外から都へ出る電車の停留場へ行つた。

細かい心理狀態は絕えず續いた。何處かに身を隱して居る敏子と、牛込の山の手の下宿に居る馬橋と每日社へ出かけて行く淸と、この三人の心が、其時々に由つて燃えたり消えたりするのがはつきりと解るやうにすら思はれた。『兎に角、自分はこの巴渦の中から脫するのは厭だ。このまゝ、放つて了ふやう

な淡い心にはなれない。少くとも復讐をしてやらなければならない。兎に角、籍を入れよう。さうして置いて、その成行を見よう。』清はこんなことを思つて、獨りで激昂することもあつた。

『ラバーがドウター、イン、ロウになるのなどは面白い自然のアイロニイだ。ざまを見ろ？』

自分でかう罵つて冷かに笑つて見ることなどもあつた。

晩秋から初冬にかけて晴れた好い日が續いた。黄葉した銀杏の樹が些の雲の影もない碧の空に鮮かに聳えて見えた。路傍の林はガサ〳〵と鳴つて、木の葉が風の一吹きごとにバラ〳〵と散つた。途中の小川でいつも洗つてゐる百姓の大根は白かつた。

この晴れた日の一日であつた。清は社の高い三階の編輯室で一通の手紙を書いて居た。處々の高い窓からは、碧い晴れた空が都の瓦甍やら烟突やらを隔てゝ高く展けて居た。スコッチの脊廣に地味なネクタイをした清の姿は多くの編輯員の中に交つて見られた。清は其手紙を二度も三度も書き懸けては破つて捨てた。烈しい語氣が出たり、わざとらしい同情の言葉が出たり、心の中を裏切するやうな文句が出たりした。三度目には、『もう止さう、今少し放つて置かう。』かう思つて卷紙を傍に置いて、心を落附ける爲めに卷煙草を一本吸つた。

しかしこのまゝ捨てゝ置けぬほどかれの心はつき詰めて居た。この手紙を書かうと思立つてから、もうかなりの日數になる。現に今日のやうに書きかけてやめたことも一度や二度ではない。敏子の所在を

搜し出して、其の成行をかれは一刻も早く見たかつた。何んな醜い形をして居ても、かれは敏子に逢はずには居られないやうな氣がした。

かれは其手紙を長い間かゝつてやつと書いた。それは十行位しかない手紙であつた。それには生れる兒の處分といふことを中心にして居た。清はそれを讀返して、封筒に入れて、牛込の下宿の番地を書いて、それから馬橋の名を書いた。

手紙を出した翌々日、少し用事があつて、清はお茶の水の停車場で甲武の電車を下りた。矢張心地よく晴れた日で、朝の光が寒い街頭に充ち渡つて居た。やゝ下り坂になつた舗石道の上を外濠の電車が滑かに駛つて行つた。

甲賀町の停留場の前には、新聞賣が新聞紙を電車の窓の前に差出して、高い賣聲を立てゝ居た。乘らうと思つて小走りに急いで來た電車がつい五六間の處で出て行つて了つたので、清は次の電車の來るのを待つべく餘儀なくされた。車掌が前の家に出たり入つたりするのを見ながら、清は久しい間其處に立つて居た。

電車は容易に來なかつた。

停車場の時計は九時十五分のところを指して居た。初冬の日影が家屋の影やら庭樹の影やらを鮮かに

地上に印して、大きな病院の門内からは、肥つた看護婦が二人、何か面白さうに話しながら出て行つた。やがて電線が遠くから近くに鳴つて、一臺の電車は下り加減になつた道を日影に照されながら停留場へと近づいて來た。中折帽だの、山高帽だの、丸髷だのが硝子窓の中にチラ〳〵見える。

二三人客の下りるのを待つて、清は乘つた。

明放した扉の入口に立つた時、清ははつと胸を躍らした。

其處には馬橋が乘つて居た。

馬橋も同時に此方を見てはつとしたらしかつた。かれは茶色の中折帽を被つて、絣の羽織を着て、汚れた袴を穿いて、手に西洋の雜誌を持つて居た。

『ヤア。』

と、それでも清は聲をかけた。

馬橋は立つて、帽子を取つて、挨拶を返した。

馬橋の隣の席が明いて居た。清は無意識に其處に腰を懸けた。馬橋も再び元の席に腰を下した。

二人とも眞面目な顔をして居た。

默つて居た。

先に口を開いたのは馬橋で、もう其時は電車は動き出して居た。『お手紙を難有う……』かう言ひて、

苦しさうに言葉を途切らせて、『御返事を昨日出して置きましたが、御覽になりましたか。』

『いや、まだ見ません。社の方に出したんでせう？』

『え。』

沈默が續いた。

明るい日影が硝子窓を透して車内に漲り渡つた。前に腰をかけて居る官吏らしい紳士が此方を見た。町の家並、軒にかゝげた大きな看板、ぞろ〳〵と通る人の群――それが早く〳〵眼の前を過ぎて行つた。

『實は――』やがてかう言ひかけた清は、烈しい心臟の鼓動を感じた。『實は、君のところが解らんから、今まで放つて置いたんだが、此間、ある人から君の居る處を聞いたもんだから、それで手紙を上げたんだがね……』聲を低くして、『此まゝ放つて置く譯には行かんからねえ、子供のこともあるからねえ。一度緩り相談をしなければならないと思ふんだがね。』

心の底を裏切するほど清の聲は震へて居た。

前の官吏はまたじろりと此方を見た。

『それに、小石川の兄さんも心配して居るからねえ。』

かう清は續けて言つて、馬橋の手にして居る西洋の雜誌を見た。カーレント、リテラチュアといふ雜誌で、それには大陸文學の評論などが常によく載つて來た。

『此項少し忙しいものですから……』馬橋は低頭いたまゝで、『差上げた手紙にも書いて置きましたがいづれ其中詳しい御返事を申上げますから。』

『今、何處かに出て居るんですか？』

清は心の動搖を蔽ふ爲めに、わざとかう碎けて出た。

『え、つまらん處ですけれど……』

『何處です？』

『旅行新聞といふつまらん新聞です。それに私が大部分遣つて居るものですから、忙しくつて仕方がありません。朝は八時から夜は十時位まで遣ることもあるんです。』

『それは大變だ。』

『何うせ長くは居ない積ですけれど……』

二人は暫く默つた。

『旅行新聞？』とやがて清は少し考へる眞似をして、『あんまり聞いたことがないが、そんな新聞があるんですか。』

『つまらん新聞ですから。』

『社は何處です？』

『ぢき、この先の處になつて居ます、』と丁度錦町の停留場を出たばかりの電車の窓から振返つて、其方角を指した。

また沈默が續いた。

電車は神經を刺戟するやうな鋭い音を立てゝ、錦町河岸に出るカーブを曲つて行つた。硝子窓からさし込む日影は向う側の丸髷の女の膝を照すやうになつた。濠を隔てた高い石垣の上には、山の中からつい近頃出て來たといふやうな新兵が五六人、並んだ姿を繪のやうにはつきり見せて、頻りに喇叭の稽古をして居た。

膝を並べて沈默して居るのが二人にはいかにも辛さうであつた。馬橋が清の家によく行つた時分からは、もうかれこれ二年以上にもなる。其間にはいろ〳〵なことがあつた。いろ〳〵な感情が燃えたり消えたりした。馬橋の胸にはある力の壓迫に對する一種の反抗といふものもあつた。

清は言つた。

『此間、小石川の兄さんに逢つた時も、何うせ、さういふ事になつたんなら仕方がないからつて、同情して居たですからねえ。何もそんなに隱したり何かするには當らない。君達も誤解して居ちやいかん。僕だつて、好意を持つて居ない譯ぢやないんだから。』

馬橋は默つて聞いて居たが、急に、

『何うも、私には先生が解らなくつて困るんです。敵だか味方だか何うもよく解りません。』

『さういふ風に考へるから困るよ、君達は――』

清は平氣な調子で言つたが、しかし烈しい衝動を感じない譯には行かなかつた。其言葉は確かに清の胸を深くついた。

馬橋はやがて立上つた。電車は既に神田橋に來て居た。

『それぢや、先生、此處で失禮します。四五日待つて下さい。確りした御返事はその時致しますから。』

かう挨拶してかれは電車を下りて行つた。

馬橋の言つたその一語を清は繰返して考へた。『へ、敵か味方か解らない？』かう冷笑もして見た。また微笑まれるやうな氣もした。敵か味方か、實際其通りだ。敵になるか、味方になるか、それより他に出て行きやうのないのがかれと馬橋との間柄であつた。

『敵か、味方か。』

其一語が鐵の棒のやうに冷かに清の胸に横たはつた。

三十

馬橋の返事は端書で、唯簡單に忙しいから四五日待つて呉れと書いてあつた。電車の中で過した十分間の光景は、深い印象を清の頭に殘したばかりではなかつた。馬橋の取つた態度から推して、かれ等の細かい心裡も略ゞ想像された。

何ういふ風に出て來るか、それを清は一種の期待と好奇心とを以て待つた。二三日は其間に經つて行つた。

思ひもかけず馬橋の親友の山田から最初に手紙が來た。それにはかう書いてあつた。自分は此問題の中に入るのは好まないけれど、賴まれて據ないから、一度御都合の好い時にお目に懸り度いとしてあつた。清はそれを見て厭な氣がした。兎に角此方から出て行つた好意を酌み取ることの出來ない馬橋の態度に慊らなかつた。

しかし清は其の都合の好い日を山田に報じて遣つた。

郊外の朝はもう霜が白かつた。硝子戸を透して明るい晴れた日の光線がさし込んで來た。其の八疊の座敷で、ある朝清は其山田といふ青年と相對して坐つた。角火鉢には櫻炭が活々と起つて居た。

清の眼には、しつかりした、しかし何處かに優し味のある、額の廣い眼のはつきりした一人の青年が映つた。縞の羽織と角帶とが何となくその人を商人風に見せた。

話振も落附いて居た。

主人の大きな體と太い聲とは、客の瘦削な體と小さい聲と面白い對照をなして見られた。

其處に茶を運んで出て來た細君は、遠慮のない打解けた調子で、

『敏子さん、御丈夫なんでせう？』

『え。』

かう言つた客の顏には少しく狼狽した樣子が見えた。敏子の所在を客はまだ打明けなかつた。清も成だけそれを此方から聞くまいとして居た。

細君が茶をついで引込んでから、『私は、さうしたいと思ふんですが、當人は何んな考だか、それを聞いて見なければ駄目ですけれど……』かう清は前の言葉を續いで、『國では非常に怒つて居るですから、とても手をつけることは出來ない。それに、田舍の名譽とか虛榮とか言ふこともある。だから、何うしても籍は私に寄越すと言ふんです。父親は馬橋にやる爲めに籍を送るんなら恨みだと言ひますけれど、そんなことを今になつては言つて居られないし、それは小石川の兄も承知して居ることですから、當人達さへそれで好いなら、私はさうしたいと思ふんです。しかし、私ばかり好意を持つて居ても、當人達にそれが解らなくつては甲斐がないですけれど……』

『いゝえ、そんなことはありません。馬橋君は一人で誤解して、いろ〳〵に考へる質なものですから……先生がさう仰有つて下さるなどとは夢にも想像して居らなかつたんです。』かう言つて山田は清の顏を見た。

『先生のお話を當人に解るやうによく言つて聞かせませう。本當にそんな風に考へては居なかつたんですから。敏子さん身を隱す時にも、何んなにしても、國では屹度捜し出して連れて歸るに違ひないつて言つて居りました位でしたから。』山田はかうつゞけて言つて、『ですから友人でも誰も知つて居るものはありません。私と馬橋君と三人きり知つて居ないんですから。』

『それで一體何うしてるんです？』

『上總の海岸に行つて居ります。』

『上總の海岸？』

かう清は問ひ返すやうな調子で言つた。

すぐ言葉を返して、

『一人でですか。』

『え。』

山田は靜かに答へた。

『上總の海岸は何處です？』

『一の宮の近所で、九十九里の濱の、何とか言ひました。何でもひどい田舍ださうです。』

『九十九里？　それでは敏子が父さんに連れられて田舍へ歸つて行つた年の夏に、馬橋が行つてた處

ですね？』

『え、さうです。』

それは停車場から三四里も海岸に近寄つた處であつた。其處には砂山があつたり松林があつたりした。砂山の間には海に注ぐ小川が絶えたり續いたりして、蘆や蒲の新らしい芽などが茂つた。失戀の苦痛を醫す爲に新緑の頃を二月ほど行つて居た馬橋は、其時その世を懸け離れた海岸の話を詳しく淸にして聞かせた。馬橋はある漁師の家の二階を借りて住んで居た。其家の女房は四十女で極端な田舍者だが、よく世話をして呉れたといふ。また其處は漁村に見るやうな淫靡な地で、白粉を塗つた女の居る小料理屋が、其處にも此處にもあつて、大漁の時などはそれは賑かであるといふ。『他に見られないやうなカラーがありますよ。先生などお出になると、屹度變つたものが出來るに違ひないですが……』こんなことをも馬橋は言つた。淸は其時この失戀の一青年が、夕暮ごとに松のある砂山の間から遠い海のかゞやきを見たり、微かな波の音を聞いたりするのを想像して深い同情を寄せた。馬橋は其處から小さい瓶に入れた鰹の鹽辛を土產に持つて來て呉れた。

其二階に敏子は身を隱したのである。

『小石川からすぐ其處に行つたんですか？』

成るたけ此方からは聞くまいと思ひながらも、淸はかう訊かぬ譯には行かなかつた。

『荷物は先に送つて置きましたけれど、あれから二三日は牛込の馬橋の下宿に居たやうでした。』

『今の下宿ですか。』

『え。』

『それぢや前からその下宿に出入して居たんですね。』

『えゝ。』

山田の顏には微笑が見られた。

『初めは一緒に行つたんでせう？』

『え、一月ほど二人して一緒に其處に行つて居ました。……けどもそれでは仕事が出來ませんから、敏さんを置いて、一先づ馬橋君は此方に出て來たのです。』

『何時です、出て來たのは？』

『先月の初め頃でした。』

『それで一體馬橋君は何う考へて居たんでせう。隱し了せる積りだつたんでせうか？』

『さうでも御座いますまいけれど、何うするつていふ考も出なかつたんでせう。先生や小石川の兄さんがさういふ考をお持ちだとは少も知りませんでしたから。』

『何うも馬橋君の遣り方が僕には呑込めない。』

かう言ひかけた清の聲は眞面目であつた。

『あの初めの時だつて、隱さなくつても好いことを隱して好意で圓滿に成功することを打ち壞して了つたやうなところがある。今度だつて、丸でヤリ方が破壞的なんだからねえ。……何もさうまでしないたつて好いと思ふんですがねえ。』

『何うもさういふ處があつて、いつでも誤解されて困るのです。感情一方で、平生神經をつかふ方ですから。』不圖思ひ附いたやうに、『私も一度はいつそ二人の間を打壞して了はうかと思つたことがあつたんです。打壞して了つた方が馬橋君にも敏さんにも幸福だと思つたことがありました。』かう言つて、山田は思ひ返すやうな風をして、『さうでした。あれは八月頃でしたが、二人の間が鳥渡變になつて、敏さんが馬橋君を避けるといふ風な時がありました。三人で近郊などを散歩しましても、敏さんは始中終物思はしいといふ風をして居て、いつものやうに元氣がないんです。馬橋君が何か慰めるやうなことを言ふと、「そんな芝居の臺辭見たやうな紋切形は厭よ」なんて言ふんです。其時分、先生が敏さんを養女にして、純然たる文學者にさせるといふ話を聞いて知つてゐたもんですから、これは的切、戀がさめて了つたんだと思つて、馬橋君も非常に絶望して泣いたり何かして居ました。私もいつそ破壞して了つた方が好いと思つたんです。處が其時もう懷姙して居たので、敏さんはそれを馬橋君に打明けようか打明けまいかと長い間煩悶して居たのだといふことが後で解りました。』

九州の旅から歸つて來た頃の敏子の蒼い顏を清は思ひ出した。

『兎に角敏さんは姙娠といふことに就いて非常に煩悶したやうでした。一時はこれを誰にも言はないで、自分で自殺して處分しようなどと考へたこともあつたらしかつたです。それから先生に打明けて馬橋君との戀の關係を全く絶たうと思つたこともあつたらしい。……けれど矢張女ですから、結局馬橋君に打明けるといふことになつたんです……。私もそれを聞いた時は喫驚しました。』

『はゝァ、さうですか。』

かう言つた清はある新しい意味を二人の戀の中に發見したやうな氣がした。女が陷つて行く自然の徑路も染々考へられた。

『はゝァ成程、さうですかな。』

再び繰返して言つた清の聲は低かつた。田邊の前の細君が懷姙したことを知らせずに身を隱したことなどが思ひ出された。

『それを打明けてから、二人は前より一層離れられなくなつたのです。二人はそれから身をかくす處分に取懸つたのでした。……』

青春の過ぎ行く悲哀といふやうなものが明るいスウイトな味ひを靜かな朝の一間に漲らせた。敏子の若い時を知つて居るだけそれだけ、清にはその戀の成行が鮮かに眼に映つた。

白いリボンを懸けて、明るい顔をして居た頃がなつかしかつた。二疊の狹い一間に机を置いて、一輪挿に匂ひの高い沈丁花を活けて、艶な白い顔を薄暗い夕暮の空氣の中に見せて、綺麗な細かい字を原稿紙の上に走らせて居る時分には、かうした運命が其前に待つて居ようとは清にも敏子にも思はれなかつた。華やかな希望、生々した將來、樂しさうな笑聲――其處にはまだ美しい理想の夢が覺まされずに殘されてあつた。永久に新しい樂しい春であつた。

『先生――』

かう言つては書齋へ入つて來て、藝術に關する清の話に聞き惚れるのがいつもの習ひであつた。親の言ふことは聞かなくとも、清の言葉には眞理でもあるかのやうに常に素直に耳を傾けて聞いた。其頃の無邪氣な態度や、理想と希望にかゞやいた表情ある眼や、藝術にやさしい身を縋らせようとした健氣な心や、さうしたさまゞの印象はまだはつきりと清の眼や心に殘つて居た。

田邊や、西さんや、それから清自身や、其時分の青年が泣いたり苦しんだりした戀がいつの間にか過ぎ去つて了つたやうに、矢張敏子や馬橋の戀も過ぎて行つて了ふのだ。永久に新しいと思ひ、樂しいと思つた春は時の間にかうして過ぎて行つて了ふのだ。かう思つた時の清は、電車の中で馬橋と膝を並べて居た時の清とは丸で別の人であつた。

『若い人の爲め――敏子の爲め。』

かう思つた清の眼の前には、何うした聯想か、自分の若い頃に逢つたり話したりした女の人々が歷々と見えて通つた。藤棚のある橋の袂の家に居た紫の帶をしめた女、友人の家で歌牌などでよく落合つた頰の肉附の好い色の白い女、旅の小川の畔でなでしこを取つて髮に挿して行つた女、海水浴場で懇意になつた眼の綺麗な早口な女――清は昔がこひしかつた。

『矢張ラヴの出來る人と出來ない人とがあるやうですねぇ。』

氣が附くと、山田はこんなことを言つて居た。

『前にも一度敏さんはそんなことがあつたんです……』かう續けて言つて、『御存じかも知れませんけれど、まだ女學院に居る時分』言ひかけて清の顏を見て、

『御存じですか。』

『え、聞いたことがあります。其人は今、新聞記者をしてゐるつて言ふぢやありませんか。』

『え。』

山田は笑つて見せた。

『けれど、別に何うの彼うのと言ふのぢやなかつたんでせう？』

『え、まだ其の頃は無邪氣でしたから、そんなこともなかつたんでせう。けれど學校では大分問題になつたんです。その爲め其の教師は辭職するやうなことになつたんですから。』

『さうですつてねえ。』

清の頭には此時ふとこの山田といふ青年と馬橋と敏子との關係が考へられた。親友のラヴの中に居て、三人で一緒に郊外に散歩に出かけたり、二人の戀の爲めにかうまで力を盡したりする男！　清はかう思つて、更に新しい感を抱いて、その山田の廣い額とはつきりした眼とを見た。

明るい日影のさし透つた一間は靜かであつた。

三十一

清の勤める社の三階の應接間に小石川の兄が訪ねて來たり、山田が一二度手紙を郊外の家に寄越したりして、話は段々圓滿な解決を告げるやうになつて來た。

『しかし敏子が何と言ふかわからない。貧乏な文學者の養女になるのは厭だと言ふかも知れない。それに馬橋との結婚に就いても異議があるかも知れない。兎に角當人の意見を聞いて見なければ駄目だ。』

清はかういふ意見を敏子の兄に話した。

『そんなことはないでせう。將來文學を以て世に立たうとする二人に取つては、貴方に親になつて貰ふと言ふことは、願つても出來ないことでせう。』兄はこんなことを言つて笑つた。巴渦の外に居る兄には細かい心理狀態が解らう筈はなかつた。

山田と一緒に馬橋が清の家を訪ねて來たのは、矢張霜の白い晴れた朝であつた。社にお出にならない中にと言つて、二人はかなり早く遣つて來た。

八疊の座敷で三人は快活に話した。複雜した事件が、事件の中に居る個人と個人との心持でズン〳〵展開して行く快さを誰も感じた。

『誤解して居たものですから。』

馬橋は申譯をするやうに言つた。

『それで、一體生れるのは何時です？』

かう清が訊いた。

馬橋は山田と顏を見合せて、笑つて見せて、

『何時つて？　よくは知りませんけれど……來年の一月か二月でせうと思ふんですが。』

『それぢやまだ汽車に乘つて歸つて來ても大丈夫ですね。』

『え、大丈夫でせうとも。』

『それで、君は何うする積です？』清は言葉の調子を改めて、『彼方で產をさせる積りですか、それとも此方につれて來るつもりですか。』

『何方にしたら好いでせうか。』

馬橋は清の顔を見て、次に山田の方を顧みた。

『上さんがよく世話をして呉れますから彼方でさせるのも好いとも思ひますけれど……』かう言つてまた清の方を見た。

心の底を讀まうとするやうな眼の細かい働きを清は感じた。

『何方が好いでせう、山田君。』

清はわざとかう訊いて見た。

『さァ。』

と山田は少し考へて、『それは……來られるのなら、東京の方が好いでせう。初めてゞすから、遠い處では、何かにつけて力になるものがなくつて淋しいでせうし、それに、東京なら、もしもの時に醫師もありますし……』

『僕もさう思ふ。』

清は賛成した。

『何うせ、君だつて、家を一つ持たなくつちやならないんだから。』山田は馬橋に言つた。

『さうする方が好いねえ、君。先生も、小石川の兄さんもさう言つて上さるんだし、君も來月から「報知」に入るやうになつて居るんだから、さうする方が好い。』

『さうしよう……』

馬橋も點頭いて見せた。

そんな話をして居る間に、婢は麥酒を盆に載せて持つて來た。

コップを引くり返して勸めながら、

『君は飲むんでせう？』

かう清が言ふと、

『一時は少し飲みましたけれど、此頃はやめて居ります。』

『まァ、好いさ、一杯やり給へ。』

かう言つて波々と注いで、今一つのに注がうとすると、山田は手で蓋をして、『私は駄目です。』

『まァ好いでせう、冬はビールは駄目だけれど。』

『本當に戴かないんですから』山田はかう云つたが、しかし清の強ひて注ぐのを留めもしなかつた。

硝子戸からさし込んで來る朝の日影は人々の手にした麥酒のコップに明るく照つた。霜に濡れた八つ手は冬枯の庭に際立つて綠濃く見られた。

『馬橋君はかなり飲んだんでせう。』

『え、一時はやりました。』失戀を醫す爲めといふ意味が其處に籠められてあつた。『一時は酒がなくつ

ては生きて居られないといふ位でした。それから道樂もやりました。』こんなことを言つて、『けれど吾々は貧乏ですから駄目です。』

『それで今はやめたんですか。』

『やめたと言ふこともないですけれど、自然にやめさせられたんですな……』コップを取つて半分ほど飲んで、『何うも酒つて言ふものは不思議ですな、飲まないで居れば飲めなくなる。』

清は馬橋が下に置いたコップに一杯に注ぎ足すと、

『そんなに飲むと醉つて了ひます。これから社に行かなくつちやなりませんから……。それに「報知」の編輯長にも今日來いと言はれて居ますから。』

『まア、好いさ！』

かう言つて酒を勸める清は、何處となく愉快さうに見えた。

『外に出て寒い空氣に當ると、すぐ醒めて了ふよ。』

こんなことも言つた。

やがて馬橋の顏も主人の顏も赤くなつて來た。段々いろ〳〵な話が出る。文壇がこれから何うなつて行くだらうとか、自然主義の本旨は何處にあるだらうとか、大陸では今何ういふ作者が何ういふ思潮を湧かせて居るだらうとか、さういふことが盡きずに二人の話頭に上つた。出版業に手を出しかけて居る山

田とは違つて、馬橋は作者と批評家とを兼ねたやうな話を得意にした。其の友達には近頃新聞雜誌に時時大陸文學の紹介の筆を執る人があつたり、新派の歌で頭角を現ほし始めた青年があつたりした。早稻田を出た新進作家もあつた。

『幸ひに、友達が皆な熱心ですから、一緒に遣るのに張合ひがあつて好いです。』かうしたことも言つた。

二人を材にした清の作品に就いては、

『あれを讀んだ時は、實際痛かつたですよ。さうです、あれは放浪して群馬に居た時、友達から君のことを書いたに違ひないつて送つて寄越して呉れました。しかし痛かつたのもほんの一時でした。』

賑かな笑聲が一間に充ちた。

其處に出て來た細君は、

『馬橋さん、お久し振でしたねえ。』

莞爾と笑ひながら言つた。

馬橋はそれでもきまりが悪いやうに、鳥渡居住ひを正して挨拶を返した。

敏子の書いたものに對する批評が出たのは、もう二人が暇を告げようとする頃であつた。何うも感情が出て主觀に陷り易くつて不可ない。かうした話も出た。

『何うも一體性質がさういふ風なんですな、』とも言つた。清は、『しかし折角遣り始めたんだから、捨てずに遣らせるやうにして呉れ給へ。』かう言つて馬橋の方を見た。敏子のことが脈々とした哀愁をまた清の胸に齎らして來た。

三十二

其年も押詰つて町の軒並に正月の飾竹がガサ〳〵と音を立てる頃、迎へに行つた馬橋と一緒に敏子が田舍から歸つて來るといふ報を清は耳にした。新しく馬橋の借りた家は牛込原町の奥で、牛肉屋だの、八百屋だの、夜は電燈の輝く唐物店だの、連つた通りの湯屋の角から左へ入つた處にあつた。二疊に六疊に三疊の三間、家賃は六圓五十錢、六疊の間に下宿の二階から運んで來た机やら本箱やらを並べて置いて、三疊の押入れに行李や夜具や汚れた衣類などを入れた。

經濟の點から、今一つは馬橋は留守勝で萬事不自由といふ點から、山田が暫く一緒に同居することになつて、これも矢張俥一臺位しかない荷物を今まで居た下宿から運んで來た。

生活に必要な勝手道具は、高くも安くも取揃へられるやうに出來て居た。手桶の代りにバケツ、竈の代りに七輪、釜も陶器の赤い素燒の安いのを買へばそれで結構飯が炊けた。馬橋が田舍へ敏子を迎へに行つて居る間、山田は水を汲んだり勝手元をしたりして自炊をした。『下宿屋に居るよりも、餘程暢氣で

好う御座んす。食ひたい時は食ふし、寢たい時は寢るし、隣の室が喧しいなどといふこともなし、此頃の暖かい午前に、緣側に寢ころんで日向ぼつこをして居ると、實に好い心地です。』山田はこんな暢氣なことを言つて居た。

敏子が歸つて來たといふ報知のあつた翌日であつた。國元から送籍の手續をした書類が廻して寄越された。敏子と清とが調印してそれを役場に出しさへすれば好いやうになつて居た。これで安心したといふ調子が、父親の手紙に歷々と見えて居た。歷代保つて來た名譽、町でも名高い家の系統、さうしたものが汚されず辱しめられずに濟んだのを喜ぶらしい文句が其處にもあつた。それから馬橋に籍を入れることに就いての不同意も繰返して書いてあつた。田舍に住んで居る人と都會に住んで居る人との心持の相違はそれにも解つた。

清は細君に實印を出させた。それは簞笥の底の衣類の下に藏つてあつた。祖父が腰に下げて歩いたといふ小さい革袋は手擦がして、象牙の根付はカタ〳〵と音を立てた。其處には一度彫られて磨り消された父親の印材も入れられてあつた。清は實印などを減多に用ゐることがなかつた。かれは祖父の名告を篆書にした古風な印を其まゝ自分の實印として屆けて置いた。

敏子を籍に入れることに就いては親戚は總べて不服であつた。――しかし清はそれを別に意にしなかつた。かれは書類を手に取つた。

……今回養女に貰ひ受け候間……

その一句にかれの心は引きよせられた。かれは不思議な緣を振返つて考へぬ譯には行かなかつた。かれは今一度其書類を飜して見て、さて實印を捺した。

『これで敏子さんさへ好ければそれで好いんだが、當人もいざとなると考へがあるかも知れない。丁度好い。お前、見舞がてら一つ今日歸りに寄つて、これを見せて、敏子さん自身の考へも聞いて來る方が好い。』

細君は丁度お三輪や姉の未亡人の家に御歳暮に行く準備をして居た。其處から原町は近かつた。

聞いて來た番地は三軒しかなかつた。大きな門のある家、その隣の二軒つゞきの長屋、其一軒が確かにそれらしく思はれた。しかし表札も名札もなかつた。格子戸は内から鍵がかけてあつた。

上り端に、女の駒下駄が一足置かれてあつた。色の褪めた襦珍の鼻緒には見覺えがなかつた。細君は今一度格子戸をガタ〳〵させて『御免なさい』と二三度おとづれて見た。返事はなかつた。

『留守かしらん。』細君はかう口に出して言つて見たが、何うも不在らしく思はれなかつた。大きな腹をして、世を忍ぶ身で、田舍から歸つて來る匆々、家を明けて出かけて歩くとも思はれない。細君はふと家と〳〵の間に細い小路のあるのを見付けて、溝板を踏んで裏へ廻つて見た。其處には井戸があつて

隣の物干棹に襁褓だの子供の着物などのかけ連ねられてあるのが見えた。紅白の絞の山茶花が見事に奥の家の塀の上に見えて居た。霜解の道に薄い日影がさした。

乘つて來た車夫は、細君が霜解に惱んで居るのを見て、其處に遣つて來て、ヅカ〳〵と裏口に廻つて大和障子の破れやら戸の隙間などから内の樣子を窺つて見て呉れた。やがて戻つて來て、『何うもお留守のやうです。……新しく引越していらつしやつた方には違ひないやうですけれど、何方もお留守のやうです。』

細君は表へ出て、格子戸の前に立つて今一度案内を乞うて見た。しかし矢張返事がないので、思ひ切つて、車に乘つて姉の未亡人の家へ行つた。

姉は相變らず莞爾して居た。歳の暮で裁縫が忙しく、片時も針の手を留める暇はなかつた。『お前、お氣の毒だけれど、其處の茶簞笥の上の處に、昨日貰つたカステラがあるよ。それからお茶も淹れて飲んでお呉れよ。お客樣を使つて濟まないけれど……』かう言つて姉は笑つて、『お前などは暢氣で好いねえ……歳の暮が來ても忙しいなんて言ふことはありはしまい。私などはこれから大晦日の夜の十二時まではぶつゝり坐つたつきりだからねえ。』

『却つて、張合があつて好いのよ。姉さんのやうに忙しい方が……』

氣の置けない姉妹はこんなことを言つて茶を飲んだ。

敏子の話をすると、

『何うしたんだらうね、本當に。家が違つたんぢやないかねえ。』

『さうかも知れないけれど……まさかさうでもないだらうと思ふの。屹度、一寸其處等へ買物にでも行つた留守だつたかも知れない。歸りに今一度寄つて見ようと思ふの……』

『さうかも知れないよ。あの人はよく買物に出るから……それでもまア、お前の家でさうしてやれば敏子さんも仕合せさ。』

『それは本當にさうよ。本當は家では構はないつて言つても仕方がないんだから。』

隣のお三輪も暢氣なことを言つて居た。其話を聞いて、『敏子さんも、面白い幕を打ちなさつたもんぢやね。』こんなことを言つて笑つた。

友達の處から丁度歸つて來た秀子は、『さう、敏子さん歸つた來たの？　其處にゐるの？』眼を丸くして言つた。

細君は歸りに今一度子敏の家に寄つて見ることにした。

矢張表の格子戸の鍵はかゝつて居た。駒下駄も其儘になつて居た。先刻と違つたやうな氣勢は何處にも見出されなかつた。

細君は思切つて、裏の大和障子を明けて家の内へ入つて見た。勝手には七輪と赤い素燒の釜とが置いてあつて、バケツには水が半分ほど汲まれてある。其處に出してあるお膳は、まだ洗はずにだらしなく散らばしてあつた。

處々破れた中じきりの障子を明けて、細君は其處から六疊の座敷へ入つて行つた。矢張誰も居なかつた。西洋の書籍やら雜誌やらのギッシリ詰つた本箱の傍に机が置かれて、其上に原稿紙が二三枚載せてあつて、棧の古くなつた障子の硝子から更紗の色の褪めた座蒲團の上に日影が線をなして射し込んで居た。緣側の隅にある手水鉢の傍では、南天の赤い實を小鳥が頻りに啄いて居たが、障子を明けると、輕い羽音を立てゝ慌てゝ飛んで行つた。

玄關の二疊はその六疊に續いて居た。其處からは表の通りに待つてゐる車が見えた。

『本當に留守なのか知らん……不用心な……若い人は暢氣だねえ……』こんなことを思つて、後を振返つた細君は、其處に勝手と並んで、別に一と間部屋のあるのを發見した。座敷との間を障子で仕切つてあつた。

其處は暗かつた。

其の障子を明けて見ようと思つた細君は、俄かにある不安の押寄せて來るのを感じた。案内を乞うても乞うても返事がなかつた。もしや……と思つた胸は無氣味でもあり怖しくもあつた。

それでも細君はその障子を靜かに明けて見た。明るい處から暗い處に入つた眼は、其處にある何物をも暫しははつきりと見ることが出來なかつた。何だか黑い大きいものが眼に附いたと思つたが、それが蒲團で、夜着を殆ど冠るやうにして、庇髪の處だけを出して、敏子が寢て居るのであるといふことは急には解らなかつた。

細君は暫くぢつとして立つて居た。死んで居るのではないかと思つてゾッとした。

『敏子さん、敏子さん。』

暫くしてから、細君は其傍に坐つて、蒲團の上から搖り起した。

『ァ、ァ。』

と言つたと思ふと、敏子は眼をぱつちり明いて、恐ろしい幻覺でも見たやうな顏をして四邊を見廻した。

『私ですよ、敏子さん。』

細君がかう言つて顏を出すと、敏子は吃驚したやうに、俄かに夜着をはね退けて、其まゝ蒲團の上に起き返つた。蒼ざめた顏に解け懸つた髪が亂れて、ごろ寢をした錦仙の羽織は皺だらけになつて居た。帶は緊めて居なかつた。

『何うかしたの？　敏子さん。』

敏子は默つて打伏になつた。急には顏を擧げなかつた。

『本當に何うかなすつたの？』

『いゝえ。』

敏子は辛うじてかう言つた。いつもなら『奧さん、まァ』とか『まァ、何うして奧さん』とか言ふのであるが、今日はさうした言葉も出なかつた。怖しい夢から覺めた人のやうに唯惘然として居た。

急に、

『奧さん、まァ、彼方に入らして居て下さい。こんな處では御挨拶も出來ませんから。』

敏子がかう言ふので、細君は座敷の方へ來て坐つた。

帶を締めたり何かするやうな氣勢が暫く聞えて居たが、やがて其處へ出て來た敏子の顏は元氣がなかつた。

細君と敏子との間に交されるいつものやうな快活な調子には何うしてもなれなかつた。細君も眞面目な顏をして居た。敏子は唯低頭いて居た。

逢つたら、すぐ打解けて、人を心配させた恨みをも言つて遣らう、身を隱して居た間の一伍一什をも聞いて遣らう、產に就いての相談對手にもなつて遣らう。かういろ〳〵に思つて細君は遣つて來た。しかしさうした氣分にはなれなかつた。

『何んなに心配したか知れませんでしたよ。田舍の母樣なども、それは御心配でしたよ。』

かう言つた細君の言葉にも何處か打解けないところがあつた。

『何からお話しして、お詫をして好いんですか、先生にも大變に御迷惑をかけて――』

敏子はそれでも小聲でかう言つて細君の方を見た。すぐ低頭いた顏には、肉の顫へが見えた。見馴れた不斷着の銘仙の着物に、メリンスの色の褪めた帶を緊めて居た。いつもはめてゐた純金の指環はもうなかつた。

七月の腹は著るしく眼に立つた。皮膚の色もいやに黃ばんで見えた。眼の周圍にも暗い紫の影が出來た。

二人とも胸にあることを充分に言へないといふ風であつた。座はやゝともすると沈默に落ちた。敏子は視線を膝の邊に落して、白い額と痩せた頰とを此方に見せて、絕えず物思はしげな態度をして居た。

『本當に、何うもなすつたんぢやないんでせう?』

『えゝ。』

『一時間ばかり前にもお訪ねしたんですけれど、矢張鍵がかゝつて居て――』細君は其話を始めて見たが、敏子にはその相手になる餘裕がなかつた。

『曉方、少しおなかが痛んだもんですから。』

かう言つたきりで、話がいつものやうに續かなかつた。

細君はやがて風呂敷包の中から、其處で買つて來た菓子折を出した。

『ほんのお見舞のしるしよ。』

『奧さん、こんな御心配は……本當にお世話にばかりなつて。』

敏子の聲は曇つて聞えた。下唇を嚙みしめて、胸に集つて來る感情を押へるといふやうな風が歷々と見えた。

『それから、あの……』と細君は風呂敷の奧に包んで來た書類を其處に出して、

『お國から籍の屆が來たんですの……。それで宅でね、よく敏子さんの心持も聞いて來いつて、そして敏子さんが好いなら、判を捺して貰つて來いつて吩咐けられて來たんですの。』

敏子は書類を手に取つたが、それを飜して見るでもなかつた。其儘傍に置いて、

『奧さん、私、今、判がないのよ……』

かう言つて細君の方を見て、

『あとで判を捺して、すぐ郵便で送るやうにしますから。』

と言葉を續けた。

『え、え、今ぢやなくつたつて好いんですよ。一生のことですから、貴女もよく考へて見てから。』

細君はわざと氣輕に笑つて見せた。

『本當にお世話にばかりなつて……』

少時してから、やゝ氣が落附いたといふ風で敏子は言つた。

しかし打解けた話はつひに出來なかつた。かうした處を訪ねられたことは若い身に取つて餘りに突然でもあり、氣恥かしくもあり、胸苦しくもあつた。敏子の心臟の鼓動は容易に靜まらなかつた。

『それぢや又伺ひますから。』

細君はやがて暇を告げた。

『さう、奥さん……もう歸るの？　本當にかうしてお目にかゝらうとは思ひませんでしたのねぇ……何にも……お茶も上げることも出來ないで……』かう言つて立つて來た敏子の聲には、もう堪らなくなつたといふやうな調子が籠つた。眼には涙が見えた。

『本當に、餘り心配しない方が好う御座んすよ。……おなかに觸るといけないから。』かう言つた細君の胸には女の同情が漲るやうに起つて來た。

『本當に心配しない方が好くつてよ。』

細君は敏子の蒼いやつれた顔をぢつと見て、かう繰返して言つた。

『奥さん！』

かう言つた敏子は、俄かにほろ〳〵と涙を滴した。『奥さん！』急にエクスタシイに陷つたといふやうに、いきなり細君の手を執つて、堅く握りしめて、

『奥さん、先生によろしくね！』

涙に潤つた敏子の眼には、烈しい一種の表情が見えた。

細君が暇を告げて車に乘る間、敏子は格子戸の處に立つて、其の蒼白い顏を此方に見せて居た。午近い靜かな通りには、下駄の齒入が鼓を叩いて通つたり、豆腐屋が鈴を鳴して觸聲を立てゝ行つたりした。

車夫が梶棒を上げた時『左樣なら。それではお大事にね、』と細君は聲をかけた。敏子は挨拶を返した。女の經驗する姙娠の時の心の狀態などを、細君は車の上で考へて居た。

其日の夕暮、清が社から歸つて來るのを待受けて、細君は敏子に逢つた一伍一什を詳しく話して聞かせた。

『もう、餘程目に立つやうになりました。』

歸り際に、急に手を握つた話もして聞かせて、

『本當に、敏子さん、感情の强い人ねぇ……。かう私の手を堅く握つて、涙をぽろ〳〵こぼすんですもの……。私も氣の毒になつて了ひました。本當に不思議な緣ねぇ。』